

山梨県立大学地域研究交流センター 支援事業

やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト

2015年度研究報告書

◆ 目 次 ◆

◇ プロジェクトの概要と2015年度の活動について 2~4

第1章 やまなしの女性史を学ぶ (講座記録)

1. 「ふるさと一宮をうたい続けた詩人 ——母、堀内幸枝を語る」 5~21
講師：谷口典子 (東日本国際大学名誉教授・詩人)
コーディネーター：吉原五鈴子
(元県立男女共同参画推進センター館長・プロジェクトメンバー)
2. 「山梨県女子教育のさきがけ ——内藤ますとその周辺」 22~42
講師：山中淑子 (プロジェクトメンバー)
コーディネーター：池田政子 (山梨県立大学名誉教授・プロジェクト代表)

第2章 「全国女性史研究交流のつどい in 岩手」参加報告

1. 「次世代につなぐ、性と生殖のヘルスエンパワメント 45~48
~昭和の母子健康センターにおける出産体験当事者の語りから」
* 「性と生殖」分科会での報告
2. 「全国女性史交流のつどい in 岩手」に参加して 49~52

第3章 聞き書き

1. 娘が語る 詩人・堀内幸枝：堀内幸枝さん (語り：谷口典子さん) 55~62
2. 病人に寄り添う友として：植松喜久江さん 63~68
3. 山梨県女性初の専門職司書として生きる：浅川玲子さん 69~78

第4章 個人史年表

1. 花輪相子さん (バス・電車の車掌、化粧品販売) 81~84
 2. 名取喜美枝さん (美容師、美容室経営) 85~88
-
-

プロジェクトの概要と2015年度の活動について

池田政子（プロジェクト代表）

◇ プロジェクトの目的と活動経過

山梨県は、全国的に『〇〇県女性史』が刊行された1980～90年代にも、『山梨女性史ノート』（年表3編：明治編～昭和前期編）が刊行されたのみで、通史としての女性史が刊行されていない。山梨の歴史を、公的な記録に残りにくい女性たちの暮らしや生き方という視点から見直していく作業は、地域文化の発掘のためにも必須である。

「やまなし地域女性史『聞き書き』プロジェクト」は、2005年度から4年間、地域研究交流センターの研究プロジェクトとして実施された「やまなし地域女性史研究プロジェクト」の「聞き書き」グループが、2009年度はセンター支援プロジェクトとして、また2010年度は「センター共同研究」に採用され、研究・啓発活動を継続してきたものであり、2011年度～2013年度についてはセンター支援プロジェクトとして活動を行った。2014年度は再び「地域研究交流センター地域研究事業」に採用され、プロジェクトの第3期1年目と位置付けて、研究成果の発信と『証言集 第3集』（2016年度刊行予定）に向けた活動を行った。

本プロジェクトは、女性たちによって「語られたこと」を主な材料とし、暮らしのあり方、教育、職業、子産み・子育てなどについて個人の事例を収集し、山梨県女性史の研究に寄与しようとするものである。農業、製糸工女、機織、医師、助産婦、教師など、さまざまな職業に従事してきた、主として大正から昭和初期生まれの女性たちの生の軌跡を「聞き書き」としてまとめ記録に残して個人史を集積しつつ、職業という視角からジェンダーの視点で山梨の女性像を描き出すことを目的としている。そのため、聞き取り調査と共に、『山梨女性史ノート』の記事から職業別・分野別に関連事項を抽出してあらたな「年表」を再構成し、エクセル・ファイルとしてデータベース化する作業も行ってきた。同時にこのような文献資料によって、医師、製糸工女、助産婦などについて概観する研究を「報告書」にまとめてきた。

2010年3月には、それまでの聞き取り資料をまとめ、『「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち』（山梨県立大学＊やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト編、発行：山梨県立大学）を刊行した（同年11月に第二版発行）。また同年12月には山梨日日新聞で『証言集』をもとにした紹介記事——【証言集「伝えたい 山梨の女性たち」より 『次代へのことづて』】が14回の連載記事となり、翌2011年2～3月には山梨県立博物館「やまなし研究広場」において展示【『「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち——「女医」を中心に】を行うなど、県民の地域女性史への関心を高めるための情報発信も行ってきた。

また、県立男女共同参画推進センターとの共催による講座『やまなしの女性史を学ぶ』を2006年度から毎年実施してきた。この講座は、山梨県の女性史の構築に向けた公開研究会として位置づけるとともに、プロジェクトの研究結果を地域に還元し、県民の関心を高めるための啓発活動としての意味を持つ。

2011年度からは、美容師、保母（現在は保育士）など戦後に制度が整備され、女性の職業として確立されていった分野、また議員のように戦後初めて女性が手にした職業にも注目した聞き取りを行い、公務員、薬剤師、僧侶、保健婦、郵便局長、婦人会長など23人を含む『「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち 第2集』を2014年3月に刊行した。2014年10月には、これまでの活動・成果が認められ、「山人会」より「第28回前田晁文化賞」を受賞した。

◇ 2015年度の活動

今年度はプロジェクトの第3期2年目として、研究成果の発信と『証言集 第3集』(2016年度刊行予定)に向け、次の事業・活動を行った。

1. 研究成果の発信と研究交流

3.11大震災の大被害を受けた岩手県で開かれた「第12回 全国女性史研究交流のつどい in 岩手 次世代に受け渡す女性史を ～岩手(遠野・大槌・宮古)から～」にプロジェクトメンバー6人が参加し、伏見正江教授が分科会での報告を行った。

■日時・会場

- 2015年10月9日(金): 遠野市 あえりあ遠野
10日(土): 大槌町 大槌中央公民館
11日(日): 宮古市 岩手県立大学宮古短期大学

■報告と参加

○遠野会場 分科会「戦中・戦後70年(1)」への参加

- ①戦後日本の平和主義と女たちの平和思想 — 「8.15」から「3.11」をむすんで考える—
..... 米田佐代子: NPO 平塚らいてうの会
②遠野高女の勤労働員 箱石邦夫: 戦中・戦後を語り継ぐ会(いわて)
③戦中の少女たちの勤労働員の記録について..... 関 千枝子

○大槌会場への参加

- ①記念講演「小原麗子『自分の生を編む』 — 「おなご」、そして「戦争」 —
..... 大門正克: 横浜国立大学
②シンポジウム「3度の津波と戦中、戦後を語る」
..... 鈴木京子(大槌町)・千田ハル(釜石市)・藤間千雅乃(釜石市)

○宮古会場 分科会「性と生殖」での報告

- 「次世代につなぐ、性と生殖のヘルスエンパワメント
～昭和の母子健康センターにおける出産体験当事者の語りから～」 *本報告書に再掲

2. 第10回「やまなしの女性史を学ぶ」連続公開講座の実施

昨年まで9年間、県立男女共同参画推進センター(ぴゅあ総合)との連携により「やまなしの女性史を学ぶ」講座を公開研究会として開催してきた。10年目となった今年度は次の2回を企画・実施した。

第1回 2015年11月15日(日) 午後1時半～4時(会場:ぴゅあ総合)

「ふるさと一宮をうたい続けた詩人 ——母、堀内幸枝を語る」

講師: 谷口典子(東日本国際大学名誉教授)

コーディネーター: 吉原五鈴子

(元県立男女共同参画推進センター館長・プロジェクトメンバー)

第2回 2015年11月22日(日) 午後1時半～4時(会場:ぴゅあ総合)

「山梨県女子教育のさきがけ ——内藤ますとその周辺」

講師: 山中淑子(プロジェクトメンバー)

コーディネーター: 池田政子(山梨県立大学名誉教授・プロジェクト代表)

第1回は28名、第2回は37名が受講した。受講者の満足度については、2回とも、アンケート回答者の全員が「満足」または「まあ満足」と回答し、次のような感想が寄せられた。

<第1回>知らないことが多く、大変勉強になりました。／亡き母と同じ年に生まれ、同じ山梨高女で学び、婚家を追い出され父とともに苦勞した母の思い、同世代の女性の心の叫びを聞くことができました。／私も一宮町に住んでおりました、この講座を学ばせていただいて、知り得ないこともわかりとてもよかったです。

<第2回>素晴らしい研究の発表をありがとうございました。／とてもわかりやすく、新知識を得られてよかったです。／大変興味深く拝聴しました。深く多岐にわたり「内藤ます」について調査・研究されており、もっと広く多くの人々の知るところになれば更に良いと思いました。／とてもよかったです。学ぶことの多い機会でした。以前歴史は苦手だったのですが、歴史の面白さを知りました。

なお、本講座は笛吹市教育委員会および山梨県詩人会の後援を受けて開催された。

3. 聞き取り調査による個人史の蓄積と「聞き書き」の作成

『証言集 第3集』の刊行に向け、今年度は新たに、電車車掌・化粧品セールス、詩人、美容師、刑務所看守などの方々やその家族の聞き取りを行った。また、昨年度の聞き取りをもとに、『第3集』のための「聞き書き」原稿の作成を進めた。

4. 本報告書の作成と配布

いずれの稿も研究協力員であるプロジェクトメンバーとともに作業を行った。

最後に、今年度の調査等に際し時間を割いて協力していただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

2015年度 プロジェクト・メンバー

池田政子（山梨県立大学地域研究交流センター・プロジェクト代表）

伏見正江（山梨県立大学看護学部）

山中淑子・三科恵美子・藤本ひろみ・清水武子（甲府市）／佐々木文子（南アルプス市） 久保川正美・小野鈴枝（山梨市）／古明地喜代美（甲州市）／立川聖子（昭和町） 鈴木因子・相澤正子・吉原五鈴子（笛吹市）／中澤勝子（中央市）／櫻井をさみ（忍野村） 清水絹代（都留市）／八巻美弥子（北杜市）／伊藤真理（伊東市）
--

第 1 章

やまなしの女性史を学ぶ

1. 「ふるさと一宮をうたい続けた詩人 ——母、堀内幸枝を語る」

講師：谷口典子（東日本国際大学名誉教授・詩人）

2. 「山梨県女子教育のさきがけ ——内藤ますとその周辺」

講師：山中淑子（プロジェクトメンバー）

- * 本章は、山梨県立男女共同参画推進センターとの共催により実施された「山梨県立大学地域研究交流センター『やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト』連続公開講座」の内容を、吉原五鈴子（第1回）および山中淑子（第2回）が原稿作成し、第1回については講師の了解を得て掲載したものである。
- * 上記1は、第1回講座（2015年11月15日）の講演記録、2は第2回講座（2015年11月22日）の講演を研究レポートの形で起稿したものである。
- * 第1回のコーディネーターは吉原五鈴子（山梨県立男女共同参画推進センター・元館長）
第2回のコーディネーターは池田政子（プロジェクト代表・地域研究交流センター特任教授）

平成27年度ぴゅあ総合普及啓発事業

山梨県立大学地域研究交流センター「やまなし地域女性史『聞き書き』プロジェクト」連続公開講座

やまなしの女性史を学ぶ

さちえ
堀内幸枝 * 内藤ます

本講座 10 年目の今年は、約 100 年の時を隔てて誕生した二人の山梨の女性を取り上げます。

1920 年、一宮町市之蔵の豪農の長女として生まれた堀内幸枝は、県立山梨高女の女学生であった頃から詩作を始め、詩集『村のアルバム』など、故郷一宮をうたい続けた現代の女性詩人のさきがけです。平成 25 年の山梨国民文化祭では「堀内幸枝の詩の世界に遊ぶ」というテーマで「現代詩の祭典」が開催されました。第 1 回講座では、幸枝の姿をずっと見続け、経済学者でありながら詩人としても活躍してきた長女の谷口典子さんに、詩人として、母として、また妻としての幸枝を、その詩も紹介しながら語っていただきます。

第 2 回講座の内藤ますは幸枝誕生の約 100 年前、1823 年に甲府で生まれました。今年開館した県立近代人物館には山梨に貢献した人物 50 人が取り上げられましたが、そのうち女性はたった 6 人。ますは、その数少ない女性のうちの一人です。波乱に富んだ人生を送られますが、明治初期の山梨の女子教育に多大な貢献をしました。夫や息子（内藤伝右衛門）を支え、現在の山梨日日新聞の土台づくりにも寄与しますの生涯を紹介します。

【第 1 回】「ふるさと一宮をうたい続けた詩人 — 母、堀内幸枝を語る」

講 師：谷口典子（東日本国際大学名誉教授・詩人）

コーディネーター：吉原五鈴子（元県立男女共同参画推進センター館長・プロジェクトメンバー）

11 月 15 日（日）午後 1：30～4：00 小研修室

【第 2 回】「山梨県女子教育のさきがけ — 内藤ますとその周辺」

講 師：山中淑子（やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト）

コーディネーター：池田政子（山梨県立大学名誉教授・プロジェクト代表）

11 月 22 日（日）午後 1：30～4：00 小研修室

■対象：どなたでも（要事前予約）■定員：40 名 ■受講無料

後援：笛吹市教育委員会・山梨県詩人会

主催・お問合せ

山梨県立男女共同参画推進センター

ぴゅあ総合

TEL:055-235-4171 FAX:055-235-1077

〒400-0862 甲府市朝気 1-2-2

sogoevent@yamanashi-bunka.or.jp



「ぴゅあ総合フェイスブック」で検索！
「いいね」すると最新情報が受け取れます。

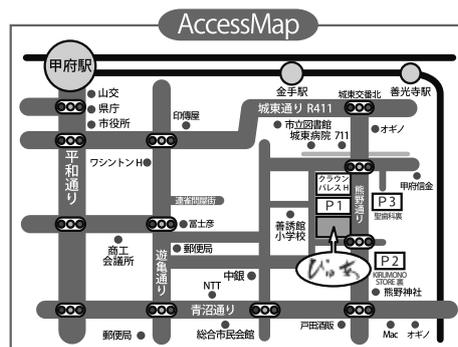
無料郵便あります。



6か月～就学前
3日前までに
ご予約ください。



ツイッターはじめました！



1. 「ふるさと一宮をうたい続けた詩人— 母、堀内幸枝を語る」

講 師 谷口 典子（東日本国際大学名誉教授・詩人）

コーディネーター 吉原五鈴子

（元県立男女共同参画推進センター館長・プロジェクトメンバー）

【吉原】皆さま、こんにちは。今回のコーディネーターを務めさせて頂く吉原五鈴子と申します。私になぜこの役をお受けしたかと言いますと、これからお話し頂く詩人堀内幸枝さんのふるさと市之蔵村がある一宮町（現笛吹市一宮町）に、私も住んでいることがひとつ。2つ目は、私は現在県立山梨高校同窓会の役員を務めておりますが、堀内幸枝さんも昔日、未だ山梨高等女学校と言っていた時代に、本校に学ばれた同窓生のお一人であるということ。更には2年前、堀内様に、本校同窓会だよりへの御寄稿をお願いした経過があったこと等によりましょうか。

一宮町は、御坂山系から流れ下る金川と、甲州市大和町の奥・天目山から流れ下る日川に挟まれた扇状地に位置しております。桃・葡萄の産地として有名であります。堀内さんのお生まれになりましたふるさと市之蔵村はこの町の最南端、金川に沿った小集落です。

さて、「山梨のふるさと一宮をうたい続けた詩人—母、堀内幸枝を語る」というタイトルでお話下さる講師谷口典子様と市之蔵の現在を少々紹介させていただきます。

まず、写真1が堀内幸枝さんの生家を外から撮らせて頂いたものです。周りをぐるりと黒板壁が取り囲んでおります。それから奥にお住まい見えますが、大正9年の堀内幸枝さんが駆け回った頃のお住まいは藁屋根であったと随筆の中に書かれております。

屋敷の四方が川で囲まれていまして、この川は結構傾斜があり流れが急なのですね。皆さん覚えがありますでしょうか。里芋などの皮を剥く芋車が盛んに回っていたようです。

お宅の中庭にはこぢんまりした池がございます（写真2）ここに鯉がはねる音など堀内さんが随筆の中に記しております。

市之蔵は、本当に小さな集落で、随筆の中では80戸

写真1



写真2



あったと記されておりますが、役場に行ってお尋ねしたところ現在の戸数は 101 戸になっているそうです。このように世の中の状況がめまぐるしく変わっている中で約 90 年も経っている今でもプラス 20 という戸数は、それなりの意味を持っているのかと思いました。

山の麓ということで道は坂になっていますが、昔日とは大分緩やかになったとのこと。

写真 3 は、平成 8 年、一宮町が笛吹市として合併する以前、一宮浅間神社の鳥居を入りましてすぐ右手に、堀内さんの歌碑がございます。「桃の花」というとても素敵な詩が刻まれております。

写真 3

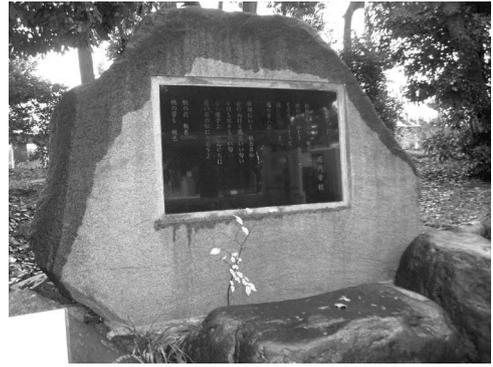


写真 4



写真 4 は、閉ざされた市之蔵という村に、堀内さんが生まれ、お育ちになった頃に、ご本人が一日に数回近くの山に登られたのだそうです。その山の麓で、悟生家の 500m ほど東側にあります「水守り地蔵」というお地蔵さんです。とってもいい顔です。何か抱きしめたいような暖かさを覚えます。

写真 5



当時とは市之蔵も、様変わりをしてはおりません。先程戸数は 20 戸ほどしか増えていないと申しましたが、市之蔵橋という橋のもとに、写真 5 のように近代建築の大きな工場が建てられております。電子機器の部品をつくっているこうじょうとのことで、このような工場も市之蔵に建てられている昨今でございます。

お恥ずかしいことですが、私は堀内さんと同郷ながら、一昨年「山梨国文祭」まで、その詩作等を殆ど知りませんでした。ですから本日の講座をとても楽しみにしておりました。では簡単に、講師谷口典子様のご紹介をさせていただきます。

谷口様は、堀内幸枝さんの長女でいらっしゃいます。本日は、東京都の西東京市からお越し頂きまして、ありがとうございました。幸枝さんの作品の中にもいろいろご本人のことが書かれております。日米安全保障条約が締結されたというあの頃、ちょうど谷口さんは高校生でいらして、そのデモを見に行かれた時に、母親である幸枝さんがとても心配されていたという話も、後程出てくるかと思えます。その後、大学で経済学を専攻なさったそうです。結婚後、子育てと仕事をしながら、学士入学と言うことで文学のご専攻もなされた。さらに勉学を深められて、40 代になられてから大学院に通われて経済学博士をお取りになられた。今は、東日本国際大学の名誉教授としてご活躍されております。その傍ら日本ペンクラブの会員、日本文芸家協会の会員、現代詩人会の会員、日本詩人クラブの会員として詩作を続けられているとのこと。どんなにか素敵な話をお聞かせ頂けるかと期待しております。

それでは谷口様、よろしくお願ひ致します。

【谷口】始めまして、谷口典子と申します。先程、池田先生からも吉原様からも、母のことは、今までほとんど知ることがなかったとお聞きしました。それも当然のことだと思います。まず、詩というのは文学のジャンルの中でも大変狭いものです。母がこの一宮を心のふるさととして、うたい続けてきたという意味ではそのとおりなのですが、20代の前半で、東京の方に出てしまいましたため、その後は、こちらとの縁としては、慕ってはおりましたが、公の場には出ることがなくなったからではないでしょうか。そういう意味で、皆さまに知っていただく機会がありませんでしたので、今回、私としても母に代わりまして、ありがたいという思いと共に、びっくりしております。これも山梨の女性史を学ぶというプロジェクトを立ち上げた皆さまのおかげです。

又、プロジェクトの皆さまとお話をさせて頂く中で、こんなにも母を理解して頂き、私よりもよっぽどわかって頂いていることに恐縮と同時に、たいへんありがたく思っております。本日のタイトルは、「ふるさと一宮をうたい続けた詩人—母、堀内幸枝を語る」となっておりますので、そのことを語る上では、やはり詩など母が書いたものを通じてお話しさせて頂く方が良いかと思っておりますので、それらを紹介させて頂きながら進めたいと思います。

<母にとってのふるさと>

母は東京に出てしまった、と言いますか出ざるを得なかったことがあったもので、私は東京で生まれました。そして23歳で結婚して、実家を離れたのですが、それまではずっと新宿に住んでいました。母が最初に出てきたのは日暮里というところですが、そこから引っ越してきて20年近く、私が母を間近に見ていたのはその時です。その時に私自身も、母の姿を見て感じたり、考えたりしたことを書かせて頂いたのが、「夜半」です。これは、私がだいぶ経ってからその時のことを思い出して書いたものです。

夜半(よわ)

母は 詩を書いてきました／でも 母から一度も／
詩を教えてもらったことはありません／詩って なに／／
母が 詩をかいているらしい夜半／わたしは決して近寄りませんでした／
そして 決して言いませんでした／おかあさん お腹すいた と／
おかあさん 寂しい と／／
詩を書いている母の手元には／もっと寂しい もっと悲しい／
寂々とした影が／見えたような気がしたから／原稿用紙に書きつけられる／
文字の音がしたような気がしたから／／
あなたの娘になって／私の淋しさが／あなたを求めるほどに／もっと寂しくなっていったわたしを／あなたは知っていたでしょうか／ただ 娘として 言葉ではなく／見ていてほしかった／／
母よ／ 私が一心にあなたを見ていた時／あなたはいつも 彼方を見つめ／澄んだ目で 遠い目をして／何かを見つめていた／それはどこだったのですか／それはだれだったのですか／／

(谷口典子)

こんな想いが、当時の心境を踏まえたものでした。母が一番求めていたもの、それはふるさと一宮あるいは市之蔵と、そこにいたさまざまな人々だったのです。

次は外からみた母の姿を表したものです。

ふるさと

母が ふるさに求めたもの／それは 誰も寄せ付けない／自分だけの聖地／／
そこには 誰も踏み込ませたくない／誰にも許したくない／自分だけの聖地／／
ほんとうは そこは／ 『嵐が丘』のヒースの原にも似た荒野／でも 心の中にいつも／ヒース
クリフを求めてきた山峡の娘は／この原をこよなく愛し／石ころと赤土だらけの扇状地も／
山から押し出された／岩石ばかりの枯れた河原も／全ては自分だけのもの／そこには 誰も踏
み込ませはしない／／
そして今も 冬の寒い夜／背戸の梢を渡る風に乗って／貧しさゆえに 不毛の地ゆえに／ 外
地へと移住していった／あの日の少年の声を聞いているのです／／

(谷口典子)

これはあくまでも私の思いであって、母の心の中を覗いたものではありません。ただふるさとを、う
さぎ追いかの山という感じで想っていただけではないだろう。その思いがどこから出てきたのらう
か。いくつか私にも投影されたものを見てみたいと思っています。

<東京での暮らしと母の詩>

もう一度、母を語るに戻ります。新宿の地は、当時中央線を走る汽車の始発駅だったこともあり、故
郷に一番近いところだったと思います。また新宿にいたことで、学校から帰ると、よく詩人の方が集ま
って侃々諤々の議論をしていました。今思うとこれまで母が属してきた三好達治を中心とした四季派は
「近代詩」といわれるものであって、戦後は「現代詩」へと衣替えを始めた時だったため、母のふるさ
とをうたう叙情詩とは合わなくなってきたことによる議論だったようです。

新宿というのは東京の中でも中心で、いろんな線が集まってきているので、とても便利な所でした。
私が学校から帰ると、多くの詩人の方たちが家に来てくださっていた。私はそのときは、意味も内容も
勿論わからなかったので、ただ、静かに自分で宿題をしていた。その時のことを「遠い日の台所」とし
て書かせて頂きました。

遠い日の台所

学校から帰ると／何となく漂ってくる におい／空けばなしの部屋を／
風が通り抜けていく／／
玄関横の／薄暗い台所のガラス戸の隙間から／覗いてはいけないうな／
そっとカバンを置いて宿題をする／／
あとから帰ってきた妹が／ガラス戸をパッと開け／無造作に入っていく／
しばらくすると 両手には／ こぼれんばかりの菓子が／／
勢いよく閉められた戸の／跳ね返った隙間から たばこのにおい／／
奥には円陣になった男の人たち／まんなかに広げられた駄菓子の袋から／
せんべいがのぞいている／そのなかに母がいた／みな怒鳴っているような／勢いのいい声は
いつまでもつづいていた／／
夕方になると 突然／買い物かごを下げた母が／台所から飛び出してきた／／
あれから何年たっただろう／いつのまにか台所はからっぽになった／
あの時の若い詩人たちも／／

母は今 台所でみそ汁をつくっている／／

(谷口典子)

<母の詩の二面性>

私がちょうど小学生の頃、このような形で母は、詩の世界の中に没頭しつつ、別の意味でいうと悩みながら過ごした時期でした。その母がふるさとで、自分の思いのままに幸せを享受していたとき、そこには、母独特のものがあつたのだと思います。母の詩からとつたものですが、「紅い花」があります。これは私がとても好きな詩です。ある意味では母の当時の二面性、二つの要素、相克というか、二律背反というか、いろいろないい方ができますが、そういう中で苦しんできたことが顕れています。ここには母のある一面が出ています。

紅い花

ここ御坂の峠が国道に通ずる谷間に不思議な少女がいた。
峠が村へ傾斜している裏側は清水も湧かなければ、鳥も来ない。
雨の日は血を流したように一筋続く彼岸花の道を緋い小路と呼んで、いつでも必ず唾のように立っている一人の少女がいた。その少女は病身だった。一切の医療の効とてなく、一年の大半は背を丸め藁葺の暗い廂の奥にいた。彼岸花の咲く季節が来ると毎年不思議と元気を取り戻した。彼岸花は青白い少女の胸に忽ち怪しい緋色の夢を流した。病的な少女はめらめら燃え立つ毒の夢をたくさん食べて元気になっていった。夕焼け雲が山の斜面に広がると一筋の道は火の海になった。瘦身な少女の体に俄かに霊鬼が籠り、瞳には赤い雲が撥ねて、赤い涙でたくさんの詩を綴った。小雨の降る日も廂の奥の少女は緋い道に髪を引っ張られてならなかった。濡れるのもかまわず歩き廻ると、紅い夢は雫となった。風が立ち、或る急な寒さが襲って彼岸花が色褪せた朝、緋い小道で一人の少女が死んでいた。彼岸花の色をたくさん吸って真紅な体で毒の夢をたくさん吐いて、死んでいた。
あくる夕、村に賑やかな祝宴があつた。
一人の少女の嫁ぐ酒盛りだった——彼岸花の押し花のある詩集を隠す少女だった。

(堀内幸枝「紫の時間」)

ある意味では、この部分に母の一面があると思います。母が結婚した 21、22 歳の時に心の中にあつたことが、この「紅い花」に出ていると思うのです。もう一つ、その気持ちが出ている詩に、「哀れな少女と娘の記」があります。最後の段落に嫁ぐときのことが出ていますので、少しだけ読んでみます。

「-(前略)この不憫な少女と娘は、その昔、私の嫁ぐときのことであつた。私を乗せた人力車は、それは美しい夕日の空と土手一杯咲く曼珠沙華の中を走っていった。走りかけた私の心は静かに降りたって、詮方なく青春の刺繍を花の中に吊っていた。思いやりのない両親は、私の中に戻ることを待たずに人力車を走らせてしまい、車庫に置き去りにされた少女と娘は1年1年歳をとっていく母と妻の中でいつまでも大人になれないままで、悶えているのであつた。」

(堀内幸枝「紫の時間」)

母が結婚したのは、昭和 17 年です。昭和 17 年というのは、戦争へと突入していった時でした。戦前においては、まだまだ女性の生き方が固定化されていた時代でした。当時、母の家は、小さな村の中では裕福と言われる家だったので、女学校にはある意味、入れられた。女学校に行くのは、村の娘では他に誰もいないとっていい時代でした。甲府の方に行くにはとても遠いので、比較的近い山梨県立山梨高女に行くことになり、人力車で送り迎えしてもらったそうです。たいへん恵まれていた。土地をたく

さん持っていた地主でした。祖父は俳句をやっている、その影響で母の文学的な傾倒が強くなったのだと思います。その後、大妻女子専門学校に入れてもらった。戦争中とはいえやはり恵まれてはいました。けれども逆に、「家」としての志向というものがあって、そのために自由に恋愛も結婚も出来る状態ではなかった。家と家の格で結婚が成り立っていた時代でした。学校に行っていたときに、後に舅となる人の友人から、こういうお嬢さんがいて、釣り合いがとれるのではないか、という話があったそうです。その当時、母にとって舅となる人は弁護士会の会長という立場でした。その家にお嫁に行くことになったのです。その当時の心境を語ったのが、「紅い花」や「哀れな少女と娘の記」でした。母は農家の出でしたが、父親は俳句をやっていたというように、母の実家には文学的な雰囲気があった。しかし本家（嫁ぎ先）の方は、堅い仕事で生活も折り目正しいものでしたので、母はやり切れなかったようです。結局、今思うとちょっと早すぎるとは思いますが、結婚後三ヶ月で本家を出てしまいました。その後、当時の社会の状況では出戻りという、弟たち二人の結婚に障りがありましたので、本家に戻れということでした。そのことは母の詩の中にもあります。当時は出戻りという家名に傷を付けた娘であり、自らその咎を精算するために入水する湖があったそうです。本当にあったかどうかわかりませんが、祖母が実家に帰ってきた母に対して、「ここには置けないから袂に石を詰めて入水するか、死ぬ気で東京へ行け」と言ったそうです。それで母はやれるだけやってみようということと同時に、別に夫婦の仲は悪かったわけではなかったのに、夫にも自分と一緒に頑張ってもらえないかということで、東京の方に引きずりこんでしまった。そして池袋の裏路地のような狭くて汚いところで二人だけの生活をするようになりました。そこには布団もなければ、何もなし。本家のお兄さんに布団だけ送ってくれ、と言って東京での生活を始めました。その時、私を身ごもったらしく、当時は授産所というところがあって、下請けのそのまた下請けのような物を作るところですが、そこで母は仕事をもらって、本当にわずかな賃金で夜遅くまで頑張ったそうです。それから日暮里に父の仕事に近いところに来ることができました。当時、めずらしく、国がつくったアパート、出来たての同潤会アパートに入れて、出発することが出来たと言っていました。

ある意味では、母がふるさとを後にしたというのは、本質的な意志ではなくて、そういう状況でふるさとを後にしなければならなかったという想いがありました。ふるさとの少女時代の幸せな、なにに不自由な状況と比べて、本家では最後まで自己完結できないというか。本家は石和でした。

両親とは隣ではなくてもいいから、ふるさとの水と弟と共に一生を終えたいと願っていたようでした。それは叶わなかった。ハングリー精神というのでしょうか、得られなかったものへの郷愁が最後まで残っていた。東京の生活も馴染めなかったし、馴染もうともしなかった。それがいろんな意味で私たちの目には、母は満足していない、何かをいつも求めている、どこかに自分の居場所を探しているという風に映ったのだと思います。そういう想いをずっとその後も書き続けてきましたが、どうしてもそれは、三好達治には認められましたが、戦後の詩壇の風潮には迎えられなかった。そこに悩みがあったようです。詩という自分の思いを吐露できるもの、自分の詩風であるふるさとをうたう叙情的なものは、その時期では受け入れられ難いものだったようです。私が感じていた時期は、そのようなときでした。そのようなときを母と一緒に通りましたが、私は母を慕ってはいても、母の中に入ってはいけないというような、複雑な感情を持っており、母との間にわずかな葛藤を抱きながらきたのでした。私自身は、当時は詩の世界にはあまり関心はなく、高校二年生の時に遭遇した安保闘争などを通して、自分の内面をみつめるというよりも、社会の内面をみつめたかったため、政治とか経済の方に関心がありました。ある面、母に反発していたのかもしれませんが。そのため、大学では政治経済学を学び、研究者への道へと進んでいきました。

<母の生家のこと>

当時としては、母の生家は立派な家でしたので、その母の実家に行くのは、私にとって子どもごろに楽しみでした。その当時のことを私は次のように書いています。

どどん淵の小さな池

小学生の頃、まだ祖父母が元気だったので、よく母の実家、山梨に行った。はじめの頃は汽車が新宿発だった。今よりはるかに時間がかかったが、長くて暗い笹子トンネルを越すのが待ちどろしかった。トンネルを出ると全く違う景色が現れ、一面に葡萄畑が広がっていた。塩山で降りてバスに乗った。バスは山裾の扇状地めざしてひた走った。下黒駒で降りると、笛吹川へと流れ込む、石ころだらけの金川の木の橋を渡り、山裾をへだてて横にはしる一本道を桑畑と葡萄棚とにかこまれながら歩くと、母の故郷、市之蔵に着いた。

母の実家は水が豊富なところだった。家の周りは堀で囲まれており、石垣が積まれた上に、黒壁が続き、手入れされた植木がのぞいていた。私はその光景が大好きだった。入口の堀に架かった小さな橋を渡ると大きな門があり、私は母屋に大声で駆け込んだ。(中略)

翌日、母と祖母は大きな太巻きずしをつくり、私たちはそれを持って父の実家に行った。それが終わらないと何も始まらなかった。それが一番初めの大事な仕事だった。そのためには行く前から準備が大変だった。まずデパートで妹とおそろいの服を買い、祖父の前で披露する歌と踊りの練習をした。私はそうするものだと思っていたので、一生懸命覚えた。(後略)

(谷口典子)

私たちは、田舎に行くとき必ず、まず最初に本家に挨拶に行きました。私達二人は、祖父の前で歌や踊りを披露しました。検事や弁護士をしていた祖父でしたが、生やしていた立派な髭を、涙と鼻水とでぐしゃぐしゃにしながらかけて見せていました。そして帰りがけになると、離れがあるから泊まって行けと何回も言いました。そこは東京に出てくる前の父と母の新居でした。母はかたくなに辞退していましたが、私は祖父をかわいそうに思っていました。一晩くらい泊まってあげてもいいのにと。大人の葛藤はわからない年頃でした。

母にとっては、ふるさとから出てきた理由も、本家への気遣いも、それなりに心の中に沈殿していたのだと思います。

<母への反発と娘としての思い>

私は母の持つこのようなアンビバレンツな気持ちに対して、一抹反発した部分もあったかと思うのです。それで、私は文学から離れて、もう少し社会に直接関われる方面に関心を持っていったのではないかと思うのです。ちょうどその頃、第一次安保闘争がありました。当時、私は私立の女子高に通っていましたが、そのような風潮は微塵もなかったのですが、私は自ら飛び出して、国会議事堂に足を運びました。その時の自分というものと、母自身が、思想を抜きにして、私を心配して、白い運動靴を履き、ついてきた。それを次のように記しています。母に反発しながらも、母の気持ちを受け取った時期でした。

母と行った国会議事堂

安保条約の自然承認がせまった1960年6月15日。国会議事堂は多くの学生や市民達に取り囲まれ、異様な雰囲気だった。そこに場違いともいえる高校2年になったばかりの私が入った。ここへ来たのは3、4回目であったが、連日のニュースで流れてくる現実を、自分の目で見て確かめ、考えたかった。

その日、私が学校から国会議事堂前に着いた時には、もう身動きもできない状態だった。地下鉄の出口は人でいっぱいだったが、そこは南通用門そばの出口だったので、その前では学生たちが国会構内に突入しようとしており、それを阻止しようとする機動隊ともみ合っていた。

(中略)

何時頃だったか。零時はとっくにまわっていただろう。家に着くと、寝ずに待っていた両親にひどく叱られた。翌日のテレビでは、その時、女子学生(樺美智子さん)が亡くなったと伝えていた。それから母は、頑として聞かない私に、デモの度にくっついてくるようになった。遠巻きに。新しく買った真っ白い運動靴をはいて。

(谷口典子)

そのとき、母と細かい感情のコミュニケーションまでは取れていませんでしたが、母への想いがもう一つ吹っ切れたというか、母は母の苦しみがあるのだということ、私には私の思いもあるのだけれども、母との関係もまたそれなりの中で作られているのだなあと思えるようになりました。そういう意味でも安保闘争は、一つの節目になったと思います。

<個人詩誌「葡萄」の発刊>

この頃はほんとうに、母が詩の上で苦勞していた時でした。母が向かわざるを得なかった「現代詩」が、人間の内面を掘り下げるものが中心だとしても、やはり人間の持っている心のふるさとである自然をうたうことはとても大事ではないかと、私は生意気にも思っていましたので、悩んでいる母にそのようなことを言いました。私はそういう詩に一番心を打たれていたものですから。

私が高校に入った頃の話なのですが、同人誌に母は所属していませんでした。どの同人誌も自分に合っていなかったのです。それで個人誌を作ろうとしていました。その様な中で、今の時代に沿わない牧歌的で、叙情的な個人誌を出すことにすごく迷っていたんです。その時、私は「お母さんの詩の原点は、心のふるさとを描いた『村のアルバム』の中にしかないのだから、それが一番素晴らしく、他の誰にも負けないものなのだから、絶対に自信を持ってそれを出せばいいんじゃない」と言いました。そのことも肩を押したのではないかと思います。母もだんだんと考えていくようになって、それで一緒に作ったのが、作ったといっても表紙だけですが、それが五十何年も続いている「葡萄」という雑誌(堀内さんの個人詩誌)です。

この「葡萄」は、表紙の色を毎回変えるだけで、デザインはずっと同じなのです。そして、この雑誌は個人誌ですので、普通は同人誌のように皆でお金を持ち寄って作るのですが、これだけは母が唯一自分の寄りどころ、大事なものとして自分だけで作って出してきました。だから少々お金はかかりましたが、大変好評で、皆さんからよく読んで頂き、評価もして頂いております。ここに是非載せて欲しいという方も沢山いらしたのですが、結構厳しい選択をしていたようです。

この表紙は、ある時、母がこういう雑誌を作りたいのだけれど、どんなデザインにした方が良いのだろうと、折り紙とハサミを持って、私の部屋に来てジョキジョキと白い紙の上に赤とか白とかの紙を切り出しました。表紙のヒントはすでに友人の伊藤得夫より貰っていたそうなのですが、再度並べていながら、納得して出来上がったのがこのデザインなのです。ですから何の意味なのか私はわかりませんが、意味はその時はなかったのではないかと思います。それでも五十何回も色だけを変えてきたわけですので、母にとっては何となく感じるものがあつたのだと思います。



私はとても恥ずかしかったのですが、この本を持って、本屋さんに随分通って「置いて下さい。お金はいりません。欲しい人に読んで欲しいのです」と言って、新宿の本屋さんに頭を下げて置いてもらった、という思い出もあります。

先ほど安保の話をしました。私もその当時、家庭の中で親との関係というか両親の関係に、大変苦

しんでいた、すっきりしない高校時代をおくっていました。その頃は母が詩の方に一生懸命心を向けていた時期でもあったので、いろいろな詩の会に出ていました。その会の度に新宿に流れてきて、二次会とか三次会とかがありました。新宿にはたくさんの詩人の方がいらしたのですが、その中の一人が有名な草野心平さんでした。家のすぐそばで、新宿の西口に奥さんが「学校」というバーを持っていらっしゃいました。そこで二次会は新宿の「学校」というバーですることが多くなりました。そこに皆で寄って話をして帰るとというのが一つのコースでした。でもそういう世界というのを父は知りませんから、やはり、本家の祖父と同じようにとても実直でしたが、文学的要素が全くない人でしたので、どうしても母が、毎回出ていくというわけではなかったのですが、そういう会に行くときは遅く帰ってくるので、父との間で衝突というか、トラブルが起こっていました。私もそれを高校に入っていましたので、何となく感じる事が多くありました。ある日、父が「何時だと思っているんだ」といい、母の時計を取って、水洗ではなかったトイレの中に捨ててしまったことがありました。私はびっくりして、その後、どうするのだろう、と思っていたのを覚えています。

母も家庭の中での悩み、詩の中での悩み、帰ることの出来ないふるさとへの憧れなどが、二重三重と絡み合って複雑な状況にいたようです。それがもとで、それまで母は病氣らしいものをしなかったのですが、初めて胆嚢炎という病気になりました。だいぶ私も看病で大変だった時がありましたが、そんなとき私は母に、「私も学校をやめて働くから自分一人で自分の人生を生きていったら」とまとも、生意気なことを言いました。

でも母はやはり、それを履行できませんでした。それは当然だと思います。私も離婚するとは思っていませんでした。母には、それだけの自信と力がなかったのだろうと思います。それで私は自分で自分のことを生かしていける、自分で生きていけるということがとても大事なことになるのだと強く感じたのです。当時はまだ、女性の仕事というのは限られていました。今のようにいろいろな広い場があったわけではありません。その一つに教師という道がありました。それで大学では教職課程を取りました。教職課程は最後の時間にあるので、皆が帰ったり、皆が遊びに行った後に授業があったので、大変でしたが、教職免許を取り、最初は教師になりました。中学校の社会科ですね。教員になって、もう少し自分が学びたいこと、大学時代にやりきれなかったものを、やり直したくて、大学で学び返すことにしました。できるなら自分が追求したいものをやりたい、人の心がどのように経済に影響するのかということを知りたいという思いから、大学院に行ったという紆余曲折を、私もしてきました。

それは、ある意味では、母との対立ではなく、母の姿を見ながら、母も自分の姿を投影しながら、人生を形作ってきたというのも、やはり母の存在が大きかったのではないかと考えています。

<詩作にかける母のおもい>

ここでもう一度母の思いというのを考えさせて頂きたいと思います。それは、やはりふるさとでの、本当に無垢な形での喜びをうたった「村のアルバム」の他にはありません。村での生活の幸せ、自然との幸せ、姉弟との幸せ、両親との幸せ、いろんなものを含めてこんなに幸せな時を持てたというのは、何というか本当にすごいな、母はすごく幸せだったのだなと思います。それは、たとえば村のアルバムの7番目の所に、さりげなくだけでも、本当の意味で人の心の中を伝えてくれていると感ぜられる詩があります。それが「夕暮れ時」です。

夕暮れ時

日暮れ近くになると／だいたい色の西日で／庭は真赤になる／背戸の庭は／
煮物のにおいでいっぱいになる／父は庭から入ってきて／桑籠をどっこいしょと／
納屋に下す／まもなく赤い小さな電灯がともる／ああ この時間 この時間／

当たり前すぎて、特に詩に表わしたいと思わないかもしれませんが、すごく心を打たれるのです。それは三好達治も言っています。堀内さんの詩は、詩としてどうということはないのだけれど、すごく心を打つものがある、というふうに書いて下さっています。そんな意味で確かにそうだと思います。母の詩「我が住処」も母の心情だったと思います。

わが住処

裏の谷間の小川をせりあがった行きどまりの／三角地／みんながそまつにしている石ころだらけの／地形がある
 ／私は／そこが好きなのだ／小川にかかった／
 一本の丸木橋の袂のところに／四角い柱を組んで／方丈ほどの家を建てたい／
 お父さん お母さん 前のトマト畑と／あそこに一軒 家たってくれろ／
 庭に籾箒をほして／川の縁には一本の緋桃の木を植えるよ／私を嫁にやらんで／
 葱坊主で囲んだ／あの三角畑とトマト畑／私にくれろ／あそこに婿とってくれろ／
 （堀内幸枝「村のアルバム」）

ある面では、母には一生このふるさとで生きていきたいという思いがあったと思います。村のアルバム「夜の山」にもこんなところがあります。

夜の山

秋の夜／父と母の寝息がかすかに聞こえる夜／打伏して静かに布団に耳を押し当てていると／山の音がよく
 聞こえてくる／隙間風に半分頭を埋め耳を澄ますと／
 裏山で栗の落ちる音がする／ぼたり又一つぼたり／山を渡る風の音／小鳥がかさこ草を踏んで卵を暖めている
 音／昼は優しく日の照る山が／
 夜は村からつんと離れて淋しく生きてる夜の裏山／／

（堀内幸枝「村のアルバム」）

どんなささやかなものでも全部が愛おしい。全部が素晴らしいものなのですね。このように映っている姿が母の思う一番美しい姿で、一番求めてきた姿だったのではないかと思います。ですからそこから離れての東京生活は母の中ではいつまで経っても、人間にも水にも親しめなかったものではなかったかと。次の「葡萄棚」は、母がとても好きな詩ですが、私もとても好きです。

葡萄棚

葡萄の葉と／うすむらさきの房が／わが家の屋根にかかり／その影が／縁側と土蔵の壁に落ちている／葡萄
 棚は／村の屋根から／河原まで続いていて／どの棚の下にいても／一日中 村人達の話し声がきこえてくる
 ／隣のおばさんの声／母の声と・・・／／
 広い棚の下で葡萄の実を食べていると／この村だけのやさしい味がする／／
 藁屋根の影が葡萄棚の上にかかり／葡萄棚の影がその下の県道にのび／県道の影が又その下の段々
 畑にうつっている／影 影 影 で折りたたまれた山峡の村／／

（堀内幸枝「村のアルバム」）

どれをとっても、ただ影、葡萄棚の影だけの話なのです。その影そのものが愛おしい、影そのものに喜びを感じている。村のアルバムは、全編が基本的にそうなのです。どれというものが無いわけですから。本当に山峡の、前を山でふさがれた、山裾の小さな村には何も無いのです。どこの家にも。だから草でも水でも石でも、虫でも影でも雲でも、水たまりでも、それらが皆詩の心になっているのですね。それらが母の詩の中には沢山あることが素晴らしいと思うのです。そういうものを、持てた幸せと、愛おしさと喜びをうたえた母は、幸せだったのだと思います。

そこに幸せを感じることができた母は、都会での着るものなどどれも不摂取というか、受け入れる喜びを感じなかったのですね。ですからいつまでも田舎娘のような格好をして、詩の会に出て行きました。宝石は一個も付けたことはありません。かっこうよく美容院に行ったこともないのです。だいたいおかつぱのような頭で過ごしていました。身につけるものもウールの着物で、華やかな着物は一つも持っていませんでした。そもそも似合わなかった。ほとんどそういう生活を都会でもしてきました。

その母の願いを、そのふるさとを、母の中にいつまでも残して置いてあげたい。それが、私の願いでもあり、また、母の願いでもあります。10年ほど前に、母が永久に眠るであろうお墓を買いました。その墓には「葡萄棚」という詩と、葡萄の絵を娘が描いてくれたものを小さな碑にして、置いてあります。それが母への私の最後の気持ちですし、母の原風景であったものではないかと思えます。

こんなところですが、ここで少し時間がございますので、皆さまからご質問を頂けたらと思います。どうもありがとうございました。

【吉原】先生、長い時間本当にありがとうございました。お話を伺いまして、私もジーンとしているところであります。ご質問やご意見はいかがでございましょうか。恐れ入りますが、お名前を頂戴してお願い致します。

【矢崎】こんにちは。貴重なお話をありがとうございました。矢崎と申します。お母様のお話を伺いまして、こういったお母様がいたら、刺激的で面白いではないか、影響を受けるのではないかと思いました。自ら詩を作って発表されるという母親はあまりいないと思いますが、そのようなお母様からどういった影響を受けて、ご自分の人生に役に立ったと思えますか。

【谷口】ありがとうございます。母から言葉としてもらった覚えはありません。ただ、母が色々悩んでいる、苦しんでいる、時には自分自身の中で迷っている、もがいている、そういう姿を見て、はじめ私はよくわからなかったし、また、理解する力もないし、そこから吸収する力もありませんでした。だから何となく普通のお母さんだったらいいなと、もうちょっと家に居て、いろんなものを作ってくれたり、身につけるものでも作ってくれたりするといいなと思っていた時もあったのですが、だんだんとそういう姿から逆に俗に言う普通のお母さんとは違うものを持っている母親という存在を、凝視というか見つめ、考えるようになりました。そうするとこういうお母さんて素敵なのではないか、とそんなにあっちにもこっちにもいるとは思わなかったもので、そういうお母さんから自分も何か学べるというところが大きくなりますが、そういうふう感じてきました。少しずつ肯定したり、取り入れたり、考えてきたりしたのではないかと思えます。

【笠井】笠井と申します。私は前にお話を伺った記録などを拝見しますと、堀内さんは、ある程度、非常に恵まれた環境にお育ちになったといえるのではないかと。その一方では小作農家の苦勞も知っている。その格差について、何かお感じになったことはありますか。

また、あるいは戦時中、千葉家に嫁がれて、そこを出られた。ちなみに千葉先生は私の恩師ですが、その辺の変遷や思いのたけが詩の方に影響を与えたのでしょうか。我々は生きていけばいろいろなことがあります。詩というのは心の問題が反映されるのではないのでしょうか。

【谷口】おっしゃられる通り、母は人力車で女学校に通っていました。そのときのことを私によく話してくれました。自分にご飯を食べて正装して学校に乗り込む。小作の男の子たちはちょうど朝の一仕事を終えて戻ってくる。彼らがそのお嬢さんに出会うと、「幸枝さん行ってらっしゃい」と頭を下げて送ってくれたと。そういう状況を母が詩の中にどうあらわしたかということは、私はよく見ていません。

ただ母はいつも言っていました。自分はこれから学校に行く、しかし、自分が学校に行く前に一仕事を終えてきた小さな男の子に対して、自分は何かすごく可哀想というか、後ろめたいというか、すごく感じ入るものがあったと言っていました。小さな男の子たちは、何人も住み込んでいました。その子たちは、川縁の一番陽が当たらない小屋に住んでいました。そこは冬でも暖もなく、食べるものもない、それでも朝は早く起こされる。朝の野良仕事が終わってようやく粗末な食事が出る。その親は子どもに、少しでも暖かいものを着せてあげたいと、朝、夜なべして縫ったはんでんを持ってくる。それを母は見ている、その親の気持ちが痛いほどよくわかった。母も一面では辛い思いが脳裏に残っている。しかし、それが詩の中にあらわれているかは、悩みというか、相克としてはあるのかもしれませんが、形として出ているところは私には見いだせません。

もう一つのご質問について。当時、母の実家はある程度畑も持っていました。でもその後、舅は東京に出て、大学に入って法律の勉強をして、弁護士や検事となったような、村としては名家に嫁いだ訳です。しかし、嫁と舅とはそりが合わなかったと思います。詩という文学的な世界と、やはり厳格な論理的に理詰めで考える世界とでは相克があったのではないかと思います。ただ本人たちのことですので、私には判りませんが、祖父もとても残念に思っていたようです。母は東京に行っても、実家に帰ったときは、必ず祖父のところに大きな太巻き寿司を作って持っていきました。そうしないと実家での生活は始まりませんでした。後から私も祖父のことを思うと、とてもいたたまれない思いがいたします。二人ともとてもいい人なのに、ただもののとらえ方がちがっていたために。今でいう価値観の違いでしょう。母も申し訳ないという気持ちは持っていたようです。

【笠井】私も、現代詩の会で、堀内さんをよくお見かけしました。堀内さんの姿は都会的でない格好で来ていらしたので、とても目立ちました。詩の方では私も付き合いもありましたので、先輩と後輩の立場であります。ここではやまなしの女性史という歴史という中でどのように堀内さんが詩を作っていたのか、ということを考えて質問させて頂きました。詩の生まれた背景を知りたいと思い、その時代の背景と重ね併せて、堀内さんを理解したいと思いました。

【塚田】塚田と申します。私は、40年程前から堀内幸枝さんを知っておりまして、研究というほどではないですが親しませて頂きました。その後、私は長野県で仕事についていまして、ご無沙汰しておりましたが、ここ最近になりまして堀内さんのことに触れることができました。2013年の現代詩の祭典に参加させて頂きました。現代詩委員会の方の話の中で、堀内さんはふるさとの詩を書きたかった訳ではなく、女の情念のようなものを書きたかったのだけれども、時代背景によって認められずに書けなかったと聞きました。私は初めてその話を聞いてとても新鮮な思いがしました。それまでは、市之蔵の自然のことを書いて評価されていた。私が最初に堀内さんの詩に触れたのは、「あなたとわたし」という詩でした。それは恋愛詩のようなものでした。また「サルビア」を最初に知りまして、とても斬新な詩という感じがしました。村には恋を語るような男性はいなかったけれども、後になって、その詩は50代くらいになって書いた詩だったようですね。あこがれのようなものもそこに表れているのかと感じました。

【谷口】ありがとうございます。せつかく詩を引っ張って下さいましたので、お返事をさせて頂きます。確かに母の詩の原点というのは、ふるさとにあります。ふるさとの外に情念というか、そうした感情がなかったかと言えば、その時の時代の厳しさ故に、出せなかったものもあったのでしょうか。1937、1938年の厳しい不況の時代は、村も大変疲弊していた時でした。その時小学校に優秀で人格もできた男の子がいて、その子に幼心の思いを持っていたようです。世界大恐慌の時代、農村も本当に疲弊して食べら

れなかった時代でした。その子はブラジルに移民として行ってしまいました。その男の子に対して、ある意味では心の中の想い人として、一生あったと思います。母は絶対に言いたくないことかもしれませんが、私には判ります。そういう情念といえるようなものが出ているのが「夕日が落ちてこようと」という詩集ですが、その感情は、主に「紫の時間」とか「不思議な時計」の中にも出ています。そういう意味では、母にとって市之蔵村はふるさとであり原風景であるという意味だけではありませんでした。今回の資料の最後に「サルビア」という詩を入れました。なぜその詩を入れたかという、そういう母の一面もあったということ、皆さんにお伝えしたかったからです。

「サルビア」は、中田喜直という作曲家が作曲したものです。堀内幸枝は知らなくても、声楽家の中では「サルビア」を知らない人はいないと言われていています。中田喜直は、日本の作曲家の中では第一人者の方で、その方がこの詩をぜひ作曲したいと言われ、現在「サルビア」は声楽家の大学入試課題曲として多くの学校で使われるほど音楽の世界では知られた曲になっています。この曲でどれだけ感情を込めて歌えたかと言うことで音楽家の能力がわかるとも言われています。

サルビア

サルビアは赤い花だわ／その花は血の色だわ／わたしはその花をみつめていたとき／
急に愛の言葉を口にしたのね／／
夏の風はあったかいわ／嫉妬する熱風だわ／かん高い感情の中でとまどった／
ふたりの顔に吹きつけていたのよ／／
サルビアのはなびらを／いっぱいふりかけてちょうだい／
まっ赤な色にふちどられて叫んだ／／（後略）

（堀内幸枝「夕陽が落ちてこようと」）

情念のようなものも村に残して来たもう一つの想いなのかも知れません。私は、本人ではないのでよくは解りませんが、そう思います。

【渡邊】渡邊と申します。堀内幸枝さんを母としてお育ちになった話に感銘を受けました。最後に仰有ったサルビアというのはコンクールなどで歌われていると聞きました。いつかの機会にお聴かせ願いたいと思います。私も若い頃に峡東地域（山梨県東部笛吹市、山梨市、甲州市一帯）に住んでいました。私は、今まで詩人としての堀内幸枝さんのことを知らなかったことを残念に思います。堀内幸枝さんは、現在 95 歳でお元気ようですが、どちらの方にお住まいなのですか。

【谷口】そのように言って頂くのは、母に代わりましてありがたく思います。今は 95 歳です。足がだめなのですが、体と頭はしっかりしております。住んでいるのは新宿でしたが、今は私の住まいのすぐ隣の西東京の郊外型マンションにいます。そして、歌曲としてはいくつもの詩が作曲され、多くの作曲家や有名な声楽家の方に歌って貰っており、それらはみな CD になっております。聴いて頂けたらうれしいです。

【吉原】時間になりましたので、せっかくでございませうが、こちらで質問の時間を終わらせて頂きます。最後のまとめに移らせて頂きます。先程来、谷口さんが、「村のアルバム」に触れられましたが、三好達治が、冒頭に「村のアルバムのこと」という序文をお寄せになっています。ご紹介させてください。

「堀内幸枝さんの詩はどこといって巧みさは目立たなくとも、静かに深くたたえた精神を伝えてくるような作品です。読む人に対する刺激は強烈ではありませんが、それだけに気骨が折れず楽な気持ちで読むことができます。その後味はまたほのかなだけに格別なものではありませんか。どの詩も一見平凡な様なさくぶりです。際だった箇所はありません。出来事らしいものは何もないのです。叙述も次第を追って至極当然のようであります。詩は

これで良いのであります。この作者の性情はそれにもかかわらず、どこかから匂いのように漂ってきて、人の心に触れるものがあります。心を打つというほどの強い刺激はなくとも、人の心に忍び入るような何か感得せしめるものを持っています。温雅な作風、これがこの作者の天分というものでありましょうか。平凡な様でいながら、さればこそ学んで学びがたいものであります。」

昭和 33 年の 3 月に刊行された「村のアルバム」の序文です。

さて、お示しするこの本は、「市之蔵村」という随筆集でございます。幸枝さんが 65 歳の時に著されたものです。本屋さんでも絶版ということで、図書館から借りてきました。この随筆集には、23 編の作品が載っています。その中には、堀内さんが、どれほど豊かなものを市之蔵で得られたかということが平明な文で書いてあります。

ここに小・中学校の先生がいらっしゃいましたら、ぜひ、子どもさんと一緒に朗読して頂けたらと思います。どれもが 20 分以内の短い文です。豊かなものを必ず伝えてくれるはずですので、広めて頂きたいと思います。ちょっとお目をつむって頂けますか。これから申し上げる山野草ですが、それらを頭の中に描いて頂けますでしょうか。スマレ、レンゲ、タンポポ、ワレモコウ、キキョウ、ヤブカンゾウ、カヤツリグサ、カタバミ等々です。樹木では、梅、栗、檜、楓、杉木立など、堀内さんの詩にも随筆にも、これらの草木が随分沢山出て参ります。本当に自然を心から愛した、そうした家庭で育ちになった幸枝さんの豊かな感性が感じられるのではないかと思います。そうした意味でもお孫さん達と一緒に、この随筆をお読み頂きたいのです。

最近、堀内幸枝さんの作品が「堀内幸枝全詩集」として出版されました。村のアルバムから始まりまして、主な作品が全て収録されたものです。少し高価ですが、座右におかれ、安らぎが欲しいと思われる時、ちょっと紐解かれると、詩であっても随筆であっても皆さまに必ずや豊かなものを伝えてくださると思い、紹介させて頂きました。

本日は、谷口先生に本当に懐かしく愛情こもる素晴らしいお話をいただきました。感謝の拍手をお寄せくださいませ、心から厚く感謝申し上げます。後刻もう一度、お手元の資料等に目を通して頂きますと、詩人堀内幸枝さんをより鮮やかに思い起こして頂けましょう。

以上をもちまして本日の講座を全て終了させて頂きます。ありがとうございました。



<幼き日の谷口さんと
母・堀内幸枝さん>

<文責：吉原五鈴子>

<谷口典子さん プロフィール>

東日本国際大学名誉教授・経済学博士・詩人
1943 年、東京に生まれる。
明治大学政治経済学部・早稲田大学文学部卒業
東京大学大学院人文社会学研究科視学研究員
東日本国際大学教授を 2012 年定年退職、名誉教授
日本文芸家協会・日本ペンクラブ・日本現代詩人会・日本詩人クラブ会員
『歴史としての近代』（八千代出版）、『日本の経済社会システムと儒学』（時潮社）／詩集 『あなたの声』（西田書店）、『悼心の供え花』（時潮社） 他多数

詩人・堀内幸枝さん(笛吹出身)

娘の谷口典子さんが語る

「帰れない」思いが原点

古里の笛吹市一宮町を歌い続けた詩人・堀内幸枝さんは今年95歳になった。20代前半で東京へ出てから70年以上、遠く離れた故郷を思い続けた方は何だったのか。最も身近で詩作の姿を見てきた長女で詩人・経済学者の谷口典子さんが、濃密な時間の中で感じた「詩人の母」について、甲府市で開かれた講座で語った。

〈五味優子〉

谷口さんは、堀内さんが古里へ抱き続けた思いを「単なる郷愁ではない」とし、その複雑な心模様について、半生を紹介しながら話し始めた。

ハングリー精神

一宮町中之蔵の山あいの村で、裕福な農家に生まれた堀内さんは、自宅を向く



「母は都会の新しいものには親しめず、いつか田舎娘のような格好で詩の会に出ていた。母の願いは古里の中にと話すと谷口典子さんは甲府・びゅあ総合大学名誉教授。詩人。

郷愁と葛藤歌い続ける

「嫁いだ先は堅い家柄でなしに」と思っていたんです。



堀内幸枝(ほりうち・さちえ)さん 1920年生まれ。詩人。詩集に「紫の時間」「不思議な時計」「九月の日差し」など。54年から個人詩誌「葡萄」を発行。中田喜直さん作曲「サルビア」の作詞なども手掛けた。2009年に「堀内幸枝全詩集」(神積舎)が刊行された。日本現代詩人会名誉会員。西東京市在住。

なかった

「紅い花」「哀れな少女と娘の記」などの作品は、思いのままに自然や文字を享受していた生家での暮らしを離れ、嫁ぐ時の心境を歌ったもの。「得られなかった生き方への葛藤が、ハングリー精神のように心の中にも、詩の中に表れた」

さんの詩は誰にも負けないものだから自信を持って、なんて生意気なことを言っていたと笑う。

当たり前の日常

作品に歌われた世界は「詩にならないような当たり前の日常ばかり。でもとても心を打つ」。中でも「村のアルパム」を、古里での無垢な喜びが色濃く出ている詩集として挙げ、影に感じているおしきや喜びを歌った「葡萄棚」

山裾の小さな村の草や水、石、虫、影、雲、水たまり。珍しいものは何もないが、ささやかなものを大切に思い、いとおしいと感じる堀内さんの詩の心は吸い寄せられ、遠く離れても感性を刺激する。複雑な思いがあっても、「そういう創作の根っこを持った喜びを歌えた母は幸せだと思ふ」と谷口さんは話した。

<山梨日日新聞社 2015年12月3日(13頁)>

*紙面・記事・写真・イラストの無断掲載・転用はお断りします。

Copyright 山梨日日新聞社 THE YAMANASHI NICHINICHI SHIMBUN.

2. 山梨県女子教育のさきがけ

—内藤ますとその周辺—

山中淑子（プロジェクトメンバー）

本稿は、平成27年11月22日、びゅあ総合主催「やまなしの女性史を学ぶ」講座で筆者が発表した講演内容をもとに改めて起稿したものである。

1. はじめに

平成27年4月、山梨県は県庁舎別館に「山梨近代人物館」を創設して、明治以後、県内外の近代化に尽力した県ゆかりの人物50名を紹介する事業を始めた。50名中女性は、樋口一葉、小川正子、村岡花子、望月百合子、伊藤うた、内藤ます【注1】の6名である。

この女性たちの中で、最も知名度が低いのが内藤ますであろう。他の5人が明治生まれであるのに対し、内藤ますは文政6年（1823）の誕生で、これは将軍・徳川家定の正室・篤姫誕生の13年前である。他の5名の中で年齢的にますが一番近い伊藤うたでも半世紀の年齢差がある。ますの知名度が低い理由の一つはここにある。

筆者自身、ますの存在を知ったのは、ほんの6、7年前のことで、日本の公許第1号の「女医」荻野吟子について調べているときであった。医者になる前の吟子が甲府の女学塾で教師をしていたことがあるという内容の資料に出合ったときには、思わぬ発見に歓喜したが、そのとき、吟子を教師として甲府に招聘したのが内藤ますという女性であることをはじめて知った。ますは『山梨日日新聞』の前身である『^{こうちゅう}峡中新聞』【注2】の創刊者・内藤伝右衛門の継母である、と同時に、若い頃は遊女であったという。その背馳するストーリー性が最初に筆者の興味を引いたのは確かであった。

その後、ますについて少しずつ調べてきたのだが、資料の多くが「伝右衛門を育てた母」という文脈のなかで「脇役」として語られていて、しかも、ますについての記述は根拠に乏しいものばかりであった。ますを正面から「主役」として捉えた研究は、筆者の知るかぎり、お茶の水大学の河田敦子氏の論文「明治の女性内藤ますの生涯とその教養課程」（2010年）だけではないだろうか。そういう意味では、ますの本格的な研究は始まったばかりであるといえる。

今回、内藤ますについて書くにあたり、まず迷ったのが「ます」をどう表記したらいいかということであった。というのは、ますには「満寿、満壽、萬寿、満寿子、万春、萬春、萬春子、増子、ま須、末須、末須子、ま須子」など、多様な漢字表記がなされているからである。

当時、庶民階級の女性の名前は仮名2文字が普通である。おそらく、ますもそうであっただろう。それを敢えて漢字書きにするのには、それなりに意味があったはずである。荻野吟子は医者になったときに「男は漢字で重厚な名前なのに、女の名前は単純でまるで犬猫のようだ」【注3】と言って、「ぎん」を「吟」に改めたという。おそらくは、ますも同じような理由で漢字を使ったのではないだろうか。とすれば、明治という男尊女卑の時代に、

こういう形で女性の意識が芽生え始めたということになる。それならば「漢字で表記を」という気持ちはあったが、あまりの多さに選択に迷い、結局、平仮名で「ます」とすることにした。

名前だけではなく、ますには様々な顔があった。彼女は教育者であり、商人であり、歌人であり、作家であり、また社会奉仕家としての顔もあった。それこそスーパーウーマン、明治風にいえば「女丈夫」である。そうした中で、今回は「教育者」としてのますを中心に考察してみることにした。

【注1】近代人物館では「内藤満寿」と表記。

【注2】明治5年、県の要請で始まった山梨県で最初の新聞で、形式は現在とは違い冊子形式で、内容も県関係のことを県民に知らせる、いわば官報や県報のようなものであった。

【注3】『花埋み』渡辺淳一

2. 江戸時代のます

(1) 遊女だったのか

内藤ますは文政6年(1823)に誕生し、明治元年に45歳となり、明治34年(1901)、79歳で亡くなっている。ますが教育に携わったのは明治になってからであるが、遊女であったというますの出自も少々気になるので、教育について述べる前に、ますの生涯の前半、つまり江戸時代のますについて簡単に振り返ってみることにする。

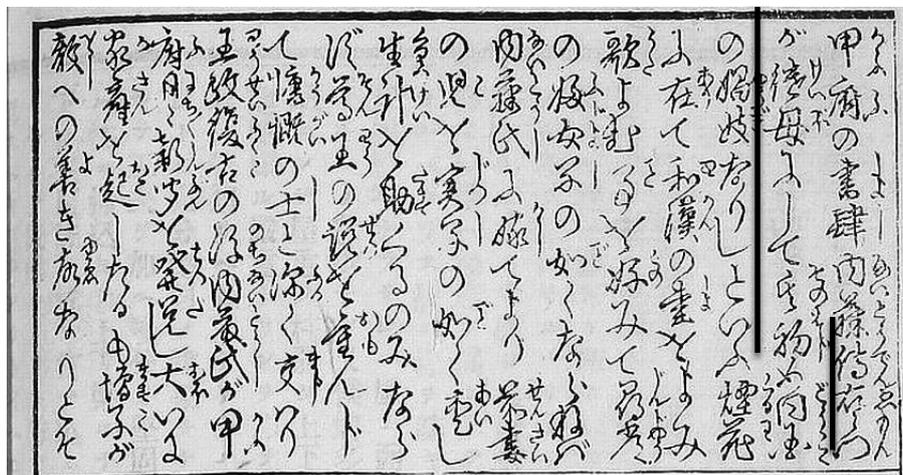
江戸時代のますに関する資料はいくつかある。ただ、ほぼ全て明治以降に書かれたもので、しかも、全く根拠が示されていない。そのため、真偽のほどは疑問であるが、真偽を云々する根拠となる文献もほとんどないことから、今まではるものを繋ぎ合わせて述べることにした。

ますは、文政6年(1823)3月1日、甲府連雀町の商家・坂本茂介の長女として誕生した。ますの誕生については3月3日とする資料もあるが、ますが幕末に書いた旅日記「駿河紀行」【注4】の3月1日(旧暦)のところに「今日は己生まれし日なれば」とあることにより明らかである。「連雀町」については、同じ日記中に「連雀町という所のおと(弟)より」とあり、弟が実家を継いだようなので、ほぼ正しいと思われる。但し「山田町に誕生」という資料もあって、山田町に誕生して連雀町に移った可能性もなくはない。

その後、ますは「旗本某家の養女」【注5】となったという。しかし、なぜ、養女になったかについては、どの資料も言及していない。さらにその後、遊女になったようだ。

彼女が遊女になったという文言が最初に出てくるのは、明治16年(1883)に書かれた『明治烈婦伝』(資料1)の中で、傍線の部分には「初め同国の娼妓なりしといふ」とある。「同国」とは甲斐国のことである。「娼妓」という言葉は、それ以前にもあったようだが、頻繁に用いられるようになったのは明治になってからで、「公娼」つまり公認された遊廓の遊女をさす言葉として使われている。しかし、ますが若い頃、甲斐国には遊廓はなかった。甲府に遊廓ができたのは明治3年(1870)である。それ以前は、甲州街道の宿駅になっていた甲府柳町

(現・中央1~4丁目)の旅籠に「飯盛女」という泊まり客の食事の世話をし、同時に、夜は性的サービスもする娼婦たちがいた。ということは、ますも飯盛女だったのだろうか。



資料1 『明治烈婦伝』「初め同国の娼妓なりしといふ」

『明治烈婦伝』の1年後に出された『明治名婦百首』には、甲府櫻街の遊女だったとあるが、これも信じがたい。さすが若い頃には甲府にまだ桜町【注6】はなく、その辺は甲府城郭内であったからである。この2冊はまずの生前に書かれたもので、事実でなければ「遊女であった」というような重要なことを書けなかったであろう。

一転して、明治33年2月24日付の『山梨民報』に出てくるのが「吉原説」である。さらに、昭和45年出版の『郷土史にかがやく人々』第3集「内藤伝右衛門」は「大文字楼」という吉原で一、二の大籬を挙げている。同書はさすが遊女になったいきさつを詳述していて、それによると、「ある時、養父が仲間の悪だくみにかかり、金銭をだすか、腹を切るかの瀬戸際に追い込まれ、親孝行のため江戸の大文字楼に身を沈め、養家の難を救った」のだという。

その後、まずは苦界を脱して甲府に帰ることになる。そのいきさつについても『郷土史にかがやく人々』は、「あるとき、近江の傘問屋の主人が、そのことを聞いて感激して調査の末、見受けして親元に帰してくれた」と書いている。

甲府に帰ったまずは、弘化4年(1847)、25歳のときに、甲府八日町で骨董などを商っていた藤屋・内藤伝右衛門に望まれて結婚した。まずは後妻だったようである。夫の伝右衛門は前妻との間に子どももいたが亡くなった。そのため養子を迎えた。養子は幼名を猪之甫といい、弘化元年(1844)に山梨郡八幡北村で農業を営んでいた手塚伊左衛門の家に生まれた。その後、伝右衛門の前妻も亡くなった。それで、まずは後妻にしたということだろうか。

結婚後はというと、夫・伝右衛門は病弱で藤屋の店(通称・藤伝)はまずは切り盛りしていたようである。伝右衛門は贅沢者で中風になり、まずは13年間看病したという苦労話を伝える資料もある。

藤屋があった場所は甲府八日町16番地(現・中央4丁目2の24)、NTTの道を挟んで南側で、そこに店と自宅があった。現在、その場所に「新聞発祥之地」(資料2)という石碑が立っていて、ここで息子の2代目伝右衛門が『映中新聞』を創刊したことを伝えている。

さすが結婚した頃には、藤屋は「絵双紙・古本・太物(木綿や麻)・古着・古道具」などを商っていた。ところが、結婚して7年ほどした嘉永7年(1854)に出された甲府のタウンガイドともいえる『甲府買物独案内』(資料3)【注7】によると、藤屋は西洋和漢書・筆墨書・地本【注8】・錦絵・絵双紙などを扱っているとあり、店は骨董屋から本屋に様変わりしている。まずは好みを活かされたのであろう。

まずは客商売をしていたので、愛想もよく客の扱い方も上手だったであろうことは容易に察しがつく。それに容姿もよかったようだ。『甲州女人伝』は「容姿は濃艶なる事西洋花の如く、当時の若い衆を悩殺せしめずんばやまなかつた程だ」とまで書いている。

そんなこともあって、店には地域の有志や、知識人、明治以後は知事や県庁関係者なども集まってきた。と同時に、情報も集まったと思われる。このことが藤屋の発展に繋がったであろう。

しかし、それだけではない。まずは大変旅好きで、幕末には駿河国に25日間にわたり温泉旅行に行っている。明治7年(1874)には近畿13州を70日余りも旅し、さらに商用ではあるが、飯能市に少なくとも3回、東京には何度も行き来している。様々なところに出向くことにより見聞が広がったであろう。

例えば、まずは、近畿13州の旅で見聞きした感想を同年9月8日の『甲府新聞』に投書している。これは女



資料2「新聞発祥地」の石碑



資料3『甲府買物独案内』

性によるはじめての新聞投書だとされているが、その内容は、甲州の土壌や耕作技術が決して劣っているわけではなく、県官が衆庶を勧誘して努力させれば物産も興隆し国も富殖するというもので、ここには当時の一般女性にはない広い視野と「公」の意識が感じ取れる。

また、まずには「先見の明」があったようである。江戸時代、甲斐国は幕府の直轄地で城内には勤番士たちが住んでいた。幕末になると、薩長の軍隊が攻めてきて戦争が始まるという騒ぎの中で、勤番士たちは古い書物を二束三文で処分して甲府を離れていった。まずは、その書物を大量に買い込んだという。こうしたまずの先見性が、藤屋を県下一の書林にした要因になったであろうことは疑いの余地がない。明治になってからは、藤屋のドル箱は教科書販売だったようである。

その後、安政6年(1859)に夫・伝右衛門が亡くなった。さすが37歳のときである。そして、養子の猪之甫が2代目伝右衛門を襲名した。まずは店を切り盛りしながら伝右衛門をよく訓育し、彼に国学【注9】を教えたという。このことはさすが明治になって教育に係わるきっかけになったであろうと推察される。

【注4】 ますが、新海吉哉夫妻と駿河・伊豆を温泉旅行したときの旅日記である。

【注5】 養家については、武田の武将・三枝勘解由の一族で、旗本の家柄であった三枝家第26代三枝七内の弟珍国(重兵衛)の家ではないかとする資料や、三枝七内に何か関係があることを仄めかす資料もあるが、明らかではない。

【注6】 廢城令により、明治8年、県令藤村紫朗は甲府城の二の壕・三の壕を埋め立て新市街地を建設。桜町は、常盤町、錦町、橋町、春日町、紅梅町などとともそのとき造成された町である。

【注7】 『甲府買物独案内』からかき写したもの。

【注8】 江戸時代、上方の絵本に対し、江戸で刊行された洒落本・人情簿本・草双紙などをいう。

【注9】 仏教や儒教が伝わる以前の純粋な日本古典を研究しようと江戸時代中期に始まった学問。中心人物にはかだのあずまろ荷田春満(1669～1736)、賀茂真淵(1697～1769)、本居宣長(1730～1801)、平田篤胤(1776～1843)などがいる。純粋な学問として始まった国学も時代の変化とともに、次第に政治的・宗教的要素が強くなり、殊に幕末になると、尊王攘夷論や討幕運動と結びついた。

(2) まずは国学をどう学んだのか

それでは、まずは、一体いつ国学を学んだのだろうか。資料の中には「はやくから堀秀成や小中村清矩らから国学を学んだ」としているものがいくつかある。しかし、これには無理があるように思われる。というのは、堀はまずより4歳上、小中村は1歳上だけで、まずと年齢的にあまり違わないからである。

おそらく、まずは利発で向学心があり、幼い頃は寺子屋などで読み書きを学んだかもしれない。しかし、「幼い頃一気に学問を身につけた」のではないようである。というのは、後述する田中かくという女性に出した手紙の中で、まずは「私など稚きとき学者ぎる故、今一しほ苦心致し候」(私など幼いときに学ばなかったので、今になってひとしお苦労しています)と書いているからである。

では、誰に・いつ学んだのだろうか。まずが関係した国学者として名前が挙がっているのは、上にあげた堀秀成と小中村清矩に加えて、矢野玄道、権田直助、井上頼国などである。この中で考証派といわれる小中村を除くとみな平田派の国学者たちで、慶応2年(1866)には、息子の伝右衛門が22歳で平田篤胤気吹舎【注10】に入門している。しかし、まずが入門したという形跡はない。まずは国学を学ぶとしたら3つの段階が考えられる。

1. 旗本の家での養女時代。養家に客人として来た国学者から話を聞く機会があったかもしれない。その中に上に挙げた人々がいたかもしれない。

2. 遊女時代。遊客として訪れた国学者から学ぶ機会があったかもしれない。例えば、堀秀成だ。彼は偉大な国学者ではあるが、女性関係は誠にだらしく、結婚・離婚を4回繰り返している。それも重婚の疑いがある。さらに、後に述べる大教宣布運動の中で、人々を教化する目的で渡道した函館時代(明治6年4月～7年4月)に、芸者や娼妓との不行跡で同僚から教部省に訴えられている【注11】。そんな秀成が20代の頃に吉原でまずに会った可能性は無きにしも非ずである。

3. 結婚後。病弱の夫の代わりに店を切り盛りしながら、来客とのやりとりの中で学んだ。このことはかなり信憑性があるように思われる。ちょうどこの時期と一致するかのように、嘉永4年(1851)、堀秀成が甲斐国市川に移り住んでおり、慶応2年(1866)4月に伊豆国に出国するまで、出入りしながらも甲斐に住んでいた。その間、秀成は市川、韮崎、甲府などで講義をしたというから、そういう機会を捉えて学んだ可能性は大きい。また、店に関係書を入荷することにより、集まってくる知識人との接客の中でさらに知識を深めたのではないか。

「駿河紀行」の中に、さすが、堀秀成著の『榎の板屋』を持参して、温泉に入る合間に写経するように写している場面が何回か出てくる。これがますのラーニングスタイルの一つではなかったか。誰かの門に入るというのではなく、これら3つの段階で機会を捉えては独学に近いかたちで学んだのではないだろうか。そして、こうした国学からの知識が、明治時代になって女子教育の中で活かされていくことになる。以上、ますの生涯の前半を振り返ってみた。

【注10】「幕末明治の女性 内藤ますの生涯とその教養形成過程」

【注11】『宣教使堀秀成 だれも書かなかった明治』錦仁(平成24年)

3. 明治時代の国民教化運動の中で

(1) 明治時代のロールモデル ～まずは県外でも有名人だった～

渡辺淳一が書いた『花埋み』は、荻野吟子をモデルにした伝記小説である。その中で、吟子がますと出会ったときの印象を「42、3歳の恰幅のいい女性で、かなりの有名人」と書いている。実際に二人がはじめて会ったのは明治6年、ますが50歳のときである。ということは、年よりかなり若く見えたことになる。とはいえ、もともと小説であるから、いかようにでも書けるのであるが、ますが県外でも「かなりの有名人」だったという後半の部分については、これを裏付ける証拠がある。

先述の『明治烈婦伝』は、実際は各ページが資料4のような形式になっていて、上段に経歴、下段に名前と自作の歌とイラストが載っている。これが出版されたのは明治16年であるから、実際には、まずは60歳になっていたが、イラストはそれよりもかなり若い、算盤をはじく商女の姿で描かれている。

ますについて書かれた同様の形式のものに、『近世名婦百人撰』(明治14年)と『明治名婦百首』(明治17年)がある。前者では神道系のますが、なぜか坊主姿で描かれている。さらに、形式は違うが、明治27年の『日本賢女百人伝』にもますが取り上げられている。

実は、「烈婦伝」「名婦伝」「賢婦伝」なるものが明治時代を通して盛んに書かれ、そこには皇后から娼婦にいたるまで、身分の別なく様々な階層の女性たちが登場する。それにしても、その中の4冊に彼女が出てくるのであるから、彼女の名が全国に知れ渡ったであろうことは容易に想像できる。ではなぜ、ますがこのように多く取り上げられたのだろうか。

それには、明治政府の国民教化策の影響があったのではないかとと思われる。明治政府は当初、国民教化策として「忠・孝・節」などの徳目を人々の間に広めるために、そうした事例を全国的に集めたという事実があり、実際に徳のある女性を集めた『明治孝節録』(明治10年)なるものが皇后の要請で編纂されている。

また当時の新聞には連日のように「節婦・孝女・貞婦・烈婦が表彰された」という記事が掲載されている。新聞が国民意識の啓発や施策の徹底に大きな役割を果たすと考えられていたからである。その意味においては、遊



資料4『明治烈婦伝』

女にまで身を落として養家を救ったますは格好のロールモデル【注12】であったろう。まずは遊女であったからこそ多数取り上げられたのだ。とすると、このことは彼女が遊女であったことの証拠の一つといえよう。

上に挙げた4冊すべてに、ますの歌として載っているのが次の歌である。

「起きて思ひ ふしてはわぶる 世の中に など満すらをと うまれざりけむ」

(起きても寝ても思い悩まれる世の中である。なぜ、男に生まれなかったのだろうか)

内容から幕末の頃に作られた歌であろうと思われる。雄々しい男を意味する「満すらをと」と自分の名前の「ます」をかけていて、自分が「男だったらよかった」という非常に勇ましい歌である。確かに、ますを形容する言葉として「男勝り」とか「女傑」などがよく使われる。では、ますはどれほど雄々しかったのだろうか。一、二例を挙げると、『明治名婦百首』には、「慷慨の気節ありて報国の士と深く交わり・・・」とある。「慷慨の気節ありて」とは「世の中の不条理を憤る気骨がある」ということである。また、『山梨民報』(明治33年2月25日付)の記事には、「狭気(義侠心)があったものだから維新以前に有ては井上頼国、落合直亮、堀秀成等の国学者が幕府の嫌疑を蒙りて所々逃回り当地へ来りしを自宅へ隠匿せしめたる」とある。幕末の頃は、天皇を崇拝する国学者は幕府側からすると敵であったため、幕府に追われて逃げ回っていた国学者を匿ったというのだ。これだけでも、普通の女性とは違うことが分かる。

ますのこうした姿は、同じ花柳界上がりで、同じ時代に生きた気骨を持った女性として、桂小五郎(後の木戸孝允)の妻・幾末(後の松子)さんや坂本龍馬のお龍さん、あるいは、伊藤博文の妻の梅子さんなどを彷彿させるものがある。こうした人たちは、明治という時代がつくり出したひとつの女性像であろう。

【注12】ますと同様に全国的に取り上げられた県人に山本苗子という女性がいる。甲府柳町の町年寄・山本金左衛門の妻で、ますの歌会仲間でもある。

(2) 国民教化運動と女教院

明治になると、ますは教導職という職分を得て県内で説教することになる。教導職とは明治初期の国民教化運動の中で使われた言葉である。

明治初期の教育体制を考えると2つの柱があった。一つは学校教育を中心とする「教育」、もう一つは国民の思想統一を図る、いわゆる「教化」である。このうち教育については、明治4年に文部省が設置され、続いて翌年「学制」が公布された。学制の前文には「^{ばら}邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」として、全国民にもれなく初等教育を施す旨が明示され、これによって日本の近代学校教育がスタートした。学制に基づいて山梨県でも明治5年10月、甲府に振徳館、善誘館、本立館という3つの仮設の小学校が開校している。この学校教育の流れは必ずしもスムーズに進んだわけではないが、途切れることなく現在まで続いている。

一方「教化」、つまり思想統一を図る流れはどうだろう。維新当初、政府は天皇を中心とした強力な中央集権国家をつくるために、天皇を神格化し神道を国教とする祭政一致の方針をとった。初期の段階でこれを強力に押し進めたのが、ますとも関係があった矢野玄道と権田直助【注13】、それに堀秀成、井上頼国といった平田派の国学者たちである。

明治3年1月、この国家方針を全国民に示すために「大教宣布の詔」という詔勅が發布され、明治政府はこれに基づいて国民の思想統一を図るために、国民教化運動(大教宣布運動)を進めていくのだが、この運動推進の裏には、当時の政府がキリスト教浸透に対して感じていた脅威があったという。明治という西洋文明を進んで取り入れようという時代がら、もはやキリスト教を表だって禁止することはできない。しかし、なんとかその浸透を防ぎたい。この運動の裏には、そういう狙いがあったようである。

政府はこの国民強化運動を押し進めるため明治5年3月、それまで神祇行政を担当し祭祀や宣教を掌っていた神祇省とその所管の宣教使【注14】を廃止し「教部省」を設置、その管轄下に国民を導くための「教導職」という職制を新たに設けた。そして、神官・僧侶を無給の教導職として任命してその任に当たらせた。その後、人材不足から民間の有識者等もこれに加えられた【注15】。

教導職には「教導職十四級」といって14のランクがあった。例えば、第1級が大教正、第7級が大講義、第13級が訓導、14級が権訓導などである。ここでいう訓導は、学校教育において旧制小学校の正規の教員を表す「訓導」とは違う。

さらに政府は「三条教則」という通達を出して、教導職が教える内容の基本原則を示した。それは、「敬神愛国・天理人道・朝旨遵守」という3条から成っていて、教導職たちはそれをもとに日本各地で説教を行った。実際に教導職の活動が開始されたのは明治5年（1872）7月である。

しかし、当時は人材不足だったり、神官などは教えた経験がなかったり、無給だったり、この運動はなかなかうまくいかなかったようだ。そのため、明治5年9月には、国民教化の拠点として東京に「大教院」という統括機関を設け、また、その分院として各府県に1カ所ずつ教導職を養成し、同時に国民を教育するための中教院と、その下部組織として全国各地に一般の国民に説教するための小教院を設置した。さらに、明治7年5月23日には、大教院の管轄下に女性の教導職を育成する機関として「女教院」が設置されている。

女教院については、後に跡見学園を創設する跡見花蹊の日記にその設立過程が詳述されていて、そこに内藤ますが登場するので関係箇所のあらましを記すことにする。

明治6年5月12日、花蹊のところに教部省より御用召差紙（召喚状）が届く。

明治6年5月13日、花蹊、教部省に行き権訓導（教導職第14級）を拝命。その後、大教院に出頭し「三ヶ条命紙」（三条教則）を受ける。

明治6年5月27日、花蹊、大教院局長より女教院を設置するので女教師を選ぶよう依頼を受ける。

明治6年6月25日、姉小路家を暫定的な集会場【注16】として女教院の開講祭典が開催される。この日、出席した者たちの中に、内藤ますと、先に述べた「田中角子」の名前がある。田中かくは武蔵国高麗郡飯能村（現・埼玉県飯能市）出身で、後に荻野吟子と一緒に甲府に来ることになる女性である。このとき、かくは14歳で二親が同行している。

明治6年7月1日、「内藤ます子来」とある。

明治6年7月3日、昼後より内藤ます、井上頼国、田中かくらが来る。

頼国は当時大講義（教導職第7級）で、明治5年7月から教部省に出仕し女教院にも深く関わっていた。明治6年、田中かくは井上の経営する私塾（神習舎）に入門した。荻野吟子も同年、田中かくに少し遅れて入門している。二人が女教院に入ったのも、おそらく頼国の紹介であったと思われる。かくは、翌・明治7年春、権訓導を拝命している。女教院の集まりは「女教集会」といい、3と8のつく日に行われたが、明治6年7月3日を最後に、花蹊の日記にますの名前が出てこなくなる。

明治7年2月23日、女教集会に荻野吟子と田中かくの名前がある。

明治7年5月23日、正式に場所が決まり、この日、神道の儀式に則って下谷女教院開講祭典が盛大に開催された。斎主に万里小路良子、祓い主に跡見花蹊、荻野吟子は装束掛を務めている。

万里小路良子とは、花蹊の姉の藤野が仕えた姉小路公知卿【注17】の妹・姉小路良子のこと、後に宮内省皇后職に入り権典侍になった人だが、一時期「万里小路」を名乗っていた。花蹊の日記の中に「良ひめ様」としてよく登場する。『姉小路公知伝』【注18】に権典侍藤原良子が序を書いていて、そこに「我兄上那る公知公の若かりしころ」（私の兄上である公知公の若い頃）とあるところから、藤原良子とは姉小路公知の妹・姉小路良子のことであることが分かる。万里小路と姉小路は、両家とも元は藤原北家系の公家で「藤原」を名乗ることもあった。つまり、姉小路良子と万里小路良子と藤原良子は同一人物である。

この藤原良子が、明治6年に出された内藤ます著『女教草』の巻頭に、「惟神婉貞」【注19】の四文字を揮毫している。このことについて、『跡見花蹊日記』の中に気になる箇所がある。明治6年11月26日の「此日、梅津照子来。女教草序願ニ来り候」という記載である。この「女教草」というのは、ますの『女教草』のことではないか。明治時代にはほかにも『女子教草』『女童教草』など似たタイトルの本が出版されているが、出版年代からいって考えられない。ますの『女教草』は明治6年9月に官許を得て、同年11月に発兌されているところか

としても使用されている。当然、まずも使ったであろうことから、その内容の一部を見てみたい。

同書は「道は天地をえて本とす。天は高く、地は卑く、天は上にありて下地を養ひ、地は天の気を受けて万物を生む。天は君なり、親なり、夫なり、地は臣なり、子なり、婦なり・・・」で始まっていて、冒頭から夫と妻の上下関係を説いている。全体的な内容も男女には差があり、女には女の役割があることを教える古めかしいものであるのは、時代がら当然といえば当然である。が、その中に、開化の微光を感じさせる部分がある。それは以下の部分である。

「尊きも賤しきも親として子を思はざるはなし。然るを今世の人子を愛しつつも子を誠の道に導くことを知らず。大方は目の前の事のみ心に入れて、其の子の行く末を思はざるなり。女子をそだつるに琴・三味線・手おどりなど専ら習わせて誠の道を教えず。この故に成人の後、遂に女の道にたがい、世の笑いを受ける者あり。はずかしき事ならずや・・・七八つまでは、男女ともに母の手元にてそだつるものなれば、婦はよく物の道理をわきまえて、我が行いを正しくして子を教えざれば、神の御心にたがうぞかし」。

「尊きも賤しきも」として貴賤を問わないことを前提にしている。この点は、国民皆学を謳う「学制」の前分に通じるものであって近代性が感じられる。そして、女子のためには、琴・三味線・手踊りなどでなく、物の道理が分かるようになる教育が必要だというのである。「女に教育はいらん」という時代に、女子教育の必要性を説いている点で開化の芽生えが感じられる。

ますが関わった大教宣布運動のその後は、神道と仏教の対立などにより次第に継続困難なものになっていった。そして、明治8年5月に大教院が解体、明治10年1月に教部省は文部省に合併されるかたちで廃止され、明治17年には教導職も廃止された。学校教育と異なり短命に終わったこの運動は、最終的には学校教育に吸収されるという方向に向かうことになる。

【注20】『山梨県史』第四巻（昭和36年）

【注21】内藤伝右衛門が創刊した『峡中新聞』は、明治6年に『甲府新聞』と改題した。

【注22】瑞泉寺は、当時、内藤家の菩提寺でもあった。

【注23】有泉貞夫「善光寺灯籠仏占い禁止前後」『山梨近代史論集』

4. 女学家塾への道

(1) 江戸から明治にかけての寺子屋・私塾

明治時代初期の教育体制の2つの柱のうち国民教化とそれに関わる内藤ますの活動について上に述べた。次にもう一方の柱である学校教育について、まずと関わる部分を見ていきたい。江戸時代から明治5年の学制制定までの時代、庶民の教育を担ったのは私塾や寺子屋であった。『山梨県教育百年史』によると、江戸時代から明治初年にかけて県内の寺子屋・私塾数は537校あり、教師数は582人。そのうち女生教師はわずか16名であった。また生徒全体に対する女子生徒の割合も16.2%にすぎなかった。

女性教師16名のうち名前がわかっているのは、分部民弥（上暮地村・医師）、小池みさご（勝沼村・商家）、曾根はん（牛奥村・農業）、照女（下石森村）、土屋とみ（中村・神官）、土屋きく（上栗原村・神官の母）の6名だけである。名前が分かっていない10名も神官、僧、医者妻たちであった。

彼女たちが寺子屋で教えていた科目は主に読書と習字、それに珠算で、これは男性教師と同じである。それに加えて、曾根はんは裁縫、小池ひさごは琴・三味線・茶の湯・和歌なども教えていた。しかし、これらの女性教師たちの寺子屋は分かっているかぎり男女共学で、女性教師といっても、特に女子教育を目的としていたわけではなかった。

(2) 果たせなかった女教院、一転して女学家塾へ

大教宣布運動という神道を軸として国民の思想教化を図る運動の中で、教導職として県内を説教していたます

であるが、彼女が本当に目指したのは甲府に「女教院」、つまり女性教導職の養成機関を設立することであったようだ。それは、下谷女教院開講祭典が行われた約2カ月後の明治7年7月27日に、さすが田中かくに書いた次の書簡から明白である。

「女教院はいかが立給ひしや・・こなたも女教院ばかりにては立がたく、女学校打ちまぜて立たむとこそおもへ」
(女教院はどうなっていますか。私のほうも女教院だけではむずかしく、女学校もいっしょに設立しようと思います)

先に述べたように、明治6年7月3日以降、花蹊の日記にますの名前が出てこなくなった。その間、県内で教導職として活動していたのだが、上の文面からますは同時に女教院を設立しようとして動いていたことが窺われる。

この書簡の約8カ月後の明治8年3月12日、女教院の設立を断念したますは、県庁に右のような「女学家塾願書」を提出している。内容は、過日、女教院を設立いたしたくお願いしましたところ、不都合もあり、先日、願ひ下げ、今度、改めて女学家塾志願をするので、差し支えなければご許可くださいというものである。ここにも、はじめは女教院を設立しようとしていたことが記されている。

ますの女教院設立に関連していると思われる事項がもう一つある。明治7年6月28日、山梨県参事富岡敬明が教部省宛に出した次のような「女性祠官登用の伺い」である。

「當県管下甲斐国全八十区郷社祠官ノ儀於假中教院教導職筋試験ノ上撰挙候処、固ヨリ当器人少ノ儀ニ付祠官闕員相成候節ハ、假令婦人タリトモ畧書史ニ涉リ純厚教導職ニ堪ル者ハ祠官申付右補欠イタシ度、於然ハ人民進歩ノ一端ヲ開キ勸奨ノ裨益不少候儀ト相考候間、何分ノ御指令有之度此段相伺候也」【注24】

(当県管下甲斐国全八十区の郷社祠官について、仮中教院に於いて教導職試験の上選考するところ、もとよりそれに足る人が少ないこともあり、祠官に欠員がでる場合は、仮に婦人であっても略書・略史に通じ教導職に堪える人ならば、祠官を申付け補欠といたしたく、然らば人民進歩の一端を開き、これをすすめることの利益は少なくないと考えます。ご指令を伺いたい)

この伺いは、結局、立法府である左院が女性祠官の登用を認めない決定を下したことにより取り下げられたが、富岡がこの伺い書を出した真意は何なのだろうか。男性祠官に欠員があった場合に代わりになる「教導職ニ堪ル」女性が果たして山梨県にいたのだろうか。この伺いが出された明治7年6月28日、ますはすでに権訓導として大教院の教義書としても使われた『女教草』を著し、県内の寺院で説教活動も行っていた。それから約半年後に行われた明治8年1月1日調べの「甲斐全国職分総計」でも県内の女性教導職は内藤ます一人であったことは先に述べた。それ故、「教導職ニ堪ル者」がいたとすれば、それは内藤ます以外には考えられないのである。

筆者は、富岡がこの伺いを出した背景には、内藤ますからの要望があったのではないかと推論する。では、すでに教導職にあったますが、なぜ祠官を望んだのか。その理由は次に示す明治5年6月9日に出された「教部省達第3号」にあったのではないだろうか。

「今般教導職設置候ニ付テハ兼テ被仰出候三ヶ條大旨ヲ體認シ各管轄内社寺ニ於テ追々説教可執行候條其管内老幼男女共稼業ノ餘暇ヲ以テ信仰ノ社寺ニ詣リ聴聞可致旨一般末々迄無遺漏布達可有是候尤説教所之儀ハ教導職補任ノ者共ヨリ取極可申出ニ付支牒之筋無之様可取計候事」

この達は「この度教導職を設置するについては、兼ねて言われている三ヶ条の大旨を体得し、各管轄内の社寺において追々説教いたすべきこと、管内の老幼男女は余暇をみて信仰する社寺にまいり聴聞することを漏れなく布達するよう」という内容で、説教は「社寺にて執行すべし」としていることが分かる。教導職として説教するだけであれば祠官になる必要もないのだが、女教院を設立しようと考えていたますは、説教所確保のために祠官

女学家塾願書
先般女教院設立致度願上候處不都合之儀モ有之候に付先日御願下げ仕今般更に女学家塾志願に付御差支無之候ハ、御許可被成下度奉懇願候也
八日町十六番 傳右衛門母
明治八年三月十二日 訓導内藤満壽
前書奉願候に付奥印仕候也
學取締 窪田高寧
山梨県令藤村紫朗殿

「女学家塾願書」

となる必要があり、県に働きかけたのではないだろうか。しかし、この伺いは却下された。明治7年8月のことである。その約7カ月後の明治8年3月、女学家塾願書が提出されている。

【注24】『女性神職の近代』小平美香

(3) 荻野吟子と田中かくを招聘

女学家塾願書は、まもなく認可された。女教院であれ女学家塾であれ、設立となると必要なのは教師の確保である。そこでまずは目を付けたのが、姉小路家の女教集会で出会った荻野吟子と田中かくであった。ここでは内藤ますと荻野吟子の書簡から、吟子とかくが甲府に来るまでの過程を時の経過に沿って見ていきたい。なお、原文については、浅見徳男氏の『明治の女丈夫 田中かく子の生涯』内で翻刻されたものを使わせていただいた。

明治7年7月27日付 ます→かく

「吟子君を苦してなるべく教への道開かまく思ひはぬ。君も親君ゆるし給はば 片田舎もおかしき所ははべりぬ。見がてらになり給ふ御心はなきや。きかまほし」

(吟子さんにご苦労いただいて、なるべく教への道を開きたいと思います。あなたもご両親がお許しになれば、(甲府のような)片田舎にもおもしろい所はあります。見がてらにいらっしゃるお気持ちはありませんか。お聞かせください)

この書簡は、上記「女教院ハいか立給ひしや」の続きである。「吟子君を苦して」の部分から、すでに吟子との間では話がついているように思われる。まずはご両親への配慮をしながらかくを甲府に誘っている。この書簡に対し、かくが「さくらの花が咲く頃に伺いたい」というような内容の返信をしたであろうことが、明治8年1月24日付のかく宛ての手紙から分かる。そこには「さくら花咲く頃と御申越しを只々待つのみ」と、ますがかくの来甲を心待ちにしている心情が書かれている。ところが、かくの甲府行きに猛反対をしたのが、師の井上頼国である。頼国はかくの父・田中忠三に次のような書簡を送っている。

明治8年1月29日付 頼国→忠三

「角子君を甲府へ御遣にも可相成哉の趣候へ共、是ハ大ニ不宜敷儀ニ奉存候・・・一体甲府ハ人重不節行作見覺の為ニも不相成上、学問ハ一向開不申 殊に婦人ハ吟子程も読書之出来候者無之候へば・・・小人に御構無之様罷成度奉存候」

(角子君を甲府へ遣わすとのことですが、これは大いによろしくない・・・甲府は人間に節度がなく、行儀作法見習いのためにもよくなく、学問は一向にふるわず、特に婦人は吟子程も読書ができる者がいないので・・・小人にお構いなされぬよう)

「小人」というのは内藤ますのことである。振り返ってみれば幕末、頼国が幕府から追われていたときに匿ってくれたのがますではなかったのか。それなら、ますは頼国にとって恩人ともいえる人である。ではなぜ、ますを小人とまで呼んで反対したのだろうか。一説によると、妻を亡くした頼国は吟子に求婚したが、甲府行きを理由に断われたという。そうであるならば、愛弟子を奪ったますに対して面白くなく思っていた頼国が、今度はかくまでとられてしまうことに腹を立てたであろうことは容易に察しがつく。このような師・井上頼国の反対もあり、なかなか決断できないでいるかくのところに、吟子から甲府行きを促す次のような手紙が届く。

明治8年2月8日付 吟子→かく

「契りてし事を忘れ給はず、くれぐれも桜の花の咲初む頃にはかならずとこの事、萬寿子君もよくよく伝えてよと諸共に来月日をぞ待奉ル」

(約束したことをお忘れにならず、くれぐれも桜の花が咲き始める頃にはかならずと、この事、萬寿子さんもよ

くよく伝えてくれと（申され）、一緒に来る月日を待っていらっしやいます)

その約2カ月後、吟子は次のように書いている。

明治8年4月2日付 吟子→かく

「小子事も井上先生方ハ首尾与く御暇相願候へ者、弥當月下旬尔盤尚また甲府江参り候心組ニ御座候」

(私事、井上先生には首尾よくお暇をお願いしましたので、愈々当月下旬にはなおまた甲府へ参ろうと思います)

「なおまた甲府へ」という文言から、吟子はそれ以前にも甲府に来ていたことが窺われる。一方、まずはというと、桜が散り始めても、かくも吟子も来ない。気が気ではなかったであろう。次のかく宛ての手紙には、まずの待ちかねている様子が伝わってくる。

明治8年4月8日付 ます→かく

「花の頃とちきりしきくも知らんとて雪とま可ふまで、ちり者つるをみるも心せ可れ、待ちかねてゆう便のをのこを玉つらハせ者へる」

(花の頃と約束した桜も知らないかのように雪のごとく散りはじめているのを見るにつけても心がせかれ、待ちかねるあまり郵便配達を煩わせています)

また同じ書簡の中で、次のようにも書いている。

「未夕、新地のふしんも最中・・・いつ迄春て置難き故、此廿日頃開校と定メ者へりぬ」

(まだ新地の普請も最中ですが・・・いつまでも捨てて置けないので、この20日ころ開校と決めました)

「新地のふしん」とは、当時、藤屋温故堂が常盤町38番地【注25】に建築中のいわゆる「藤村式建築」といわれる建物のことである。上記の書簡には「4月20日ころ開校」とある。ところが、ますが明治8年6月9日付『甲府新聞』に掲載した右の広告には、常盤町において新築できるまで、八日町16番地の自宅でも6月2日から仮開校とあり、女学家塾は常盤町の西洋館ではなく八日町で1カ月半ほど遅れた開校だったようだ。そして、この広告の文面からみると、まずは常盤町の西洋館ができたならそちらへ移るつもりだったことが読み取れる。

その後、吟子とかくはどうなったのか。田中かくの遺稿『おもかげ』によると、吟子が頼国の家に行き話をつけてくれ、頼国は余り賛成ではないが、なんとか了承を得たようだ。そして、「荻野同道私18歳の春4月上旬甲府へ参り、家塾の準備夫々手伝い、5月中旬に開業になり、夫々子弟通ひ来るやうになりました」(荻野と一緒に私18歳の春4月上旬に甲府へ詣り、家塾の準備をそれぞれ手伝い、5月中旬に開業になり、それぞれ生徒が通ってくるようになりました)とある。5月中旬にはすでに始まっていたのかもしれない。

このように、ますの女学家塾は荻野吟子、田中かくなどの教師をそろえて、正式には明治8年6月2日に甲府八日町16番地で出発したと考えられる。

先般准許を蒙り候女学家塾之儀常盤町に於て新築出来迄八日町十六番地自宅にて本月二日より仮開校候間志願之方は入塾可被成候也
八年六月二日 教師内藤萬壽

【注25】岡島デパートの道を隔てて南側の現在、風月堂がある角地だと思われる。温故堂から出版された書籍の奥付を見ると、温故堂の住所が明治9年から10年には「常盤町38番地」、明治23年から29年にかけては「常盤町8番地」となっている。この2つは同じ場所だと思われる。

(4) ますの女学家塾は、どんな学校だったのか

先述した明治7年7月27日付書簡では「女学校を打ちまぜて」とあった。女学家塾と女学校は同じなのか、違うのか。あるいは、まずは単に「女の学校」という意味で「女学校」と書いたのだろうか。その答えとなるのが、『おもかげ』の中に出てくる次の一節である。

「今回甲斐の内藤ますさん国許に於いて女学校は免されず実塾を開設する由」

女学校が許可されず実塾となったというのである。これから、女学校と女学家塾は明らかに別物であるといえる。明治8年の時点で、日本にはまだ女学校と名がつくのは官立の東京女学校【注26】だけであった。ほかにもフェリスやアメリカン・ミッション・ホーム（後の共立女学校）などキリスト教系の学校がいくつかあったが、それらが女学校と改称するのは明治10年以降である。桜井女学校【注27】も最初は「英女学家塾」という名称で始まっている。

それでは、「家塾」とはどんなものなのか。学制では、尋常小学【注28】を下等小学と上等小学の2等に分けている。そして、この2等を「男女共必卒業スヘキモノ」と定め、それぞれ4年の修業年限の中で教える教科の順序を定めている。「その教科順序ヲ踏マスシテ小学ノ科ヲ授ルモノヲ変則小学ト云フ。但私宅ニ於テ之ヲ授ルモノハ之ヲ家塾トス」（その教科順序を踏まず小学の科を授けるものを変則小学という。但し、私宅に於いてこれを授けるものを家塾とする）と規定している。

また、学制では家塾を開く場合、教則その他詳記して学区取締に出し、地方官（知事・県令）が認可することになっていた。そのため、女学家塾願書も学区取締の窪田高寧【注29】を経由して県令の藤村紫朗に提出されている。下に示す「女学家塾規則」【注30】と「教則」【注31】はそのとき出されたものと思われる。

なお、学区取締とは、学制によって設置された地方教育行政の職制で、土地の名望ある者の中から府知事や県令が任命し、学区内の就学督励、学校の設立、学費の調達等、学事に関するいっさいの事務を担当していた。

では、ますの女学家塾はどんなものだったのか。女学家塾規則と教則から見てみたい。まず、下に示した「女学家塾規則」である。

①女子教育を「現在の急務」としてしている。

②通学生は無月謝で、寄宿生だけ一日米4合と1銭5厘を払うことになっていた。当時の公立学校はどうだったのか。学制では受益者負担の原則がとられ、規定によれば小学校の授業料は月額50銭を相当としていた。しかし、これは当時としては極めて高額で払えない人が多かったため、実際には、少額の授業料を徴収したり、貧民に対しては無料とする場合も多かったようだ。とすると、1カ月にすれば米12升と45銭を払える家庭は少なかったであろう。ますの家塾の生徒は当然良家の女子対象ということになる。

③女子を預かることから、特に外出についてはかなり厳しく、休日に運動するためであっても外出には教師が同行することを定めている。

次に、次頁の「教則」を見てみると、次のような特徴がある。

①学制では下等小学の年齢を6歳から9歳、上等小学を10歳から13歳としているのに対し、女学家塾は「小学正則」（学制で示した小学校における教科課程及び教授方法の基本方針）を修了していない女子を対象とし、特に年齢制限を設けていない。

②教科科目として「物理・歴史・経済学」といった近代教科内容があげられ、教授法も「書を読み字を知る」だけでなく、その「意義を了解させる」必要性を唱っている。それまでの寺子屋での読み書きは、素読が中心であったことに比べると、かなり教育的な配慮がなされているといえる。また、女学として、礼儀・裁縫などを別に

<p>女学家塾規則</p> <p>一 女子の教育は方今の急務たるを以て別紙表面の教科を設けて修学せしむ</p> <p>一 入塾寄宿の者は一日米四合金書錢五厘を入志む</p> <p>但外に月謝を要せず</p> <p>一通学の者は總て無月謝たること</p> <p>一 洗濯其外の賃銀は教師之を収入とし以て傭教師の給料其他の經費に充つ。</p> <p>一 出入時間は表面に記載する如く其時間八限に外出するを許さず寄宿の者は夜間と雖も己むを得ざる事故ある外ハ他出を許さず</p> <p>但休暇の日運動の為外出遊歩する時必ず教師の同行を要す猥獨歩遊行するを禁す</p> <p>一 此塾ハ技藝を傳習するのみに非ず女子の儀容を整頓し心操を貞婉にする為に設る者なれば起居動靜最も慎詳ならざる可らず</p> <p>但日用規程の細目は追て塾中に掲示志且教師朝夕之を規箴面命すへ志</p> <p>一 塾中の方法前規則の内不便のことありて生徒の中或いは（不明）る者あらハ公平商量志（不明）</p>
--

教則

第一条 此塾の（不明）小學正則を修志得ざる女子の為に設く故に専ら捷徑を旨とし修身物理歴史經濟學等の大意を學ハ志む

第二条 学科を分て五級とし一カ年一級を卒業せしめ都合五カ年の修業とす

但一日の課業を分て五時間とす午前八時より第十二時に

終り午後第一時より第三時に終る

第三条 凡そ教授の主意ハ書に書を読み字を知るのみにあらず最科目の書に就き其意義を了解せしむるを要す

第四条 算術は家計日用辨すへきを以て足れりとすれば其高尚の如きは姑く之を闕き唯其習得の速に志て當用に便ならんことを主とす

第五条 習學科目の順序を越ふて之を授く猥に等を超るを許さず

但毎月廿八日試験を逐け未熟の者は尚一ヶ月間温習せしめ

十二月に到り大試験を経て進級せしむ

第六条 婦人の學事ハ後年兒童を育成するの道理を体せしむる基なるか故言辭容止を謹教に志儀容となるへきを修習せしむ

第七条 縫織紡績は婦人内治の一事なるを以て學業教授の際別に其科目を施設志傳習すへし

第八条 追て塾規整頓の上ハ別に稚兒教育の方を設け婦女を志て育嬰の道を習得せしむへ志

設け、追って育児法なども設けるとしている。

③尋常小学は下等小学・上等小学それぞれが8段階（8級～1級）に分かれ、半年毎に1級進み、下等4年間、上等4年間で合計8年の修業年限であるのに対し、女学家塾では1カ年で1級進み、5年間で卒業としている。これは明治7年9月28日に、県令・藤村紫朗の名で出された変則教則に似ているが、変則教則が「優等ノ者ハ此限ニアラス」として5年でなくても卒業できるのに対し、女学家塾では、科目の順序を追って教授し猥りに等を超えることを禁じている。

④試験の仕方、一日の授業時間などは学制に倣っている。

女学家塾の規則と教則から、この学校が学制の基準にそって申請されていたといえることができる。

【注26】明治5年、東京府下竹橋に開校。竹橋女学校ともいう。開明的な教育を目指していたが、財政的理由で明治10年廃校。後に、東京女子師範学校附属高等女学校として再興。

【注27】桜井ちかが明治9年（1876）、英女学家塾として認可を受ける。明治12年、桜井女学校と改称。

【注28】当時、尋常小学という標準的な小学校のほか、性別、地域性、経済的理由その他により、女兒小学、村落小学、貧人小学など数種あった。

【注29】窪田高寧は、明治8年1月に山梨郡第一区の学区取締に選定された。「駿河紀行」の中に出てくる「高寧主」とは、窪田高寧のことだと思われる。高寧はますの歌会仲間でもあり、「甲府古学所月次歌」の中には、2人のほか、名取忠文、山本苗子など古学所社中の歌が載っている。

【注30】「甲府新聞」第185号

【注31】「甲府新聞」第185号

(5) 女学家塾の終焉

その後、女学家塾はどうなったのであろうか。『おもかげ』には「内藤家のひやうばん至極よろしく子弟親たち大喜び」とあって、開校後の女学家塾の評判は上々だったようである。しかしまた、次のようにも書いている。

「俗によき事にまがごといつくと云ふ世のならひ、突然にも八月末つ方内藤満壽子先生は眼病にかかり、医師の曰く是は中々捨置かれず、専門家へ入院の手配なさるべしと云ふにあり、一同驚き折角是迄の仕事此儘には捨置難く吟子へ留守中依頼と申されしが、同氏の曰く自分として此事業引受難く一時中止と致し・・・満壽子先生は直ちに東京専門家へ入院」

これによると、8月末にますが眼病にかかり、直ちに東京の専門家に入院することになった。留守を荻野吟子に依頼したが、吟子は引き受けられないということで塾は一時中止となった。それで、吟子とかくは帰郷してしまったようだ。このことから、二人の甲府滞在は4カ月くらいだったことになる。吟子は、その後、同年11月に開校した東京女子師範学校に入学している。

こうして、一時中断してしまった女学家塾は、その後、ますの眼病が治って再開することになる。ここでは、再開から終焉までの過程を見ていくことにする。再開を最初に田中家に知らせたのは伝右衛門であった。

明治8年11月20日 内藤伝右衛門→かくの父・田中忠三

「手違ルて不都合義少奈可ら須間、此度桜町江先月中新キル建候間 来月ハ母上も帰国仕故 開校仕候而已・・・
当月内角子さん御遣し被下候様御頼申上候・・・」

(手違いにて不都合の事が少なからず、この度桜町へ先月新規に建築いたしました。来月は母上も帰国いたしますので、開校いたします・・・当月内に角子さんをお遣わしく下さるようお願いいたします)

開校するので、かくさんを遣してくださいという書簡であるが、開校場所は予定していた常盤町ではなくて桜町であるという。文面から何か不都合があったようだ。桜町ということは、次のますの書簡にも書かれている。

明治9年1月4日 ます→かく

「此程桜町学ひの家居もいてしに付・・・君ちきりし事忘連給ハ須ハ・・・一と勢なら須バせめて年の中者も春
けけ玉いひね」

(此の程、桜町の校舎ができましたので・・・あなたもお約束したことをお忘れてないならば、一年がだめならせめて半年でも助けてください)

この書簡の1カ月前にも、ますはかくに縁談がまだ決まっていないのなら、半年ばかりお手伝いいただきたいという内容の手紙を送っていて、そのときは、風邪気味だったにも関わらず、わざわざ飯能まで赴いている。そして、1月4日の悲痛ともとれる書簡。しかし結局、かくが再び甲府の地を踏むことはなかった。

再開した女学家塾の場所については、明治33年2月28日付『山梨民報』にも右のような記事が掲載され、再開後の場所は常盤町ではなく桜町であったことは間違いない。しかし、今のところ、桜町のどこかは特定されていない。

記事はまた、ます自身が教鞭を執っていたこと、女学家塾の生徒数が35名であったことに加え、その後の経緯についても、公立の相生女学校が設立されることになったのを機に、ますは塾を閉めて全生徒をそちらへ移し、相生女学校の「監督」になったと伝えている。

当時の相生女学校に関する資料からは「監督」という職制は見当たらない。但し、『学制百年史』によると「当時、いずれの府県においても自発的に小学区に学校役員あるいは学校世話役というべきものをおいて、直接此所の小学校の世話や運営に当たっていた。その名称・員数・権限・選人方法等は区々で^{それぞれ}であった」ということなので、世話役のことを監督とっていたのかもしれない。相生学校建設にあたっては、伝右衛門は200円という大金を寄附をしており、ますが何らかのかたちで学校に関わったことも考えられる。

相生女学校が開校したのは、明治9年7月26日【注32】である。それでは、ますが生徒を相生女学校に移したのは、いつのことだったのだろうか。いくつかの資料から、その年代を推測してみたい。

明治9年8月12日付のかく宛て書簡の中で、ますは次のように書いている。

「塾中の子供もミ奈無事と候へハ 乍憚様御心安ふ思召被下度・・・御存の通り当年は私独りルてわづ可七八名なれといつ連も入塾故 何可とせ王のミ多く」

(塾中の子どもも皆無事ですのでご安心ください・・・ご存じのとおり、今年は私一人で、わずか7、8名ですが、いずれも入塾生のため、なにかと世話がかかり)

この書簡は相生女学校開校後1カ月も経たない頃に書かれたものである。塾中の子どもの無事を伝えているところから塾はまだ存在していたことになる。「皆無事なので安心してください」ということは、おそらくこの子

桜町通りへ開校して自ら教鞭を揮って其任に当り教育した生徒が三十五名程あったが其後相生町へ相生女学校と云ふものが公立にて建つ事となつたに就て私塾を閉て生徒を悉く同校へ移し満壽子は相生女学校の監督となつた事がある。

どもたちは、1年前、田中かくが教えて残していった生徒たちであろう。しかし『山梨民報』の記事によれば35名ほどいたはずの生徒は、この時すでに7、8名に減り、教師もまず一人であったことが分かる。

ついでながら、この書簡の日付については、これまでの資料では明治10年とも15年ともあり不明確であったが、同書簡内に書かれている「當年ハ當地もし者やニカ所ニ相成 両様ともよき役者まいり此程より者じまり候」（本年は當地にも芝居小屋が2カ所になり、両者ともいい役者が参って、このほど始まりました）という文言を手がかりに調べると、それまで甲府には亀屋座という芝居小屋が1カ所だけであったが、明治9年8月に魚町の三井与平という者が甲府桜街2丁目に三井座【注33】を開設したことがわかった。その舞台開き興行には、4代目中村芝翫、5代目尾上菊五郎、片岡我童という有名な役者が出演している。まずはこのことに言及したのである。

次に、アーネスト・サトウ（1843～1929）の日記から見てみよう。アーネスト・サトウはイギリスの外交官で後に駐日公使になった人物である。幕末に来日し通算25年間日本に滞在した。彼は旅が好きで日本各地を旅行するなかで、甲府にも4回ほどやって来ている。また、大の好きであり、そんなこともあって内藤伝右衛門と親しくなったのであろう。甲府に来るたびに傳右衛門を訪れている。

彼が残した日記の明治10年4月20日のところに意外にも内藤ますが登場する。サトウは初めて会ったまですの様子を次のように書いている。

「その後、内藤伝右衛門の事務所へ向かった。彼は公益性のある本屋であり年間購読料が二円で、約二千の部数を持つ『甲府デイリーニュース』の発行者でもある・・・彼の母親である満寿を紹介された。彼女もまた息子同様企業心のある人で、女学校の校長をしており・・・」

サトウはまず女学校の校長をしていると紹介されたのだろう。とすれば、まだこの時点では学校があったことになる。これより8カ月前の書簡では、生徒は7、8名しかおらず、その世話に一人で手を焼いていたようでもあった。これまで学校が維持できたのだろうかという疑問は残る。あるいは、外国のお偉いさんを迎えて、まだ「女学校の校長をしている」とつい見栄を張ってしまった可能性も皆無とはいえない。

というのは、日記中の「約二千の部数を持つ」の部分であるが、『アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流』の中で、著者の稲岡勝氏は「発行部数二千は、内藤がサトウに吹聴した数字のようだ。同紙は一六休刊だから、年間約五十八萬部の勘定になる。この部数は内務省凶書局の新聞統計と比べると、較差が大きすぎる。内藤は見栄をはって誇大な数値を伝えたものであろう」と述べている。筆者が『山梨県統計書』（明治16年）を調べたところ、明治10年の統計はないが、それに一番近い明治12年の『甲府日日新聞』発行高は163,940部で、やはり伝右衛門はかなり大見得を切っていたことがわかる。因みに、この翌年の明治13年12月、伝右衛門は新聞事業を主幹の野口英夫に譲っている。こんなこともあって、まずに対しても多少の疑いを持ってしまっただけで、根拠があるわけではない。

それから約半年後の明治10年10月31日付かく宛ての書簡には次のようにある。

「さてよきなき次第ありて東京江支店出し 當時其支配致しおり候」

（さて、余儀ない次第があり、東京へ支店を出し、現在その支配をしています）

内容から明らかに学校を処分した後である。

まずは、この頃から明治12年ごろまで東京支店にいた。「文淵閣夜話」の中で著者の浅倉屋久兵衛は、明治12年ごろの東京書林について当時を思い出しながら「通監町の藤傳（内藤伝右衛門）、甲府の内藤の支店【注34】で、常に切髪姿【注35】の老母が帳場に坐つてをりました。此人は中々の物知りで修身書の著述などがありました。店には『宋元通鑑』の板木等を所持してゐました」と述べている。

サトウの日記の内容が真実であるならば、まずは明治10年4月20日から、東京支店が開店する明治10年10月までの間に学校を処分したことになる。まずの女学校はこのようにして終わりを告げた。

【注32】7月25日という説もある。

【注33】『市民読本甲府の今昔』 三井座はその後、座主が替わり明治17年に桜座と改称された。

【注34】この頃、内藤の支店は日本橋十軒店5番地と同通 鹽町11番地の2カ所あった。通鹽町の支店は明治13年2月3日、道を隔てた橋町4丁目5番地のせんべい屋から出火した火事のため延焼。

【注35】鬘を結わずに髪を頭の上で束ね、先を切りそろえる髪型。未亡人などが出家の意味で結った。

5. 女紅場で芸娼妓に

女学家塾が閉鎖された約2年後の明治12年、まずは再び県内の女子教育に携わることになる。女性に教育を与える場の一つとして明治4年から15年ころにかけて日本全国に設立された「女紅場」という教育機関があった。女紅場は学制や教育令などの法規制の枠外であったため、地域の実情に合わせて設立することができた。平成25年の大河ドラマ『八重の桜』に出てきた新英学校及女紅場という京都の女紅場（京都では「よこば」と呼ばれた）は、英語学校も兼ねた良家の子女のためのもので、後に公立の女学校になっている。しかし、多くの女紅場は下層階級の子や芸娼妓に「読み・書き・算盤・裁縫・手芸」といった必要最低限の教育を与えることを目的としていた。

山梨県では明治12年6月に甲府新柳町の遊廓内に芸娼妓を対象にした女紅場が開設されている。江戸時代、甲州街道の宿駅であった甲府柳町に飯盛女を置いた旅籠があったことは先に述べたが、これが近代国家としてふさわしくないという新政府の命により、明治3年、飯盛女を置く旅籠を当時の増山町（現・天神町の一部と武田3丁目の一部）に集めて遊廓をつくり、町の名を「新柳町」とした。

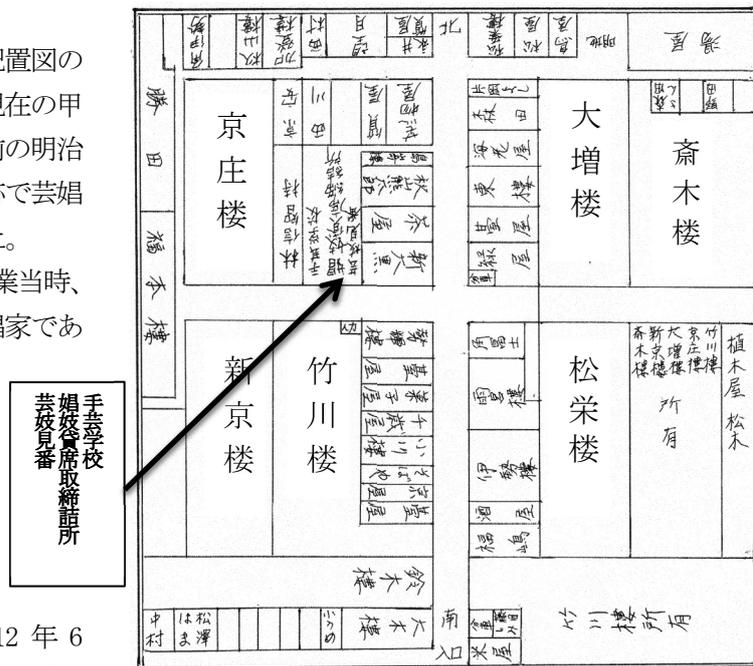
明治12年5月27日付の田中かく宛ての書簡【注36】に「よぎなき用事ありて明後日国元へ帰り候可 此度は急ぎて三十一日ニ着致さねハ不相成」（余儀なき用事があり、明後日国元に帰ります。この度は急ぎで31日に着かねばならず）とある。この「よぎなき用事」というのは、明治12年6月8日の女紅場の開業のことではないだろうか。「31日に着かなければ」というのは、開業に当たり6月1日に打ち合わせなどがあったからではないだろうか。

資料6は明治17年ごろの新柳町遊廓配置図の写しである。松栄楼とその右隣の辺りが現在の甲府市北東公民館の位置である。この5年前の明治12年6月8日、新柳町遊廓内の旧三井楼跡で芸娼妓を生徒とする女紅場の開場式が開かれた。

三井楼というのは、明治3年の遊廓開業当時、京庄楼（当時は京松楼）の右隣にあった娼家である。明治12年、女紅場はその跡地に新築された。しかし、明治17年の遊廓配置図には女紅場の名前はすでになく、矢印で示した女紅場があったと思われる場所には「手芸学校・娼妓貸席取締詰所・芸妓見番」が置かれている。

女紅場開場式当日の様子を伝える明治12年6月9日付の『峡中新報』【注37】には「新柳町女紅場の開業は幸ひに好天気にて市在遠近より出掛たる見物人は廓中黒山の如く・・・百数十名の芸娼妓は楼々思ひ思ひの揃ひの湯衣にて場中に詰掛」とあり大変盛況だったようだ。同紙はまた、県官と三業頭取【注38】の祝辞の後「内藤眞壽子の演説は辯舌爽かにして流る水の如く芸娼妓たちを感動」させるほどであったと伝えている。

山梨県の女紅場は、当時の藤村紫朗知事が「芸娼妓たちがやがて正業につき良妻になれるために」と、客の来ない昼間に学べるよう開設したといわれているが、開場式で内藤ますが演説をしているところから、この女紅場



資料6 明治17年ごろの新柳町遊廓写し

開設については、同じ境遇を経験した内藤ますのアドバイスがあったのではないかと推察される。まずは、女紅場で「読み・書き・裁縫」などを教えていたようで、ここでも、まずは女子教育に係わっていたのである。

女紅場はいつまで続いたのだろうか。明治16年11月24日付の『山梨日日新聞』に「女紅場の生徒が試験を受けた」という記事が掲載されている。しかし、上に掲げた明治17年ころの遊廓配置図では、女紅場があったと思われる場所が「手芸学校、娼妓貸席取締役所、芸妓見番」になっていることから、明治17年初めころまでは続いたであろうと考えられる。全国的にも学校教育の充実により、その頃までには女紅場は消えていった。

【注36】この書簡が書かれた年については、明治10年・12年とも、明治10～15年ともいわれ明確でなかったが、文中にある「吟子も當月初一才参り此廿五日ハ休日・・・一日ニ者まいるへくなれい・・・」（吟子は当月初めにちよつと参り、この25日は休日なので・・・1日にはまいるでしょう）を手がかりに調べてみた。吟子は当時東京女子師範学校の生徒で、休日、つまり日曜日にしか来られない。そこで、明治の暦のなかで5月25日と6月1日が日曜日になる年を調べてみると、それは、明治12年（1879）しかないことから、この手紙の年月日を明治12年5月27日と断定した。

【注37】明治12年3月、県内の豪農層が株主となって創刊された反藤村県政を掲げる新聞で、県内における自由民権運動の機関紙となった。峡中新報社の株主には、依田孝、薬袋義一、小田切謙明、林間、加賀美平八郎、大木喬命、寺田喜平治などのほか、ますとも親交のあった窪田高寧、新海吉哉も株主であった。主幹は茨城県出身の佐野広乃。一時、発行部数は『山梨日々新聞』をはるかに上回っていたが、明治16年7月廃刊となる。

【注38】貸座敷と娼妓と芸妓の3業の長。

6. 女子交際会とのまじわり

明治18、19年になると、女子師範学校等で中等教育を受けた女性たちが社会に出てきて、そうした女性たちを中心に「親睦、教育、風俗改良、社会活動」などの目的を掲げ全国的に様々な女性団体が現れた。その一つに「女子交際会」というのがあった。

東京女子交際会、横浜婦人交際会などが出てくる中で、山梨県でも明治20年1月に「女子交際会」が設立されている。その直前の明治19年12月に「女子交際会設立大意」が出されていて、驚くことに、協賛者の中に右【注39】のように「内藤萬春子」の名前がある。

		協		發
		賛		発
		者		人
内藤萬春子	大木夫人	高木夫人	藤村夫人	相原りか子
				權太きん子
				宗てい子
				長野はな子

「女子交際会」発起人と協賛者

この会がどのようなものであったかを明らかにするため、ここに名を連ねた発起人と協賛者について少し説明を加えておくことにする。まず、発起人は次のような人達である。

長野はな子は長野県出身で、明治17年、東京女子師範学校を卒業。会発足当時、山梨県尋常師範学校二等助教諭であった。

宋てい子は埼玉県出身で、明治19年、東京女子師範学校を卒業。当時、山梨県尋常師範学校訓導をしていた。

権太きん子は長崎県出身。夫は甲府出身で、当時甲府学校校長をしていた権太政^{ただし}。政が東京師範学校を卒業し長崎県の小学校に勤務していたときに知り合い結婚した。明治15年、夫とともに山梨県に来て、当時、甲府学校の訓導をしていた。その後、明治20年には「優秀なる小学校教員」として知事表彰され、明治23年に甲府尋常高等小学校相生教場長となっている。東京女子師範学校卒という資料もあるが、筆者は確認していない。なお、明治27年8月、ますが発起人総代となって在韓軍人に慰労物品を寄贈するために寄附を募った際、権太きんが寄附をしているところから、その後も付き合いがあったと思われる。

相原りか子は山梨県出身。徽典館中等師範科を卒業し、明治20年に権太きん子とともに「優秀なる小学校教員」として知事表彰を受けている。

協賛者の4人のうち、藤村夫人は、山梨県知事・藤村紫朗の妻。夫が熊本出身なので、おそらく彼女もそうではないかと思われる。

高木夫人は、当時の山梨県書記官第一部長・高木忠雄夫人。夫は知事と同じく熊本県出身である。

大木夫人は、山梨県書記官第二部長・大木房英夫人である。出身地は明らかではないが、夫は中央官僚で沖縄県書記官も務めているところから県外者と思われる。

当時、内藤ますはすでに62歳であるが、他の人たちは夫の年齢や師範学校卒業年などからして、20代前半から30代半ばであったと推察される。つまり、この会は若くて教育程度の高い教師たちが主導し、県関係の名士夫人たちを誘い入れて発足した会であり、しかも、県外出身者が多いことが分かる。

明治20年1月11日付『山梨日日新聞』に「藤村・高木・大木の三夫人等にも大に其挙を協賛せられ既に加入せられたりと申す」とあるから、この3人は実際に入会したのであろう。同紙は、内藤ますが入会したかどうかについては言及していない。

それでは、この女子交際会は、内容的にはどんな会だったのであろうか。「婦人（女子）交際会仮規則」【注40】の第一条には、「本会の目的は同じ心の婦人協同して女子の風習を改良し家政の学を講習し・・・女子の教育を拡張せらるる聖旨を翼成・・・」とある。女性が団結して女子教育の拡張を唱えたことは今までになかったことで、山梨の女子教育が新しい時代に入ったといえる。しかし、一方、第五条には、「本会の目的に賛成する者は誰たるを問はず入会するを得ると雖も其職業によりては之を謝絶することあるべし」と排他的な一面もあった。

同会は、毎月第一日曜日の午後1時から甲府錦町にあった山梨県尋常師範学校の女教場を会場に例会を開いていた。しかし、この会は長く続かなかった。そのきっかけとなったのが、明治21年1月15日に甲府桜町の長養亭で催された懇親会で、会員たちが酒を飲んだことが『山梨日日新聞』で取り上げられ、世間の厳しい批判を受けたことであった。このことが躓きとなって、まもなく解散状態【注41】になっている。

ますはが同会の中でどのような存在であったのか、これだけでは見えてこない。しかし、会発足にあたり協賛者として名を連ねているということは、教育程度の高い若い女性教員たちから山梨県女子教育の先人として、一目おかれていたのであろうと推察される。

【注39】 峡陽文庫より写し

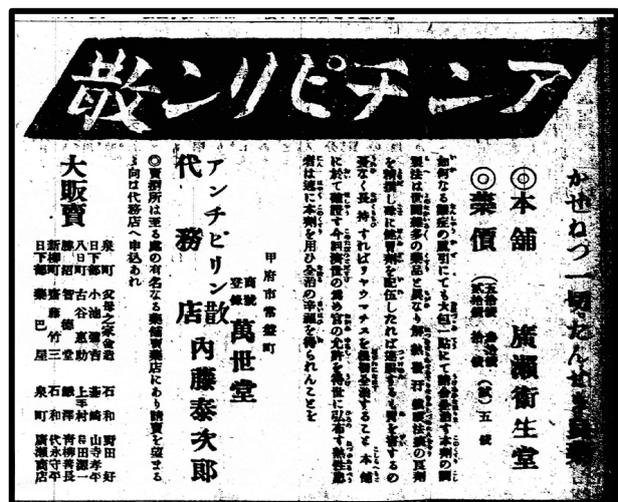
【注40】 明治20年1月11日付『山梨日日新聞』

【注41】 解散後、明治23年11月9日、女子交際会の会員であった訓導・竹沢せんと深田いね、ほか11名が発起人となり、「山梨婦人会」という名称で再出発している。しかし、中心的存在であった竹沢せんの退官後、衰退。数年して明治32年9月18日、このときは権太きんが中心になって、小田切浦乃・幣原たへ・齋藤とし・志村こう・進藤つる・成嶋なか・若尾えい等とともに「山梨婦人会」を再興している。

7. 家族はますをどう見ていたか

夫・伝右衛門とますとの間には子どもがなかった。養子・伝右衛門との親子関係はうまくいっていたが、商売が順調にいけばいくほど、ますは自分の血筋を残したいという思いが強くなったであろう。おそらくそんな理由からだろうが、「伝右衛門の嫁さがしには自分で乗り出し、自分に気に入った娘でなければ見合わせなかったほどだ」と書いている資料がある。結局、ますは実家の坂本家から弟の娘、つまり自分の姪を伝右衛門の嫁に迎えている。そして、元治元年（1864）伝右衛門が19歳のときに、長男・実太郎（～1896）が誕生。続いて泰次郎、厚三郎、謹四郎と、ますの「孫たち」が次々に誕生している。

明治34年3月16日付『山梨日日新聞』にある薬屋の広告（資料7）が掲載された。よく見ると、そこには「甲



資料7 『山梨日日新聞』

府常盤町 萬世堂 内藤泰治郎」とある。泰治郎（1865～1925）は伝右衛門の次男である。温故堂で出版された出版物を調べてみると、泰次郎は明治10年くらいから日本橋区通盤町とおりにおちょうにあった内藤の東京支店を任されていたようで、奥付に泰次郎の名前が見られるようになる。しかし、明治25年（1892）6月出版の『現行改訂山梨県令達全集』の奥付には、「編纂兼発行者 山梨県甲府市常盤町8 内藤伝右衛門」に加えて、「印刷者 山梨県甲府市常盤町7【注42】 内藤泰次郎」とある。その後、東京支店関係で泰次郎の名前が出てこないことから、明治25年ごろまでに泰次郎は甲府に帰ってきたものと推察される。明治25年ころというのは、傳右衛門が新井白石著『読史余論』の版權をめぐって文部大臣に対して版權侵害の訴訟裁判【注43】を起こしていた時代である。泰次郎の帰甲はこの裁判と関わりがあるのかもしれない。時を同じくして東京での内藤の事業は、明治26年末ごろからは、温故堂が温故書院にかわり、住所も東京市日本橋区馬喰町3丁目4番地になっている。

『山日』の広告欄に薬屋として「内藤」の名が出てくるのは明治24年2月ごろからで、売薬煙草舗として泰次郎の名前が出てくるのは明治27年1月から、「内藤萬世堂」の名前が現れるのは明治33年2月からである。

この店名「萬世堂」の「萬」は、祖母であるます（萬寿・萬春など）の名前からとったものだと考えていだろう。ここに、泰次郎の祖母・ますに対する思いが込められているように思われる。

もう一人の親族で、坂本篤（1901～1977）という艶本作家兼出版人がいる。内藤傳右衛門の四男謹四郎の長男である。伝右衛門の嫁は、坂本家の一人娘だったので子どもを必ず後継ぎにするという条件で嫁入りした。それで三男の厚三郎が養子に入ったが早世したため、謹四郎が代わって坂本家に養子に入り「坂本姓」になった。それで、篤も坂本を名乗っている。

篤は艶本出版一筋で何度か警視庁に摘発され、昭和35年には、林美一著『艶本研究国貞』を販売したことで猥褻文書販売容疑で起訴され、通称「国貞裁判」と呼ばれる13年間にわたる裁判の結果、有罪になり罰金10万を払っている。このことは国（文部省）に対して戦いを挑んだ祖父・伝右衛門に通じるところがある。

篤は『「国貞」裁判・始末』に収録の「末尾に付して自己を語る～艶本蒐集・製造人の“ルーツ”」の中で、ますのことを次のように書いている。

「ご先祖様のことをいうと、こちらは赤面なんです、いちばん偉いのは曾祖母ひいばあさんの満寿」
これらのことから、ますは家族から尊敬されていたと考えられる。

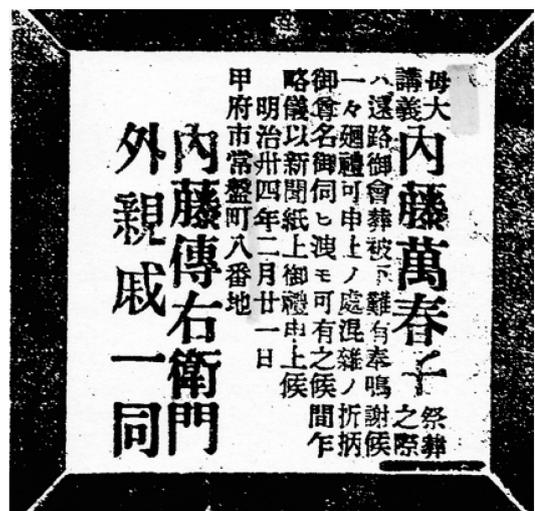
【注42】 常盤町7番地というのは、現在、岡島デパートの東隣の武藤呉服店のところである。萬世堂という薬屋はここにあったのかもしれない。

【注43】 藤伝は第一審判決（明治24年5月21日）、第二審判決（同26年1月17日）ともに敗訴。大審院判決（同28年4月4日）でも敗訴。大審院判決には「本件控訴ハ之ヲ棄却ス。控訴及ヒ上告ノ費用ハ上告人ノ負担スヘシ」とある。裁判にかかった費用は大変なものであったと考えられる。

8. おわりに

明治初期の激動の時代に「教化」と「教育」の両面で山梨県の女子教育のために尽力した内藤ますも、明治34年2月20日、79歳でその生涯を閉じた。資料8は傳右衛門が『峡中日報』に出した会葬御礼である。「母大講義 内藤萬春子」とあって、教導職として彼女が最終的に第7級の大講義になっていたことが分かる。

ますの死去については、当時の県内主要3紙（山梨日日新聞、峡中日報、山梨民報）がそれぞれ追悼記事を載せていて、県内における彼女の存在が大きいものであったことが窺われる。



資料8 会葬御礼

〈参考文献〉

1. 『山梨県史』第3巻、第4巻、第5巻 山梨県 昭和36年
2. 『山梨女性史ノート』明治編 山梨女性史ノート作成委員会 1989年
3. 『近世名婦百人撰』岡田良策 明治14年
4. 『明治烈婦伝』松村春輔 明治16年
5. 『明治名婦百首』高島藍泉 明治17年
6. 『日本賢女百人伝』山崎彦八 明治27年
7. 『甲斐女人論』上巻 「明治初期の女傑内藤増子」 川手秀一 1931年
8. 『甲州郷土と人』 「内藤伝右衛門」 佐藤森三 1970年
9. 『郷土史にかがやく人々』第3集「内藤伝右衛門」 清雲俊元 昭和45年
10. 『山梨百科事典』 「内藤満寿」山梨日日新聞社 1972年
11. 『山梨日日新聞百年史』 「内藤満寿」山梨日日新聞社 1972年
12. 『甲斐と甲州道中』 「内藤満寿」飯田文弥 2000年
13. 『アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流』稲岡勝 2002年
14. 『内藤伝右衛門と「峡中新聞」の創刊』五味正弘
15. 『甲府買物独案内』伊勢屋宗助 明治5年（嘉永7年の増補改訂版）
16. 「駿河紀行」翻刻 加藤時男（「甲州文庫」収蔵資料「するが紀行」内藤ます著）
17. 「幕末明治の女性内藤ますの生涯とその教養形成過程」論文 河田敦子著 2010年
18. 『人文』10号 「国民教化政策と女教院～復古と開化をめぐって～」小平美香著 2011年
19. 『おもかげ ～田中かく遺稿～』田中かく著 1954年
20. 『明治の女丈夫 田中かく子の生涯』浅見徳男著 2009年
21. 『飯能市郷土館研究紀要』第2号 飯能市郷土館発行 2002年
22. 『宣教使堀秀成 だれも書かなかった明治』錦仁著 平成24年
23. 『女教草』内藤末須著 明治6年
24. 『跡見花蹊日記』跡見花蹊著 2005年
25. 『日本旅行日記』アーネスト・サトウ著 庄司元男訳 1992年
26. 『女性神職の近代』小平美香 2009年
27. 『「国貞」裁判・始末』林美一・坂本篤・竹中芳著 1979年
28. 『対文部大臣著作権侵害要訟訴訟と内藤伝右衛門』稲岡勝 2008年
29. 『山梨県統計書』山梨県 明治16年
30. 『山梨県教育百年史』明治編 山梨県教育委員会 昭和51年
31. 『学制百年史』文部省 1972年
32. 『法令全書』内閣官報局 明治5年、明治6年
33. 『山梨近代史論集』 「善光寺灯籠仏占い禁止前後」有泉貞夫 2004年
34. 『花埋み』渡辺淳一 1975年
35. 『中教院規則 大教院規則』東京大学文学部宗教学研究室 平成12年
36. 『姉小路公知伝』関博直著 明治38年
37. 「明治初期の国民教化策についての考察」小山毅 1964年
38. 「土地台帳」甲府市常盤町 甲府地方方法務局
39. 『相生小百年のあゆみ』相生小百周年記念行事実行委員会 昭和51年
40. 「甲州文庫史料」第1巻 昭和48年
41. 『本屋のはなし』長沢規矩也編 昭和56年
42. 『山梨県史』資料編14 平成8年
43. 『市民読本甲府の今昔』1953年

《筆者 プロフィール》



本プロジェクト会員。1946年、甲府市に誕生。慶應義塾大学英文科卒業後、山梨県立甲府第二高等学校・同身延高等学校教諭。1986年、アメリカへ子連れ留学。アイオア州ドレイク大学で教育学修士号取得。ドレイク大学・帝京ポウスト大学で日本語科講師。2000年帰国。帰国後、劇団さくらっ子などで男女共同参画推進に関わる。

第 2 章

「全国女性史研究交流のつどい in 岩手」参加報告

1. 「次世代につなぐ、性と生殖のヘルスエンパワメント ～昭和の母子健康センターにおける出産体験当事者の語りから」

発表者：伏見正江（山梨県立大学看護学部教授）

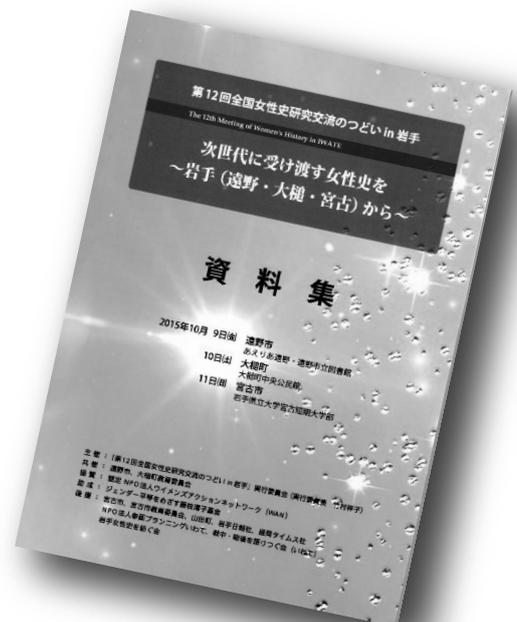
共同発表者：鈴木因子・佐々木文子・久保川正美・古明地喜代美・池田政子

2. 「全国女性史交流のつどい in 岩手」に参加して

小野鈴枝・中沢勝子・鈴木因子・佐々木文子

本章は、3.11大震災の大被害を受けた岩手県で開かれた「第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手 次世代に受け渡す女性史を～岩手（遠野・大槌・宮古）から～」の3日目、10月11日に宮古会場で開かれた分科会「性と生殖」での発表、および参加メンバーの感想よりなる。

1の発表内容については、上記「つどい in 岩手」の資料集（右）に収録されたものを主催者の許可を得て再掲した。



1. 次世代につなぐ、性と生殖のヘルスエンパワメント

～昭和の母子健康センターにおける出産体験当事者の語りから～

○伏見正江 鈴木因子 久保川正美 古明地喜代美 佐々木文子 池田政子
(山梨県立大学 やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト)

I はじめに

山梨県は、全国的に『〇〇県女性史』が刊行された1980～90年代にも『山梨女性史ノート』(年表3編：明治編～昭和前期編)が刊行されたのみで、通史としての女性史が刊行されていない。山梨の歴史を公的な記録に残りにくい女性たちの暮らしや生き方という視点から見直していく作業は地域文化のためにも必須である。本プロジェクトは2005年度から実施され、その核は地域住民との協働である。プロジェクトの目的は、『山梨女性史ノート』を活かした文献研究から、職業を視角とした「聞き書き」を行い、山梨県女性史構築の資料を蓄積する。さらに、成果物の刊行、公開研究会(「やまなしの女性史を学ぶ」講座)の開催等、公的な記録に残りにくい山梨の女性たちの暮らしや生き方という視点から見直す作業をとおり、新たな地域文化の創造へとつながる可能性を探究している。本稿はお産の文化に深くかかわる助産婦という職業を視角に取り組んだメンバーの報告である。

II 「聞き書き」から捉えた山梨の助産婦活動

既に2005年より5人の助産婦という『職業』に従事した女性たちの聞き取りを行った。その「聞き書き」から生の軌跡としての個人史年表を作成した。さらに、『山梨女性史ノート』から「産婆・産婆会」に関連する記事を抽出し、明治編・大正編・昭和前期編の年表を再構成した。また、「聞き書き」の作業を通して「源村愛育会館」(南アルプス市)の見学・視察を行った。

5人の助産婦の個人史に共通する点は、1940年(昭和15年)、1947年(昭和22年)の旧制度免許の資格である。戦前戦後を通して山梨の助産婦の独自の歴史、家庭分娩全盛期における専門職としての生き方には、助産婦という職業にかけた情熱が窺える。

山梨の助産婦は、助産院、母子健康センター、愛育会助産部門など県下で活躍し、時代と共にどこの山梨の地域においても「女性と共に在る」専門職の気概があった。

山梨の助産婦も戦前戦後の出産の変動、制度に翻弄されるなかでも、助産婦は結婚前後で中断することなく仕事を継続している。

III 性と生殖における健康と権利とお産の場

本プロジェクトがスタートした2005年当時のお産を巡る状況を見ると、全国で産科の病棟や診療所の廃止が相次ぎ、安全・安心・満足なお産の確保が社会問題化し、深刻な危機に直面していた。「厚生労働省2005年度医療施設(静態・動態)調査」によれば、産科・婦人科のある病院は1,616施設で、前年より50施設が減少していた。また、産科・婦人科施設5,997施設のうち、分娩を取り扱っている施設は2,033箇所ですべての48.9%にすぎず、1984年の調査開始以来、初めて50%に満たない状況が浮き彫りになっていた。山梨県においても産科・婦人科施設の43.8%が分娩を扱っているに過ぎなかった。このように身近な

「お産の場」が失われつつある実態は現在も続いている。

東日本大震災前の岩手県遠野市の状況は、人口 3 万人余りで年に約 220 人の出産があった。しかし、お産を扱う医師は一人もいない状況であるため、妊婦は 40 分以上かけて通院していたが、「地域のお産を守りたい！今できることを考えよう」と、市の一室を改装し、2007 年末に助産院を開設している。（朝日新聞 2009. 1. 7）

「遠野を参考に、在宅で胎児と母体の情報を得られる仕組みを目指したい」と、助産院には全国から毎週のように視察団が訪れていた。本報告者も震災前に視察の機会をいただき示唆を受けている。

今から 50 年前、この遠野市の状況と同じ現象が山梨県北杜市小淵沢町で生じている。山梨県初の母子健康センターの活動を視察する大勢の見学者が団体バスで毎月 30～40 人と訪れている。そのセンターで出産を体験した女性たちは「母子健康センターが、今あればいいなあ。」と、現在の産科医療の危機を憂いながら思いを語っている。

IV 母子健康センターにおける出産体験当事者の語り

母子健康センターとは、母子の保健指導部門と助産部門を持つ公営助産所である。1957（昭和 32）年に厚生省の母子健康センター事業により、1958 年に 52 ヶ所が設置されて以降、毎年 50 ヶ所前後の設置があった。最高時には全国で約 700 施設となった。

山梨県における母子健康センターは、1958 年（昭和 35 年）4 月に小淵沢町に第一号が開設され、1976 年（昭和 53 年）までには 12 ヶ所となっている。その内、助産部門は 11 ヶ所に設置された（表）。当時は助産施設がなく妊婦の 95%が自宅分娩であったため母子健康センター設置を強く要望していた町もみられた。白根町母子健康センターは県内でも愛育班組織が町内全部に確立され、地域の女性たちのセンターへの関心が高まり設立に繋がっている。

	母子健康センター	所在地	開設年月日	助産部門の閉鎖	ベット数
1	小淵沢町	北巨摩郡小淵沢町上笹尾 2538-4	昭和 35 年 4 月	昭和 56 年 3 月	5
2	白根町	〃 白根町飯野 2804-1	昭和 37 年 3 月	昭和 53 年 4 月	6
3	八田村	〃 八田村榎原 794-13	昭和 38 年 10 月	昭和 53 年 4 月	3
4	竜王町	〃 竜王町西八幡 892 番地	昭和 39 年 6 月	昭和 58 年 3 月	6
5	河口湖外 4 組合立	南都留郡勝山村勝山	昭和 39 年 8 月		9
6	高根町	北巨摩郡高根町村山北割 1689-1	昭和 40 年 2 月	昭和 59 年 6 月	6
7	上野原町	北都留郡上野原町向風 5537-1	昭和 40 年 4 月	昭和 52 年 4 月	8
8	中道町	東八代郡中道町上曾根平屋敷 1890	昭和 40 年 8 月	昭和 42 年 8 月	6
9	白州町	北巨摩郡白州町白須 1341	昭和 41 年 4 月	昭和 56 年 12 月	6
10	市川	西八代郡市川大門町 643(646)	昭和 41 年 4 月	昭和 53 年 1 月	6
11	須玉	北巨摩郡須玉町藤田 769	昭和 41 年 5 月	昭和 58 年 5 月	6
12	塩山市	塩山市上於曾 1040	昭和 53 年 4 月	なし	なし

表作成：山梨県衛生統計年報・市町村史より

その母子健康センターで出産を体験した当事者からその体験を聴くことで歴史的資料を得ることを目的に聞き書きを実施した（2009年11月）。

母子健康センターでのお産を語る会に参加された方は白根町母子健康センターで出産を体験した女性6名であった。データ収集・分析については、フォーカスインタビューを行った。内容は承諾を得て録音し逐語録を作成した。その後データを抽出・分析した。倫理的配慮：協力依頼は、研究の主旨と共に文書で行い、承諾を確認後、参加者の都合の良い日時・場所でインタビューを行った。データは匿名とし、目的以外に使用しないこと、事前に面接時の録音と結果の公表についての承諾を得、面接時のテープは逐語録作成後に速やかに消去した。

出産体験を語った女性の6人の年齢は70代後半であり、出産体験は1960年（昭和37年）から1975年（昭和52年）の間であった。白根町母子健康センターの出産体験者の語りからは次の状況が明らかになった。出産は多い月では30人であり、お産の費用は1万5千円から4万3千円であった。『食事』は開設から3ヶ月くらいまでの産婦は、米を持参し具沢山の味噌汁、肉や魚が美味しく栄養的で食事内容が良かった。『家族の関わり』は実家が近く、祖母・母の付き添いと上の子の面倒を見てもらえて助かった。母親の体験談が参考になった。『妊産婦健康診査と保健指導』は定期的に月に2回。嘱託医の健康診断・保健指導があり、産後の健診と児の1ヶ月健診は同様の助産婦・保健婦が担当、育児指導及び予防接種はすべてセンターで行なわれている。母子健康センターの閉鎖後も健診事業は継続され、保健所の栄養士による調理実習も喜ばれている。女性たちは母子健康センターの体験を『感謝の想い』として語っている。「最高の喜び」、「地域の皆に育ててもらった」、「初産で心強かった」、「助産婦さんが身近にいて一番良かった。」、「心配なことはきめ細かに聞いた。」、「家の近くで出産できて良かった。」、「助産婦が介助し、安心して出産ができた」、「日常生活もよく知っていて安心」、「母親の様な感じ」、「何があってもすぐ対応してくれた」、「育児で義母と意見が合わない時、助産婦さんから話してもらって助かった。」、「自然に寝ていて我慢できるような出産だった。」等である。その他では「病院での出産は促進剤を使った陣痛が凄い印象に残った。」「産まれると母子健康センターへ地区愛育会の会長・役員がお祝いに来た。」等を語っている。

V 性と生殖のヘルスエンパワメント

母子健康センターは「幻の施設」と言われ、公営助産所の存在と盛衰の経緯を知る人は多くはないだろうと考える。その中でも現在、身近な地域で出産できる場がなくなったことを機に、農村地域の1960～70年代に産み育てた女性たちの中から「今、母子健康センターがあったら！」という念願の声を聴く。

女性たちの語りからは、まさに身近な地域で女性の産む力を育み出産の文化を育てたセンターの活動が明らかになった。出産の当事者の意識は時代とともに変化をするだろう。しかし、大災害を機に公営助産所の設置など出産を根源から見つめなおすオルタナティブな実践が求められている。

先行研究では、リラックスしたお産と、緊張をさけられぬ集約化された環境下のお産では結果に違いが出ることが報告されている。自然なお産がしたいという女性は全国的にも増加している。身近なところでの安心な出産を望む女性の選択権の保障は、国連北京行動綱領、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖における健康と権利）につながる。少子時代に伴い女性たちの求める「主体的に産むお産」に対して、個人の価値観に合ったお産ケアが求められている。このようなニーズに応じ、妊産褥婦への細やかで継続的なマタ

ニティケアを提供するデザインが望まれる。

母子健康センターというシステムは残念ながら失われてしまった。ニュージーランドでは、思春期の子どもたちにもバースセンターで月経相談が受けられるシステムが整えられている。妊婦の約60%は助産師だけで出産し、お産には必ず助産師が立ち会わなければならないシステムである。また異常なお産の場合にも、必ず助産師が立ち会う。お産だけではなく、女性の生涯を通じて地域で相談できるシステムが整っている。岩手県立大船渡病院副院長・岩手県遠野市「ねっと・ゆりかご」監督医師 小笠原敏浩医師の研究報告（2009年）によると、「妊産婦と密にかかわる助産師が検診や出産を担うと、育児の意欲や自信が高まり、虐待が減る効果も認められており、もう一度出産したいという意欲につながり、少子化の歯止めになる。」と、興味深い報告がされている。安全性の追求のために高度に医療化するだけでなく、女性の希望・快適性を考慮する制度や政策が次世代につながるヘルスエンパワメントとして見直されることが大切であろう。



2009年11月24日 山梨県南アルプス市役所にて

引用・参考文献等

- 1) 山梨県立大学やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト編：「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち 第2集、2014年。
- 2) JAWW (Japan Womens Watch, 日本女性監視機構)：JAWW NGO レポート～北京+20 にむけて 日本語概要、2014年11月10日。
- 3) 山梨県立大学やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト編：「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち、2010年
- 4) 伏見正江・久保川正美・鈴木因子・古明地喜代美：白根町母子保健センターの歴史 ― 当事者の出産体験の語りから（やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト2010年度研究報告書、山梨県立大学地域研究交流センター、2011年）

2. 「全国女性史研究交流のつどい in 岩手」に参加して

○小野鈴枝（山梨市）

10月9日～11日の3日間、「第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手」に参加してまいりました。山梨からは最初4人と2日目に2人と合流し、計6人の参加です。

1日目は遠野市です。東北新幹線新花巻駅で乗り換え、ローカル色豊かなJR釜石線で遠野まで。銀河鉄道を模して各駅の案内板には銀河鉄道の絵が描かれています。池田先生、一生懸命カメラに納めていましたね。

遠野駅着15時43分でしたので、会場に着いた時には、すでに基調講演は終わっていましたが、米田佐代子先生の分科会「戦後日本の平和主義と女たちの平和思想」―「8.15」から「3.11」をむすんで考える―には、間に合いました。米田先生の報告は、日本の女性の戦争体験と女性たちの「いのちの平和」を求める実感が、戦後日本国憲法9条にしめされる「非武装・非交戦」の平和主義の原点になったということと、女性の平和認識の流れを追ってみるという報告でした。宿泊は同じ会場の「ホテルあえりあ遠野」です。

2日目は大槌町中央公民館まで、バスにて1時間の移動です。バスの中から見ると津波の被災地の様子は、まだまだ復興の形ではなく、土台作りというか基礎のかさ上げの状態です。大槌町の役場は、最後まで女性職員の避難誘導の放送が繰り返し替えしされていたところです。あの女性職員が犠牲となった役場は、外見だけが残され、周りには何もなかったです。また、会場となった中央公民館は、高台にあり、津波の時の避難場所となったところだそうです。

11時からの記念講演は、大門正克氏による「小原麗子『自分史の生を編む』―「おなご」、そして「戦争」―」、昼食時には大槌町役場職員の「東日本大震災大槌の被災について」1時30分からはシンポジウム「3度の津波と戦中、戦後を語る」。終了後、バスにて約1時間30分の移動で、宮古市にて宿泊です。

3日目は、宮古短期大学の会場にて、「性・生殖」の分科会、特に、伏見正江先生による「次世代につなぐ、性と生殖のヘルスエンパワメント」に参加しました。やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクトメンバーの立場による報告でしたので、私も何だか参加しているような気分になりました。帰りの時間の都合もあり、12時には会場を後にし、宮古駅より盛岡まで急行バスで移動。車中より素晴らしい紅葉の景色を見ることができ、被災地ばかり見てきたので少しほっとしたところでもありました。

3日間、移動時間が長く体力的に大変なところもありましたが、思い切って参加してよかったと思っています。池田先生、大変お世話になりました。ありがとうございました。

○中沢勝子（中央市）

東北には電車で行ったことがなかった。行くまでは楽しみと不安とがあったが、意を決して参加した。遠野行きの電車の中で、地元の人と出会った。「身延線より綺麗な電車だね。」とつぶやくと、「私、身延山へ行きました。」とその方が話しかけてくださった。そこから話が弾んだ。その方は「この地には

南部神社があり、山梨の南部と縁があり、日蓮宗の寺が多くある。」と教えてくださった。その夜は、その南部神社のすぐ下にあるホテルだった。そこの料理の美味しかったこと。嬉しいことが続くと、出発前の不安はいつの間にか消えていった。

全国大会は、その名の通り全国から参加者が来る。バスで会場へ移動するとき、長崎の方と一緒にあった。その方は、高齢であったが、世界各地を旅しているなど話の内容が濃く、興味深く尊いひとときであった。大会は、各会場が離れていて一日ごとにバスで移動する。その途中で海辺の町がバスから見えた。その町は、津波に襲われ、何もなかった。少し行くと仮設の住宅がやっと見えてきた。高台の会場からは、そんな町の様子が一望できた。

発表では、80歳～90歳の3名が自分の生き方、生きる姿について話された。東北大震災では、街が全て流され、それまでの生活が一瞬にして失われてしまったこと。その後、仮設住宅に移り現在に至ることを話された。つらい出来事であったにもかかわらず、どの方も明るく話されていた。そして、最後に全国の皆様に深く深く感謝しますと、頭を下げていた。つらいことがあっても強く生きる姿に心打たれた。県立大の伏見先生も部会で事例発表をされた。

女性史とは幅が広く奥が深いもの。それぞれの立場で考え、とってきた行動が後世に残っていくことであろうと、改めて感じた。

帰りは、浄土ヶ浜から盛岡まで2時間半路線バスに乗った。山梨の山々と違い、なだらかな道を走る。早い時期の紅葉が見事であった。盛岡から新幹線で東京まで、また2時間半。こちらは速くて驚きであった。

また縁があったら、東北へ旅をしたい。

○鈴木因子（笛吹市）

一日目 あえりあ交流ホール：米田佐代子先生の分科会に参加

二日目 大槌町中央公民館：大門先生の講演会に参加

三日目 岩手県律大学宮古短期大学部：伏見正江先生の分科会に参加（帰路の時間調整との関係があり、やむなく途中退場せざるを得ませんでした。伏見先生、申し訳ありません。ドアをそらっと閉め、外に出ました。）

地震発生時から山梨の地で新聞、テレビの映像を視、凄い。凄い。わ～っ怖い。これっ、どうしたこと、何が起きているの・・・身体中を震わせながら見入っていました。

現地である遠野・大槌・宮古に、私はいま入りました。野を越え、山を越えた津波の痕跡は、どのような言葉を以てしても言い尽くせない。語り伝えることは不可能だと思いました。どのような言葉で語り伝えればいいのか、私にはない。

この地をひとりひとりが、自分の足で歩くことができると強く思いました。瓦礫の凄さ。盛り土の凄さ。復興は・復興は・現地に入ることができた私は何ができるのか、何をしなければならないのか・・・そうだ、五月の連休にはこの地をまた訪ねよう、と思いました。

○佐々木文子（南アルプス市）

10月、2泊3日で参加の予定でしたが、私だけ他用があり1泊2日となってしまいました。岩手県宮古市は初めて行く土地、盛岡から山田線で宮古までスムーズに着いて、そのさきは何で行こうかなと考えながら駅舎を出た。すると駅前に「浄土ヶ浜パークホテル」のお迎えのバスがあり、これに

乗れば行けるのだと安心して乗り込んだ。遠いんだなと思いつつ揺られて着いたのが、海が見える高台の素晴らしいホテルで良かったと思いつつも、震災のときはどうだったのかなとあの頃のテレビの映像が浮かんで来て目頭があつくなつた。

1時間ほど待っていたら先生や他の方々も来て合流できてよかったとほっとする。皆さんは今日一日のスケジュールをこなして疲れているはずなのにみんな元気でいろいろ話してくれた。

11日、今日は最終日発表者の講演を聞けるので楽しみに会場へ入った。そこで私は失態に気づく。せっかく山梨から持って行った『伝えたい 山梨の女性たち』の本をホテルに置いてきたのだった。小野さんがタクシーでホテルまで持ちに行ってくれた。

伏見先生の発表は～昭和の母子健康センターにおける出産体験当事者のかたりから～でした。次に森下静子さんの発表で、潮風の村から～ある女性医師の軌跡～と題して山上千恵子監督の無医村で働く女医の物語を映画化したものでした。時間の関係で最後まで見られなかったのが残念でした。

小野さんは伏見先生の発表や森下静子さんの発表もほとんど見られず、大変申し訳なく思い反省することしきり。帰りの乗り物の手配は小野さん任せですっかりお世話になり、先生や他の皆さんにもお世話になりました。有り難うございました。



大槌町公民館にて（左から、鈴木因子・小野鈴枝・米田佐代子・中沢勝子）

女性史をつつなぐ

全国研究交流のつどい in 岩手から

「次世代に受け渡す女性史を」。遠野市から大槌町、宮古市へと会場を移動しながら11日まで3日間にわたり開かれた第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手(同実行委主催)は全国から約300人が参加し、活発な研究報告が行われた。同つどいから女性たちの戦争体験や東日本大震災に関する分科会、シンポジウムなどの内容を2回にわたって紹介する。

遠野市のあえりあ遠「させない」という言葉野で開かれた第2分科会を女性の平和認識の発表は、「戦中・戦後70展と評価。その思いを年(上)」がテーマ。軸に「アジアで日本兵平和を実現するための」が行ったことの痛みを女性の使命や、戦時中わがこととしてつかみの女性に課せられた役割、痛みの心を持ち割について参加者が考「続けることが他者理解を深めた。」の基礎になる」と強調。

NPO法人平塚らいてつが「女性が暮らしを守る」というの会会長の米田佐とが平和を守る概念に代子さんは、安保関連なるとした。法案に反対する母親た戦中・戦後を語りつちが訴えた「戦争に行く会いわての箱石邦夫かせない、どの子も殺さんは、教員時代の生

戦争体験や記録語る 生活守る意識が平和へ

〈上〉



平和のために女性がなす役割や戦中の女性に課せられた仕事などについて具体例を交えて語った分科会

方、その後勤労働員を通じた戦争への関与を後悔している人が多くいることに言及した。会場からの発言で、遠野高女の生徒を引率した女性が、繰り上げ卒業で10代で女学校の教員となったことや、頻繁に空襲に遭い何度も防空壕に入った壮絶な体験の一端を語った。

コーディネーターを務めたNPO法人ウィメンズアクションネットワークの井上輝子さんは「戦時中の被害と加害を記録し、思い起こすことが現在の日本を考え直すきっかけになる。この会がそれを考えるきっかけになればよい」と女性たちの活動に期待を寄せた。

徒が調べた遠野高等女学校(遠野高女)の勤労動員の例を紹介。あ子さんは、勤労働員を女性が生徒に向けた手紙に、後年、なぜ当時に戦争に反対しなかったか問われたと書いたことを引き合いに、「特定秘密保護法成立以降、黙っていても、行動しなればいけないという流れが顕著になってきた」と述べた。また、「お国のために」と語った一

〈遠野でのシンポジウムを伝える「岩手日報」の記事〉

*岩手日報の許可を得て転載

第 3 章

聞き書き

1. 娘が語る 詩人・堀内幸枝：堀内幸枝さん（詩人：1920 年生まれ）
*語り：谷口典子さん
 2. 病人に寄り添う友として：植松喜久江さん（医師：1923 年生まれ）
 3. 山梨県女性初の専門職司書として生きる：浅川玲子さん
（図書館司書・図書館館長：1929 年生まれ）
-
-

聞き取り・聞き書き作成

三科恵美子・相澤正子・藤本ひろみ
吉原五鈴子・山中淑子・古明地喜代美・佐々木文子・清水武子
鈴木因子・立川聖子・中澤勝子・久保川正美・池田政子

1. 娘が語る詩人・堀内幸枝

堀内 幸枝 ほりうち・さちえ

- 1920（大正9）年9月6日生
市之蔵村（現・笛吹市一宮町）出身、西東京市在住
- 話し手：谷口 典子（堀内幸枝さん長女、西東京市在住）



娘からひとこと

母について、私は十分理解できてないところがあるだろうと思っております。それは母の深層というか、深いところまで理解できていないということなんです。その一つは、とても複雑な思いが絡まっているのだろうということ、もう一つは、母がなかなか口に出して子どもの前では言えないのであろうということです。

一番パツと思うのは、母の生まれた「とき」と「ところ」。この二つが結局、現在94歳までの母を全部縛ってきたのではないかというのが、私の理解なんです。

母は地主の家に生まれました。小作人の大変厳しい生活を見て、その生活を母はずごく身に沁みていたようなんです。私には、その生活の様子は想像しかできませんけれど、住まいも、食事も、ひどいもので、トイレも外で。母の生活と小作人の生活のちがいを子ども心に強く感じていたと思うのです。

私は、昭和18年（1943）生まれで、小、中、高、大学、そして23歳で結婚するまで、親との密度の濃いときを一緒に過ごしました。その中で見てきたものは大きかったと思います。母の内なる葛藤や相克、さまざまな思いを受け止めてきたような気がします。

還暦を過ぎてから、私も詩集を出しまして、次第に母の心を理解できるようになってきました。私自身、詩人などという思いもかけない姿に戸惑いを感じながらも、どこかで母を受け入れています。

ふるさと

母の生まれたところは市之蔵村（現・笛吹市一宮町）です。村全体は緩やかな傾斜地で御坂山系の扇状地に点在する小さな寒村です。とても水の豊富な所で、川の横に手杓を置いて水を飲んだり、お米も洗ったりしたそうです。山が東に迫っているので、日の出は遅く西日はゆっくり落ちていきます。

大正9年（1920）、母は、堀内逸栄・ひさじの長女として裕福な地主の家に生まれました。弟が2人いました。逸栄は、つまり私の祖父ですが、俳句を好んで、飯田蛇笏の結社『雲母』の市之蔵支部を作り、自宅で学問好きな青年を集めて句会をしておりましたので、母は8歳の頃から、その会に参加するようになったのです。ひさじは、私にとっては祖母ですが、「俳句苦になる馬鹿になる」などと言って、文学的感性には乏しかったようです。

祖父は文学的で感性が豊かな人だったので、熱心に取り組んでいたんだと思います。それで句会するとき、祖母に代わって母がお茶を運ぶことになったようです。長い袂の着物を着せられて。

母はだんだん句会の仲間に入り、種々意見を聞いたり、俳句らしいものを作ったりしていったらしいんです。「さっちゃん（母）は俳句より詩の方が向いているね」と皆に言われたりしながら、それが詩への目覚めだったのかもかもしれません。

女学校へ ～村から初めて出る～

入学試験は難しくて競争率は3倍だったので、合格したときは大変うれしかったようです。昭和8年（1933）、山梨県立山梨高等女学校（現・県立山梨高等学校）、村からは母1人でした。父に連れられて学校まで3里の道

のりを歩きながら、母は村以外を知らなかったの、草履をはいている人が1人もいないのに驚いたそうです。

女学校は遠いので、人力車で送り迎えをしてもらったそうです。制服で出掛ける母に、小作人の子どもたちが「幸枝さん、いってらっしゃい」と言って送り出す。その時、母は子ども心にも、小作人の大変厳しい生活に疑問を持ち、とても心を痛めていたようです。地主の家の自分とのあまりの生活のギャップなどに。

一方で学校に通いながら、母は四季派の田中冬二の詩集『青い夜道』を読み、強い影響を受けて、日記のように詩を書き始めたんです。カバンの中に詩集をいつも入れていたため、所持品検査で先生に見つかり教員室に呼ばれて叱られたこともあったと言っていました。

大妻専門学校 ～東京へ～

女の子は良いところへお嫁にやるのが親の役目と、東京の良妻賢母の学校へ入学させればという祖母の考えから、母は「行かされた」という感じで、大妻専門学校（現・大妻女子大学）に入学しました。

麴町の寄宿での生活は、寮長がいて、朝晩、点呼があって、面会者は両親の承諾を得なければ会えなかったと。母はお裁縫科だったそうですが、お裁縫に関しては一番ペケだったと言っていました。でも、当時は兵隊の軍服や肩の記章などを縫わされていたそうです。そんな2年間を過ごして、卒業と同時にふるさとに帰ったのです。

詩の原点となった市之藏村

東京で大学生生活を2年間送って、複雑な思いを抱えて市之藏へ帰ってからは、村の暖かな太陽、草の匂いの中で都会のことは忘れたように、草履をはいて田圃へお茶を運んだり、自然の中での日々を過ごしたようでした。

そんな折、知人の紹介で甲府のNHKに勤務していた「コギト」の詩人船越章と出会うんです。

母の詩を読んだ船越は、早熟の才能に驚きと興味を持って「四季」の田中冬二に紹介、田中も感心して「四季」に載せて下さったそうです。それが三好達治の目に止まり、取り上げられ、以後、母の詩は次第に認められていったのでした。

私が生まれる前のことで、詳しくは分かりませんが、母がもともと持っていた詩への洞察、感性の鋭さを思うと同時に、それが市之藏の土壌の中で育まれたものだったと、決して他のところでは母の詩の原点は生まれなかったのだと思うんですね。だから一番最初にまとめた『村のアルバム』っていう題での詩集、14歳から18歳くらいまで書き連ねたものが、私は永遠の母の代表作だと思っているんです。

村の自然を写したもの。村の自然を愛していたんです。その自然の中で物を考えたのです。乙女の頃の感性が詩によく出ているんです。私は母に「一番素晴らしい詩は、『村のアルバム』よね」って、半分母を揶揄しながら、これを越えるような詩はないわねって。村の自然、生活、全て感じたものが詰まっているのです。

これは市之藏村と向かい合うことによってできた詩なんです。自分と自然との対話です。その中に、母の心に強く残ったであろう社会状況があったんです。地主と小作人との関係の矛盾です。母は、今で言えば“ステータス”を持った地主側です。でも、そこから抜け出すことはできないんですよね。

憧れの君

もう一つの詩の原点は、10歳頃、級友でとても頭の良い、性格の良い子が級長で、その姿が凛々しくて、母はすごく尊敬していたらしいんですね。その子が実は最初の憧れの君だと思うんです。ところがその子の家は特に貧しい小作人で、ブラジルに移住したんです。母はその子への思慕というんでしょうか。その人が母の永遠の心の恋人なんです。

勿論今までにいろいろな人との出会いもあり、思いもそれぞれあつただろうということは私も感じましたが、本質的な「慕う」という思いが永久の恋というなら、それが唯一無二のものだったんでしょう。母の心に今もあるようです。

母が90歳のとき聞かれたんです。「どうしているかしら、元気かしら、手紙を出したいけど・・・」とね。私

は「何言ってるの」と言いました。

『村のアルバム』の中に『蕎麦の花』という詩があります。これは母が乙女の頃書いたたった一つの恋愛詩だということです。母に「初恋は？」と聞くと、『蕎麦の花』と答えるんですよ。

詩編を袂に嫁ぐ

昭和17年(1942)、22歳になった母は、お見合いで弁護士千葉只彦の四男千葉幸男と結婚するんです。14歳から書き留めた詩を胸に嫁いだのです。戦中でしたので、男性が戦地に行って少なくなってしまうなかで、両親を安心させるためにも結婚するしかなかったらしいです。

その頃は、ほとんどお見合い結婚ですから、堀内さん家のお嬢さんということだけで、趣味が何なのか、考え方が合うかとか、そういうことは考えない時代でした。

まじめで生活が安定して、釣り合いがとれる家同士であれば良かったらしいですね。母は14歳からずっと書き続けた詩をまとめて、花嫁衣裳の中に隠して嫁いだといいます。詩にも書いてるんです。「紅い花」の最後に「一人の少女の嫁ぐ酒盛だった 彼岸花の押花のある詩集を隠す少女だった」と。詩作のことに對しては、父は母がそれほど詩に傾倒していることを知らなかったのです。ものの捉え方が父と母は合わなかったようですが、そのことを考えると、父も可哀想、母も可哀想、と思います。

当時の結婚事情というものは、文学だとか、絵画とか、歌とかを女性がすることはどうも理解されませんでした。男性でさえも非難されましたものね。その点、父は立派でなかなか紳士的でした。それに、とってもハンサムだったんです。

結婚生活を甲府市の千葉家で始めました。千葉幸枝になったのです。父は四男だったのに千葉家を継ぐことになり、姑達との生活が始まりました。

が、3ヵ月で婚家を出ることになるのです。母が姑との同居に耐えられなくなって、実家に戻っちゃったらしいんです。実家に戻っても居候、出戻りです。祖母に「みながしているように袂に石を入れて山の池に身を投げるように」と言われたそうです。そこで母は東京に出るしかないと思い、父とは何かあった訳ではないので、父を誘ってというか、唆して夜逃げのように、着の身着のままで東京に出たんです。長男の伯父がふとんを一組だけ送ってくれたそうです。父は親戚の口利きで上野の精養軒で働き、住居は池袋でした。

父出征のため疎開

私は昭和18年(1943)に生まれました。戦争真っ只中で、私が1歳を迎える前に父は出征したのです。丙種だったのに応召。私の手形を取り、日の丸に押しつけて、たすきに掛けて行進するのを、母の背中で見送ったと聞きました。

母は私を連れて実家のある市之藏に疎開しました。そして、母は『村のアルバム』をまとめるのです。14、5歳から20歳までの間に書きためたものを父の出征中にまとめているんです。終戦になり、翌21年(1946)父が復員しましたので上京して日暮里に住みました。そして妹光子が誕生、4歳下です。

詩人たちとの出逢い

昭和23年(1948)、日暮里から新宿へ転居しました。そして以前甲府で出会った「コギト」の詩人船越章と再会したのです。多分ですが、甲府の放送局のときお世話になったり、憧れの的なものも持っていたんじゃないかと思います。さらに「ユリイカ」の出版者であり編集者の伊達得夫との出会いも、母の夢を大きくしていったのです。

近代詩から現代詩へと流れていくときだったので、そこに「清楚な花を咲かせたい」というのが母の夢でしたが、そのためには苦しむことが多かったと言っていました。戦後の「ときの変化」です。そうした時代の流れの中でも、母は大勢の著名な詩人達と出会い、愛されて注目されるようになっていきました。

伊達得夫の力添えで、「ユリイカ」から詩集『紫の時間』を出版しました。編集者でもある伊達が装丁しているのです。

素敵なお方々に出会い、憧れを持つということは、私は肯定していたんです。母にとって、大切な素晴らしい時間だと思いました。ある意味恵まれていて、引っぱってもらい、母も詩集を出し、人の出入りも多くなって、多忙になっていきました。

そんな中、母は、心はいつも土の匂を深いところに置きながらも、そこに人間としての想い、男女間の心の機微など、いろんな意味が入ってきた詩を書くようになりました。

母の思い

母は詩集を出版するのに、父に相談したわけでもないし、費用を出してもらっているのでもないのです。当時、母は学習研究社とか主婦の友社などで活躍していて、収入があったようです。郊外に土地まで求めたようです。

父は、朝出掛けて帰宅するまで母の姿は知りません。家族が出掛けて帰ってくるまでの間が、一番、母の詩作の上で大切に重要な時間だったんです。父は留守の間の母の状況は知らないんですが、何となく、においで感じていたようです。黙認してたんですね。

母は母で、自分の感性で話せる人を求めているのかもしれませんが、家庭を守ることも忘れませんでした。

父の思い

父は母のつけている家計簿を見るんです。1円でも合わないと「合わないはずはない。計算というものは絶対に合うものだ」というのが口癖で、よく言い合っているのを耳にしました。様々なことに妻としてきちんと対応してほしいと思う父でした。

例えば、玄関にはお花を活けて、お掃除もちゃんとしてほしいとか。そんな些細なことでしばしば諍いがありました。

父は、そういう不満はあったようです。母の頭の中は詩のことで一杯のようでしたから。でも父もだんだんわかってくるんですね。「詩を書くな」とは言わないんです。要するに、やるべきことをやっていたら詩は書けると。だから、詩そのものが悪いとか、やるなとかという言葉は聞いたことはないんです。

私は子どもとして、どちらも悪いわけじゃないのに、不幸というか、悲しいというか、とても残念なことだと思っていました。

父は非常に論理的で合理的でしたが、心は温かいんです。感情をそのまま出すような人ではないんです。男性としてはしっかり見守ってくれて立派だったと思うんです。父は実務的な人でしたので、後々は上野精養軒の社長、そして会長、相談役まで勤めあげました。

夢の個人詩誌

昭和29年(1954)の暮、伊達得夫の助言と協力とで個人詩誌「葡萄」を創刊しました。当時、女性が詩誌を出すなんて、なかなかできなかったらしいですね。まだ、社会的にも抵抗があったようです。でも母の詩を絶賛する伊達や仲間の応援で生まれたそうです。個人誌の草分け的存在でした。

母は10歳の頃から個人詩誌を出すときには「青き葡萄」と決めていたようでしたが、「青き」が消えていました。表紙のデザインは、伊達の発想だそうですが、母が私の部屋に来て、折り紙をハサミでメチャクチャに切って白い紙の上に並べてできたものです。毎号色を変えるだけで、50年以上ずっと同じデザインです。とても愛着があります。私もその本を持って新宿や渋谷の本屋さんに置いてもらえるよう頼みに行きました。

母は「葡萄」45号にこんなことを書いています。

のろまさんの私は、現象と係わる資質が薄いのか、あーだの、こーだの話し合うより、文学(詩)

を20年30年ぐらいの単位で考える方が変化や人間の本質に近づいていけるような気がしてならない。

ここには、伊藤桂一、田中冬二、藤富保男等多くの作家や詩人が寄稿していました。次第に詩人たちが我家に集まるようになり、文学の話し合いが続くのです。私が学校から帰ってくると、奥の部屋に数人が円座になり、母が中心に居て、皆が怒鳴っているような声で意見の交換をしているのです。威勢の良い声はいつまでも続いて、夕方になると、母は、突然、買い物かごをさげて飛び出していくんです。こんな毎日が続きました。でも、母は輝いていました。でも、その頃の母への思いを私は後にこんな詩に綴っています。

「夜半（よわ）」
あなたの娘になって
私の淋しさが
あなたを求めるほどに
もっと寂しくなっていたわたしを
あなたは知っていたでしょうか

母はそんな中、詩集とも、エッセイともつかない本を出します。詩集『不思議な時計』です。詩とも小説とも言えない怪しげなジャンルです。そしてこの本のあとがきに、こう書いています。

思えば女の宿命というものが絶えず外部の圧力で変化するのに対し、絶対に生活の作用を受けつけない地帯を構築し、そこに自分の生存を思うままに転移してみたい。

この思いが母を強く歩かせているのです。この本も伊達得夫、大岡信、田中冬二氏などの方々に助けられて「ユリイカ」から出版されています。大岡信が跋文を書いています。

『不思議な時計』がH氏賞候補になったことにより、母は益々忙しい毎日となっていきました。続いて母は日本現代詩人会に入会。北川冬彦などの詩人と作曲家の集まりである「蜂の会」にも入会。その当時の母は認められている喜びと淡い恋心とで、ある意味幸せだったと思います。

『村のアルバム』出版

結婚のとき秘めていた詩的場書房より刊行しました。この作品は、生まれた村への限りない愛を謳ったもので、母は自然と真正面から向かい合ってます。船越章が序文を書いており、三好達治や川端康成からも賞賛の言葉や感想文を頂いています。このとき、母は出版記念会をしました。

ふるさと市之藏に生まれ育ち、父親から受け継いだ詩的感性と洞察力の鋭さ、それをとおして子ども時代に見た社会の複雑さと不条理を心の奥に秘めた母の詩は、市之藏の土壌の中で育まれたと言えます。ですから、一番最初にまとめた『村のアルバム』は母の詩の原点であり、ふるさとへの讃歌でもあると思います。

「別れちゃったら」

私が中学3年生のころだったと思います。母は30代の後半。両親が些細なことで争うんです。私、母に言ったんです。「お母さん、そんなにお父さんと合わないのなら、別れちゃったら」「冷たい戦争のような中に私は居るのはいやだから。私も協力するからね。大学は自分で努力して行くから」と言ったんです。

母は何も言わなかったんですが、多分自立して生きていく自信がなかったからだと思います。

母は子どもの頃、恵まれた環境の中で育ちました。土があって、生活があったわけですが。若いときに郷土の土壌から培われた深い郷愁も、なんとか結婚生活における困難を乗り越えたいという思いも、結局、母は捨てることができなかつたんです。

なぜできなかったか。たぶんそれは母の弱さでもあったかと思うんですね。「別れたら」と言われても「うん」とは言わない母でした。

母は詩の世界でお金を使うときには、そのお金は原則1銭も父からは出してもらわない、というスタンスだったですね。

私は自身の大学進学の際、文学は嫌いではなかったけれど、「私はこっちの道を行く」と政治経済学部を選びました。母と同じ轍を踏みたくない、という変ですけれども、母は母、私はそこに入り込みたくないと思いました。

高校生時代には第一次安保闘争があって、私は純粋な思いに突き動かされて、論理的な裏付けはまったく無いのに1人で国会正門前に行きました。夜12時過ぎに帰宅したとき、両親はまだ寝ずに心配していて、とても叱られました。止められても行く私に、母は白い運動靴を買ってきて、ついてきましたね。子煩悩なところもありました。

当時は母の活動が益々広がっていった時代で、母にとっては、詩の世界だけでなく、父と私と妹との家庭生活の両立は大変で、一番苦しんだときだったと思います。

詩に曲がつく

作曲家の中田喜直、塚田晃弘、田中隆司等により曲がつけられ、それらの作品は声楽家に歌われるようになりました。そして昭和37年(1962)42歳のとき、日本音楽著作権協会に入会しました。

2年後には、詩集『夕焼けが落ちてこようと』を昭森社より出版、詩と音楽の会「波の会」にも入会し、深尾須磨子や四谷文子たちとの交流も始まりました。

昭和45年(1970)50歳で、日本ペンクラブ会員となりましたが、力強い推薦の方々がいたのでしょう。そして同じ年、「堀内幸枝 詩曲の夕べ」を日本歯科大学ホールにて開催しました。

『村のアルバム』増補版新装再刊

小川和佑の協力のもと、冬至書房より以前出版した『村のアルバム』に14編を加えた44編をまとめたもので、表紙には母の手織の絹布を使っています。この本は母の永遠の代表作だと思います。私も後押しをしました。船越章が序文を書いているのです。この頃から、堀多恵子とも交流が始まりました。

詩の変化 心の変化

その翌年の昭和46年(1971)「サルビア」という詩に、中田喜直という有名な作曲家が曲をつけてくださいました。この詩は母にしてはめずらしく過激といえれば過激な詩で、最初の行から、母の抑えられ秘められた思いが出ているような気がするもので、そこがもしかしたら、皆様に強く受け取ってもらえているのかしらと。よく課題曲になっているんです。「サルビア」の出だしですが、

サルビアの花を体に一杯ふりかけて頂戴
その色は血の色だわ

母の意外性に皆様驚いたようです。これは芸大の課題曲にもなりました。歌いこなせれば、詩と歌の心が分かって最高の曲だといわれました。『村のアルバム』が母の原点と言いましたけれど、村から出て東京で父との生活の中でもがきながら出てきたのが「サルビア」で、母のもう一つの側面ですね。

草野心平の家も近くで、母も声を掛けられてよく集まりに行っていました。奥様が新宿で「学校」というバーをやっていて、集まりの後、流れて行って、母の帰りが遅くなったとき「何時だと思ってるんだ」という父の大きな声を聞いたこともあります。そうした葛藤の中で、母は「サルビア」他9曲で芸術祭賞を受賞しました。

昭和50年(1975)には、詩集『夢の人に』を無限社より出版。翌年56歳のとき、日本文芸家協会に入会。山

人会では作文審査員や特別講座の講師も務めています。

随筆『市之藏村』刊行

『市之藏村』は詩的散文集で、結婚するまでの5年間を書いたものです。この作品は全国学校図書館協議会選定図書・日本図書館協会選定図書となりました。

母は都会で時々病気になっては、秋のキリギリスのように村のキューリを食べに実家にたどり着く。理屈じゃないんです。母の身体の不調は村に帰ることによって治るんです。この随筆集は主に串田孫一編集の『アルプ』に書いたものですが、市之藏は本当に母の心を育ててくれたふるさとです。

新川和江編の『女たちの名詩集』にも作品が収録されました。

平成元年（1989）母は古希を迎える年齢になりましたので、私の近くの西東京市保谷パークハウスに転居してきました。そして、『日本現代詩文庫 堀内幸枝詩集』を土曜美術社より刊行。続いて三茶書房より、詩集『村のタンポポ』を出版しました。

ふるさとに詩碑

平成5年（1993）笛吹市石和図書館で母の詩の朗読会が開かれまして、母はふるさとに帰ることが多くなりました。詩碑建立の話も出てきて、一宮の浅間神社境内に建てられることになりました。刻まれたのは「桃の花」で、小川和佑の選んだ詩です。小林秀雄が作曲して今も広く歌われています。

母は何事にも自ら積極的にアプローチすることはなかったと思いますが、周りからどうですかと言われて動くのです。ある意味では、すごく幸せだと思うんです。みんなに押され、引っぱっていただいたんですね。それは当時女流詩人が少なかったせいでもあるかと思うのですが。

母の詩に曲がつきCDやDVDなども出しました。母はそれほど音楽に深い関心を持ってはいなかったのにチャンスに恵まれました。

平成9年に堀内幸枝歌曲の会「桃の花会」が石和町にて開かれ、その後平成19年まで10年続きました。

日本詩祭の折は、日本現代詩人会から母は先達詩人として顕彰され、新川和江が母について詩界に与えた功績と人となりを紹介してくださいました。

この頃から、父が体調を崩しはじめたため、母は看病生活が始まりまして、あまり机に向かわなくなりました。6年後、父は他界しました。

平成20年（2008）「蕎麦の花」（小林秀雄作曲）が日本歌曲コンクール夏のコンサートで歌われました。

堀内幸枝全詩集刊行

平成21年（2009）89歳を迎えた母は、900頁を越す詩集を沖積社より出版しました。山村抒情詩人、田園詩人としての堀内幸枝の業績を集大成したものです。

平成24年（2012）92歳の母は日本現代詩人会名誉会員、日本文芸家協会名誉会員となり、山梨県詩人会（会長古屋久昭）主催で、「詩人・堀内幸枝のふるさとでひらく『山梨の詩祭』」が開かれました。

国民文化祭 詩の祭典

翌25年（2013）10月26日、第28回国民文化祭が山梨で開かれ、文学部門は「堀内幸枝の詩の世界にあそぶ」というテーマでした。講演・詩朗読・歌唱・堀内幸枝の生家と詩碑めぐりなどが行われました。主催は文化庁、山梨市、笛吹市、現代詩人会、日本詩人クラブ、山梨県詩人会でした。

この日は大型台風が日本列島襲来のためとても心配しましたが、朝方明るくなりました。講演は鈴木正樹でした。私の知らなかった母の心の動きや悩みなども知って、母がより身近に感じられました。そして、母のことももっともっと知りたいという欲求がわいてきました。早くからこの祭典の準備をしてくださった企画委員長の古

屋久昭様や皆様に感謝でした。

ずーっと堀内幸枝

嫁いで千葉幸枝となりましたが、発表作品は「堀内」で通しています。詩を認められて出発したときが堀内でしたから。

14歳のときの詩が三好達治に見い出され、詩の世界に入りました。そのとき、堀内であったのと同時に、もう一つには堀内姓に愛着があるんじゃないかと、私は思っています。母の、生まれた土地も含めて、ふるさとに対する思いが深いということじゃないでしょうか。

「私、思うんです」

私、思うんです。母の心の中に強く残っていたのは市之藏村の風土と、そこで過ごしたときの社会状態だと。

この一箇所に落ちている日差しはなんと澄んだ甘さ、
白百合の花粉のなんと清潔な匂い、共にこの空間地の宝石だ。
私はここを自分の心の領土と思いたかった。

随筆『市之藏村』にあるこの一節のような、いかにも人の心を魅了する風土の中で、現実には、小作人の厳しい生活と恵まれて自分の生活との格差があり、母はそこに矛盾を感じながら成長したのです。おそらく母は自分の力ではどうにもならないという思いを最後まで持ち続けていたのではないのでしょうか。ふるさとを詩に書き綴った作品への母の一貫した姿は、私の誇りでもあります。母にふるさと市之藏への強烈な思いがあるように、ふるさとを持たない私のふるさとは、母の中にあるのかもしれませんが。

< 文責 三科恵美子 >

第一回聞き取り 平成26年7月11日 笛吹市一宮図書館にて

話し手：古屋久昭さん（詩人・山梨県詩人会会長、第28回国民文化祭「堀内幸枝の詩の世界にあそぶ」の企画委員長）

聞き手：吉原五鈴子 三科恵美子

第二回聞き取り 平成27年2月 谷口典子さん（手紙にて：三科恵美子）

第三回聞き取り 谷口典子さん（電話にて：三科恵美子）

第四回聞き取り 平成27年2月12日 県立図書館にて

話し手：笠井忠文さん（詩誌『乾季』主宰、元山梨県詩人会会長）

聞き手：三科恵美子

第五回聞き取り 平成27年5月10日 山梨県立大学

話し手：谷口典子さん

聞き手：三科美恵子・吉原五鈴子・相澤正子・古明地喜代美・立川聖子・藤本ひろみ・山中淑子
清水武子・中沢勝子・池田政子

2. 病人に寄り添う友として

植松 喜久江 うえまつ・きくえ

- 1923(大正12)年11月30日生
千葉県出身、大阪府在住
- 清里聖ルカ診療所医師



始めに

「三つ子の魂百まで」の諺どおり、幼い日の夢（それは貧しい病める人の友となりたい）をそのまま持ち続けて医師になり、やがて結婚。その相手として現れた人が、八ヶ岳山麓、清里の教会の牧師であった。そのため、私はそれまで勤務していた東京の聖路加国際病院を退いて清里へ。

その後約三十年間、その僻地で医師として、妻として、また四人の子の母親として、祈りのうちに日々を捧げました。

「私の歩んだ道はこれこれで、こんなことを沢山して参りましたよ」と語り告げるのではなく、「主が私に何をしてくださったか、又、私に何をさせて下さったか」と言うことで、九二歳になった今も、主への感謝と賛美は尽きません。

生い立ちと両親のこと

あの関東大震災（一九二三年九月）の直ぐ後の十一月三十日、私は千葉県銚子で生まれ、その年のクリスマスに幼児洗礼を受けました。私の父はその当時、銚子聖公会の牧師でした。

父は明治十七年、新潟県中蒲原郡にあるお寺の息子として生まれ、青年時代、ある友人に導かれて初めて教会へ。そして洗礼を受け、その後、神学校で学んだそうです。

母は明治二〇年生まれ。母の父は明治四年に廃藩置県¹⁾で仙台から北海道へ。伊達藩総ぐるみで移住し、伊達紋別という地でクリスチャンになったそうです。母は九歳で洗礼を受け、英国の宣教師のご好意で、函館のミッションスクール、更に女子神学校で学ばせていただき、伝道師として北海道の各地で宣教したとのこと。その函館の伝道館で母がオルガンのご奉仕をしていました時に、石川啄木の奥さんともお付き合いするようになり、妹の光子さん、後の三浦光子さんは母からオルガンを習ったということです。

「幼き日に、あなたの造り主を覚えなさい」との聖書の言葉通り、私は父母の信仰生活の中で育てられました。毎朝食前に家族は揃ってテーブルを囲み、聖歌（讃美歌）を歌い、聖書を読み、祈りました。そして又、夕の祈りも同様に行い一日を感謝し、父の祝福の祈りのあと床に就きます。これが私が育った頃の生活の基本であり、食事をするのと同じように、家庭の朝夕の祈りは私達子どもにとって当たり前のことでした。

医師を志したきっかけ

私は三～四歳のころから医者になりたいとよく言っていた、と母は後に申しておりました。そのきっかけは、父が信徒の家庭を訪問し、夕方戻ってきますと、袂の（あの時代はまだ着物

でしたから)中に手を突っ込み、いただいてきたお菓子を取り出して子ども一人ひとりに分けてくれました。それがどんなに小さくても少なくとも嬉しかったのです。でもそれ以上に嬉しかったのは、父の訪問先で出会ったいろいろの人たちの話を聴くことでした。その中でいつも一番、心に残ったのは家庭が貧しいため病気になっても医者にもかかれず困り苦しんでいる人々のこと。

夕食が済んでいつもの「夕の祈り」の中では、私たち子どもたちも必ず祈りをさせられました。その中で一番多かったのは病人のための祈りです。私は大きくなったらいい医者になり、お金もとらないで・・・と只々願ったのでした。

もう一つのきっかけは、熊本に回春病院²⁾を創設された英国宣教師、ハンナ・リデルさん³⁾のことです。リデル女史は宣教のため一八八九年に初来日。ところが、彼女がその翌日、桜花爛漫の熊本本妙寺の境内にて目にしたのは、病めるハンセン病の方々でした。「ああ、これは神様がこの人々のために私を日本の地へ遣わしてくださったのだ」彼女はそう信じて一生をハンセン病患者の為に捧げ尽くしたのです。そして没後は、患者さんの納骨堂と一緒に居られると父から聞かされ、私は胸が痛くなるほど感激しました。

もう一人の英国宣教師のコンウオール・リー女史⁴⁾は来日して八年間宣教した後、日本がまだ着手していなかった療養所を草津に開設し、その一生を捧げられたのです。

これらのことから私は、将来医者になりハンセン病のために働かせてもらいたい、と請い願っておりました。

医学校に進学

私は医者になるその願いを叶える為に、東京府立第七高女⁵⁾の五年生になった時、迷わず医学への道を選びました。しかし、牧師の家庭は貧しく、学費の捻出は困難でした。母は私の希望を聞いて「お前の願いが主のなさる業なら、必要なものは与えられますよ」と言い、医学校⁶⁾を受験させてくれました。

「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる」(マタイによる福音書六の三十三)

しかし、試験には受かりましたが実は学費のあてもなかったのです。その時、思いがけず千葉県野田醤油会社から育英奨学金をいただけることになり入学できたのです。その年の十二月に、太平洋戦争が勃発し、戦時中で十分な勉学もできぬまま終戦を迎え卒業となり、昭和二十一年に医師免許をいただきました。



初めての清里行き

父ははじめ銚子の教会の牧師でしたが、その後市川聖マリア教会に移り無料健康相談所を開いたのです。私は昼間は聖路加国際病院で働き、夜は市川の教会でその奉仕をしておりました。そんな時、日本聖公会⁷⁾婦人会長の須貝千代さんから、農村僻地の子どもたちの為に農繁期の託児所を開きたいので、お手伝いしてくださいと頼まれたんです。

その当時の清里は、戦後の引き揚げ者などが未開の荒野を開墾し苦勞しておられました。そのような開拓地に、東京の「ナザレ修女会」のシスター(修道女)二人と私でお手伝いに行くことになったのです。

シスターたちと初めて清里の地を踏んだのは昭和二十三年の六月初めのこと。小海線は一日に汽車が四回ぐらしか通らず、ポッポッポッとゆっくり走っていました。その線路の脇には沢山の高原の花々が咲き乱れておりました。そしてカッコウが鳴き、つつじが満開。

清里駅に降り立つとカーキ色の服にラウンドカラーの若い牧師が出迎えてくれました。踏み切を超え、八ヶ岳の方へでこぼこ道を登っていきますと、すぐ左側で礼拝堂の突貫工事をしており十日後に完成し献堂式を迎えることになっていました。

出迎えてくれたラウンドカラーの牧師、後に夫となった植松が、でこぼこの泥んこ道を更に登り詰め、突き当りの清泉寮へ案内してくれました。私はシスター達とそのキャビンに泊まりました。

村の中の農民道場と呼ばれる所に、開拓者の子どもたちの託児所があり、私たちはそこでそれから二週間オルガンを弾いたり、歌ったり、子どもたちとお遊戯をしたりして楽しく過ごしました。親たちは石ころだらけの未開地を耕すのに苦しんでおりましたので、子どもたちを預けることができるのを喜んでいました。

その子らの着ているものは貧しく、食べるものはとうもろこしや雑穀でした。この辺りは無医村だった。私はある日呼ばれて往診に行きますとお腹がパンパンに張った子が、お星さんが見えるような粗末な家で、お布団もなく藁の中で寝ていました。丁度持参していた利尿剤が効いてくれて、見違えるほど良い方に向かいました。また脳卒中で倒れた人の所へ夜中に雨の中を走って行ったり、僅かの間にもいろいろなことがありました。たとえ病人が悪くなくても何の手当もしない、車もお金もないので病院にも行けず、往診も頼めない病める人のいることに驚きました。

この期間中に行われた清里聖アンデレ教会の献堂式にシスター達と共に礼拝に参加。清里での二週間が、あっという間に終わりました。

結婚と子育てと診療

夫、植松が牧師に任命され一年半後、聖アンデレ教会で結婚式を挙げました。昭和二十五年一月のことです。その年の暮れに長女が生まれ、そして次々と六年間で四人の子を授かりました（めぐみ・誠・のぞみ・功）。医者が高にいませんでしたので、殆ど自分一人でお産をしました。夫は農村を駆け巡り伝道しておりましたが、我が家にはお仕事のない方や、一緒に祈りの生活をしたいという方が来られていましたので、その方々が子ども達を見てくださいました。大きなお腹を抱えながらも、いつも往診には長靴を履いて歩き廻りました。道が悪く、すぐ泥沼にはまり込んでしまうからです。

真冬の凍りついたでこぼこ道は足に当たりとても痛く、靴底に藁を厚く敷いて暖かくしました。

雨の降りしきるある夜、数キロ離れた藁小屋に脳卒中で倒れた老人を診ての帰り道、頼みの懐中電灯がスーッと消えてしまったんです。まさに真っ暗闇。右の下方で断崖の深い谷底のゴーゴと流れる川音を聞きつつ、左側の土手に沿って傘の先をこするように、ひたすら右の路肩から転げ落ちぬようにそろそろと歩いて戻ったりもしました。

確かに多忙の日々でしたが、でも、どんなに忙しくても子ども達の夜眠る前には私の大好きなモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェンの曲のレコードをかけてあげたり、また時には「パレアナ」「幸福な王子」そして「フランダースの犬」などの本を読んでやりました。私が途中で

感極まり声が詰まってしまうんですが、子ども達にも、ママが半分泣いているのが分かるようでした。



ポール・ラッシュ先生のこと

関東大震災で崩壊した東京を再建するためポール先生は一九二五年、米国から横浜のYMCA（キリスト教青年会）のスタッフとして初来日なされ、東京聖路加国際病院の建設募金にも尽力してくださいました。

一九三八年（昭和十三年）、青少年訓練キャンプ場として八ヶ岳山麓の清里に清泉寮を設立、又、立教大学でも教鞭をとっておられましたが、日米開戦により強制送還されたのです。戦後、GHQの将校として再来日。まもなく軍を退かれて一九四七年（昭和二十二年）、清里農村センター⁸⁾建設のためにすべてを投げ打って尽くされたのです。

即ち、先ず清里聖アンデレ教会・清里実験農場・清里聖ルカ診療所・清里聖ヨハネ図書館・清里聖ヨハネ保育園、更に麓の各村々にまで弘道所（青年や婦人などの地域のための集会所）を次々に建設。一九七九年（昭和五十四年）八十二歳で召されるまで高原農村の復興と民主化に貢献されました。

最も村民から慕われた聖ルカ診療所は、一九五〇年十月に「神の栄光と農村医療に奉仕するため」として奉獻されました。私はこの診療所の開所式に、出産直前の大きなお腹をして参列いたしました。

（現在、ポール・ラッシュ記念館が清泉寮の後ろにあり、博士が生前暮らしておられた時の様子を知ることができ、また、たくさんの資料も見ることができます。）

米国からのジープ

聖ルカ診療所が開設されて約三年を経たころ、一台のジープが米国の一夫人より寄贈されました。このジープは太平洋戦争で戦死された一人息子さんの愛用されていたものとのことでした。それ以来私は、自分で運転して泥んこ道をどんどん走ってくれるこのジープで、更に山奥の村々へ往診することができるようになりました。

今なお鮮やかに心に残る冬の往診二つ

一つは、一軒の開拓農家のこと

深々と冷え込んだ冬の夜遅く駆けつけた時、赤ん坊は息苦しく喘いでいました。「八ヶ岳おろし」が家の隙間から吹き込んでいましたので、その子を私の胸に近づけて覆いながら、聴診器を当てました。お兄ちゃん、お姉ちゃんたちはみな一つの炬燵に足を突っ込んで、みな安らかに眠っていました。

翌日往診に行ったのは夕食時でした。テーブル代わりに炬燵の上にはどんぶりにいっぱい盛られた漬物、そしてもう一つの皿には一尾のサンマ。それを子らがニコニコ分け合いながら食べている。互いに分ち合い、いたわり合う顔、顔、顔。温かな美しい家庭がここにもありました。肺炎の赤ちゃんの息は随分穏やかになっていました。

もう一つは

清里から隣の野辺山への道には国鉄最高標高地点があります。昼間の外来診療がひと段落した後の往診は殊のほか楽しいもので、雪の吹き溜まりで車が動けなくなってしまうこともあり、そこまで迎えに来てもらうことができました。迎えてくれるのは牛轡。ノロノロの牛の歩みは体中が凍りつきそう。でも嬉しくて嬉しくて。それは夕日に染まる山々（八ヶ岳）を眺めつつ悠久なるものに思いを馳せ、内なる心の奥を静かに見つめる、そんなときでもありましたから。

終わりに

約三〇年を清里で診療。その間、医師、看護師をはじめ、事務、検査技師、薬剤師、栄養士、営繕、その他たくさんの方の同志の支えによって、清里聖ルカ診療所は医療を続けることができました。私はその後は牧師である夫の移動で名古屋へ移り、十年を経て夫の定年を迎え、あてどなく探した地、それは大阪の山に見える、夕日の映える村。ここのアパートに住んでもう三十年が経とうとしています。夫九十九歳、私九十二歳。

「我、山に向かいて目を上げん

我が助けはどこから来るか、

我が助けは天地を造られた主から来る」

ポール・ラッシュ先生の好きな詩編（聖書）が私の心にも響きます。

医師として今も最新の医療知識を追いかけ、学び、遠近を問わず、病める人の友とさせてもらっています。

< 文責 相澤正子 >

聞き取り 平成二十六年十一月九日 相澤宅にて

聞き手：山中淑子、相澤正子

【注】

- 1) 近代日本の幕開けとなった明治維新により江戸幕府は崩壊し、すべての藩を廃止した。諸大名が領有していた土地と領民を天皇に返上（版藩奉還）し全国を直接支配するため県令（知事）も政府が任命する中央集権体制への改革が廃藩置県である。

2) 熊本市中央区黒髪五丁目二十三の一に明治二十八年十一月十二日にハンナ・リデル女史により設立されたライ療養施設である。昭和七年、リデル女史亡き後、姪のニタ・ライトに引き継がれたが昭和二十五年、ニタ・ライト女史召天後閉鎖され、その後施設は熊本市に寄贈され、療養者は九州療養所に移送された。病棟は養老院として、研究所は記念館として残されている。なお、リデル女史は、一九〇六年日本国より叙勲を受けている。

3) 日本救ライの先駆者ミス・ハンナ・リデルは、イギリス貴族の出身である。明治二十二年、英国聖公会派遣最初の宣教師として日本に渡って来た。九州熊本地方の伝道を命ぜられ、第五高等学校（今の熊本大学）の英語教師を兼ねてキリスト教の宣教に従うことになった。翌二十三年、春四月三日、五高の教授や生徒たちはこの蓬萊の婦人教師をねぎらうため、熊本市郊外にある本妙寺の桜見物に案内した。長い参道の両側のみごとな桜並木は満開であった。だが、その時彼女が見たのは美しい桜ではなく、その花の下に物乞いをしてうごめく人の群であった。眼がなく、鼻は落ち、手足の指のない、この世の者とも思えぬ、悲惨な男女の姿であった。凝然と立ち止まった彼女に、このとき細いイエス・キリストの声がささやいた。

「彼らを救いなさい！」

人の運命は、神によって定められる。その声を聴く者は「聞く耳ある者」である。そして、それは信仰による。彼女は母国英国の友人に募金をうったえ、その後五年、ついに回春病院を建て患者を収容した。これが、わが国におけるプロテスタント救ライ運動の発祥である。病院の経営は困難をきわめたが彼女の努力は昭和七年二月三日、熊本の地で召されるまで絶えることがなかった。彼女の死後、姪のミス・ニタ・ライトが継いだ。昭和二十五年召天した。両女史の遺志により、遺骨はいまも日本のライ者と共に在る。

*上記は、植松喜久江さんより提供された、山崎宗太郎（大阪クリスチャン・センター前総主事、JLM 大阪支部長）によるハンナ・リデルを紹介する一文を引用したものである。

4) 英国伯爵家の長女。宣教師の道を歩み一九〇七年来日、東京を中心に八年間伝道活動に従事し、一九一五年草津を視察、以降、多くの施設を立ち上げ、ハンセン病患者のために患者の生活、教育、医療に力を注いだ。

5) 東京都立小松川高校の前身。

6) 帝国女子医学専門学校。

7) 一六世紀にローマカトリック教会から独立し、英国国教会として育つ。カトリックとプロテスタント教会との「橋渡し教会」とも呼ばれている。日本には一八五〇年に伝えられ、一八八七年に日本聖公会が生まれた。現在、全国に約 300 の教会があり、立教学院、聖路加国際病院など 200 余りの関連施設を持つ。

8) 清里農村センター（キープ協会）は、高冷不毛の清里高原にポール・ラッシュによって創設された。「無償無私 of 精神、食糧と希望のための生活革命」である。戦後、独立国として第一歩を踏み出した新生日本にとって食糧及び保健の問題は喫緊の課題であり、その解決のためには、まず健康な精神を持つ青年の育成こそ重要であると考えた。日本の総人口の 6 割を占める農山村の人々が真の民主主義を体得し、放置されている未活用の高冷不毛地を活かすことができれば、それこそ食糧問題解決と発展への鍵と考えたのである。そのためまず、アメリカで募金を募り寒冷不毛の地清里の三百五十町歩を手に入れた。

そして会員訓練キャンプ場として、まず清泉寮を建設し、この地にキリスト教精神に基づく民主的共同生活の清里実験教育計画（Kiyosato Educational Experiment Project/KEEP）を企画し、食糧、保健、信仰、青年の諸問題解決の具体化を図ったのである。

3. 山梨県女性初の

専門職司書として生きる

浅川 玲子 あさかわ・れいこ

- 1929（昭和4）年6月4日生
東京都出身、甲府市在住
- 図書館司書、図書館館長



子どもの頃、東京での生活「両親共働き」

会社員の父と専業主婦の母の長女として、東京都豊島区雑司が谷で誕生しました。妹が昭和8年生まれで、その翌年弟が生まれました。その後小石川区(現文京区)諏訪町に転居しました。ちょうど後樂園が近くにあったと思います。

飯田橋駅近くにあったキリスト教系の同仁幼稚園へ2年通いました。今のように迎えに来るバスがあるわけではなく、毎朝会社へ行く父と途中まで一緒に行きました。駅のホームから父が手を振るのが見えました。

当時私の祖父は、本郷区(現文京区)森川町で郵便局をしていました。その以前は塩山に住んでいたのですが、祖父が連帯保証人になって財産をなくしてしまい、家族みんなで東京へ出てきたそうです。ただ、土地と大きい家だけは残ったので、お留守居さん(管理人)にはずっと居てもらったそうです。父母が結婚したのは、父がもう東京に住んでいる時でした。母も山梨県生まれで、母の家は北巨摩郡須玉町(現北杜市)で造り酒屋や質屋、呉服屋をしていました。

そうしているうちに、祖父たちと一緒に住んだ方がいいんじゃないかということになり、昭和11年(1936)に、私たち一家は森川町に引っ越してきたのです。そこで、母は郵便局をしている祖父を手伝うことになって、局長代理として仕事をすることになりました。家は一階が郵便局で、二階が住まいでした。庭もなく二部屋ぐらいで生活をしていました。父の兄弟はまだ学生だったり他の所へ勤めていたので、お他人さんが勤めに来てくれて郵便局をしていたのです。私たち子どもは近くにある東京大学の構内でよく遊びました。三四郎池で魚を捕ったり、昆虫採集もしましたね。

小学校は本郷区誠之小学校といって、よその区からも越境して入ってくるような、昔でいえば東京府立の旧制中学・女学校への入学率の良い学校でしたね。国語が好きだったです。そのころ母は仕事をしていたので、家事をしてくれる女中さんは居ましたが、両親は共働きですよね。それで、女学校へ入るための試験があったので、学校の帰りに、退職をした先生が教えている今でいうと塾のようなところに行ったのです。私はあまり行くのが好きではなかったんですけどね。

塩山へ疎開「村の人たちに迎えられる」

そして、本郷区の桜蔭高等女学校へ昭和17年(1942)に入学しました。図書室はあったと思いますが、利用したことはあまりなかったように思います。私はどちらかと言うと運動系なんです。バレーボールとかバスケットボールが得意でした。

太平洋戦争がだんだん激しくなってきた「疎開」という言葉をよく聞くようになりまし。ちょうど大きい郵便局が東京大学の前に新しく建つので、小さい郵便局はどこかへ移るか、やめてしまうかという時だったので、思い切って塩山へ疎開しようということになったのです。もともと塩山に家屋敷があったので、戻ってきたといったほうがいいかもしれないですね。焼け出されていないので家財道具や衣類など全部持って引っ越してきました。一昔前、苦しい生活の中で東京へ転居していったのですが、帰ってきた私たちが村の人たちは「よく帰ってきたね」と大事にしてくれました。いろいろ教えてくれたり、野菜や食料を持ってきてくれたりしましたね。住み心地がよかったので、そのまま塩山に住むことになりました。昭和 19 年(1944)のことです。そして私は山梨県立山梨高等女学校へ転校しました。

戦中、女学生時代「学徒動員の生活」

東京の桜蔭高女に 2 年生まで学び、山梨高女の方に 2 年在学して卒業になってしまうのですよね。

当時は戦時中ですから、学校へ行っても勉強をするというより、地域のお百姓さんの所へ手伝いに行ったり、また、山梨市の駅から歩いて 30 分ほどの所に根津さん¹⁾の広い土地があって、その畑の農作業を手伝いに行ったりもしました。今の根津記念館が根津さんの家で、そこにどなたか名前は分からないんですが、宮家の方が疎開していらしたんですよ。お付きの方もいらしてね。そちらの畑へも何人かがお手伝いに行くのです。「ほら、あの方が宮家の方よ」なんて言いながら、農作業のお手伝いをしたのを覚えています。それから、桑畑を掘り起したりもしましたよ。

始めは農家へのお手伝いだけでしたが、そのうちに、駅の近くに中央工業っていう東京から来た会社ですけど、そこで兵隊さんの軍服を縫う仕事をしたり、焼夷弾を作る仕事もしました。「学徒動員」ですね。私、こんなに勉強をしないで卒業したらどうなるのだろうって思いました。毎日、毎日農作業に行くか、工場に行くかっていうことだから。でも、終戦の 8 月 15 日から卒業までの半年間、ささやかな女学生らしい生活を送りました。みんなで「野ばら」「春」「荒城の月」とか昔の女学生が歌うものをよく歌いましたよ。音楽の先生は堀内かくさんっていう女の先生でした。みんなの気持ちを本当に楽しく高めてくれて。先生のご指導が良かったと思うんですけど、東京音楽大学(今の東京芸術大学)に何人か入学しました。

終戦を迎えて「すし詰め状態の教室」

終戦の日は、家で迎えました。その前に昭和 20 年 7 月 6 日甲府空襲があり、塩山町の家から甲府が燃えているのが分かりましたね。いろんな方から「大変だった」という話を聞くと申し訳ないと思うのですが、きれいに燃えていて花火を見るような感じで見ていました。私には悲惨だったとか、火の中をくぐって逃げたとかそういうことは一度もありませんでした。その後終戦になったのです。玉音放送をラジオで聞きましたが、天皇陛下が何を仰ったのかは、私にはすぐには分かりませんでした。少し経ってから、周りの人からの話で、戦争に敗けて終戦になったことを知りました。戦争に行った人も帰ってくるのだと思いました。

「必ず勝つ」という徹底した戦争教育はすごかったですね。なんでみんなが反対っていう声を出さなかったのか、と今は思いますけど、当時は少しも疑わなかったですね。私の家ではたまたま体が弱い人が多かったのか誰も出征しなかったのか、戦死の通知が来たという辛い思いをしなかったけれど、終戦になってみて、すごい駄目な戦争をした

のだと思いましたよ。

終戦を迎えた父は、暮らしを立てるためにアメリカへ輸出する偽餌針を作る工場の経営を始めました。ほんのお魚かなって思うようないろいろな種類の物を作っていました。そうして、一応は普通の生活がだんだん戻ってきたのです。

学校では、疎開者が増えてクラスもすし詰め状態になりました。一クラス 70 人以上いましたね。教科書に墨を塗ったりして勉強がはじまりました。軍事色の強い内容を墨で塗ったのです。そして卒業するまで、私はスポーツで頑張りましたね。バスケットやバレーのような団体競技が好きでした。卒業式に優秀賞を貰いました。

進学「もっと学びたい」

私たちの学生時代っていうのは、戦争のため、一番時代の悪い時ですよ。女学校に行っても半分ぐらいしか勉強はしなかったわけですから。これで社会に出て行っていいのかなっていう気持ちがありましたね。

戦争が終わると上の学校へ行く人は勉強をし始めたんです。でも私は運動ばかりしていて、「もっとちゃんとしなければ受からないぞ」って、先生に言われたことを覚えています。母が東京家政学院を卒業していたので、私もこの学校へ進学しました。昭和 21 年(1946)のことで、何もない時代によく東京まで行かせてくれたと思います。進学する人は半分もいなかったと思います。山梨高女の隣にあった山梨女子師範に行った友達は多かったですね。とにかく勉強をもう少ししたいという気持ちは強かったですね。

図書室勤務「司書人生の始まり」

昭和 23 年(1948)に東京家政学院を卒業した私は、家に帰ってきて父の仕事を手伝っていました。でも、どこかほかのところへ勤めたいという思いは持っていました。

この頃地域の子ども達に、今でいえばお芝居と一緒にしようなんて呼びかけてみました。家が広がったので、子ども達を集めて練習したりして、『安寿と厨子王』とか、『修善寺物語』を地域の人に観てもらいました。子どもと関わっているうちに、子どもってかわいいなあって思いましたね。

昭和 26 年(1951)に偶然、山梨日日新聞社に勤めている方が紹介してくださり、山梨大学学芸学部附属小学校図書室へ勤務することになったのです。アメリカに敗けて、アメリカさんが来てから日本の図書館法²⁾と学校図書館法³⁾を作ったのです。この法律が施行され、日本の公立図書館や学校図書館は大きく転換しました。各学校の図書室には司書を置くこと、公共図書館にも職員は司書の資格を持った人を置くということです。

山梨県立図書館は当時すでにありましたが、普通の事務屋さんと同じような方が勤めていたと思います。文部省で 5 年間ぐらい、夏に 2 か月東京大学で司書の資格を取る養成講座をやったのです。それで今まで図書館に勤めていた人、専門学校、大学を卒業した人たちが全国から受けに来て資格を取ったのです。

私は附属小学校へ勤めながら、何も資格がないのに仕事をしていていいのかなって思いましたね。自分からいろんなことを調べたのです。教育委員会や県立図書館へ行って聞いたりもしました。資格が無いと、子どもに対応する時に責任を持ってやれないと思い、自費で司書講習の研修に行きました。ちょうど夏休みだし、ちょっとお休みは多くもらったと思いますが、昭和 28 年(1953)に司書の資格を取得しました。

ほかの小学校ではまだでしたけれど、附属小学校だったので、当時モデル的に図書室に司書を置くということだったと思います。研修を受けてからは、本の選び方や図書室の運営の方法等変わりましたね。附属小学校の図書室に勤めたということが、私の人生、

図書館と子どもの本に関わる仕事の始まりだったと思います。

結婚「出産のため退職」

昭和 30 年(1955)会社員浅川勲と結婚して甲府市伊勢町に住みました。それで、昭和 31 年(1956)に山梨大学附属小学校を退職し、その年長女が誕生しました。その時には共働きとか子育てをしながら勤めるなんて、全然思いませんでしたね。35 年には長男が誕生しました。

昭和 36 年(1961)に夫の両親が息子達と一緒に暮らしたいということで、高根町(現山梨県北杜市)から甲府へ出てきました。山や畑もあったのですが、お墓だけ残して甲府の私たちの所へ来てくれました。そんなこともあって甲府市武田に中古の家を買って転居しました。

山梨県立図書館に勤める「専門職の司書として」

夫の両親と同居が始まりました。狭い家で、すごい働き者の義母で何でもできるわけですよ。私が勤めに出ることがよいと思いました。それで司書という資格が活かされる場所は図書館しかないって思い、自分から県立図書館に聞きに行ったのです。そしたら、臨時職員ならいいよってということで勤めが始まりました。昭和 37 年(1962)のことです。当時女性で専門職の司書として県立図書館に入ったのは臨時としても、私が最初でしたね。

昭和 39 年(1964)に本採用されました。県側でも司書を多くしたいということで、簡単な面接採用試験がありましたけど、司書の資格を持っていましたからね。そして、私が附属小の図書館に勤めたことを知っている職員の方に偶然会えたことで、子ども室担当になったのです。

勤め先で転勤はなかったです。武田の家からなので近いほうでしたね。甲府駅の所を通って昔の春日小学校の所にある図書館でしたから。夜の遅番は交代制だったですね。そんな日夕飯は私が一品作っておき、義母にもう一品作ってもらってというふうにしていました。朝ごはんの支度は私がしました。買い物も勤めの帰りに毎日しましたね。

その頃家庭では、義母がよく子どもたちの面倒をみてくれていました。授業参観など私が行かない時はちゃんと行ってくれるし、宿題もよくみてくれましたね。漢字の練習なんていうのは、マスを書いてカタカナを書いて裏側に漢字が書いてある練習帳を作ってくれたりしましたよ。私に対しても、夕食の支度で一品ホウレンソウを茹でておけば、帰ってきてから楽だろうと心遣いがある人でしたね。お嫁さんって言わないで名前と呼んでくれていました。それに整理がとても上手でしたね。当時のことだからミカン箱とか段ボールを利用して押し入れや棚を整理してうまく使っていました。ほんとに教えられることばかりでしたよ。明治 32 年生まれでした。女学校へ行って英語の勉強もしたのよっていうぐらいだから。とても立派な両親でしたね。年寄りと一緒に生活していたことは、子ども達にとってもとても良いことだったと思います。



勤務中の浅川さん
(丸の内移転後の「こども室」で)

山梨県立図書館、丸の内に新築移転「自分の特色を持ちたい」

昭和 45 年(1970)に甲府市丸の内二丁目に新築移転しました。図書館って、赤ちゃんから大人まで大勢の人に接してサービスをするわけですが、私は勤めをしていて、何か自分が専門分野というか特色を持たないといけないと思いました。子ども室担当だったので、自然科学や社会科学というよりは、児童文学イコール子どもの本っていうところに力を入れたいと思いました。女であり、母親であったからかもしれません。

その頃は、子ども室にはほんとに困るほど子どもが来ましたよ。電車やバスに乗って石和や塩山や双葉から特に土日には親子連れで来てくれましたね。担当がひとりじゃ大変だったので英和⁴⁾の学生のアルバイトを二人頼んでずっと土日をしのぎました。10年位続きましたね。

やまばと文庫を開設「図書館に来られない子ども達のために」

図書館に来る親子や子どもはいいけれど、来られない地域の子も達はどうしているのだろうかと思っていました。それで、昭和 46 年(1971)甲府市西田町に転居した年に、日曜日に自宅を解放してやまばと文庫を開設しました。当時は土曜日がまだ休みではなかったので日曜日だけでした。玄関がちょっと広めだったので、カラーボックスを順々に積み上げて本を並べました。家の子どもも中学生でしたが貸し出しなど手伝ってくれましたね。家族の協力がありました。

私が県立図書館を退職した年には、庭の東側に別棟を建ててやまばと文庫は独立しました。それが今でもあるのですけれどね。いままで家にあった本だけでなく、図書館やそれぞれの家庭で不必要になった本を集めたりしました。甲府市立図書館からは「やまばと文庫」に3か月に一回200冊ほどの本の入れ替えがあります。

何年前だったでしょうかねえ、2年生の子どもが学校の国語で「スイミー」を勉強した時、同じ作者の本を読みたいと下校時寄ってくれたことがあります。嬉しかったですね。当時利用した子どもがお父さん、お母さんになって自分の子どもを連れてくるということもありましたね。今は利用者が少なくなっていますが、その当時親子で利用していたお母さん達と今の若いお母さん達が当番制で、2か月に一回来て貸し出しや読み聞



かせの仕事をやってくれています。

山梨子どもの本研究会を立ち上げる「横森サチ子との出会い」

「やまばと文庫」の開設からしばらくして、山中東小学校(山梨県南都留郡山中湖村平野)の教師であった横森サチ子というすばらしい先生に出会いました。先生から国語の教科書で「にわとりとひよこ」の内容が、自分ではこの文章では納得いかない、その原本に当たって確かめたいので調べて欲しいという問い合わせがあったのです。私は長い間勤めていて、小学校の先生からそういう問い合わせがあったのは初めてでした。私も頑張ってみますということになりました。そして、先生が実家の竜王町へ帰ってくる土曜か日曜日に会う約束をしました。

そして、県立図書館の子ども室で初めて会ったのです。その時、話をしているうちに、新聞に出ていた地域のお母さん達と絵本の勉強会をしている先生だったということを知ったのです。地域で子どもの本に関心のある方がたと繋がりたいという思いもあり、また考え方も一致して二人で「山梨子どもの本研究会」を立ち上げたのです。昭和 47 年(1972)のことです。先生は甲府市立貢川小学校にもいましたが、その後、私立東京明星学園小学校へ転職されました。

この会は読書活動を文化活動の原点と捉え、家庭や地域、学校などの場で、選び抜いた本を子どもに手渡す努力をしている会です。「読書の楽しさを届けます」ということです。会員は教師や保母さん、学校司書が殆どです。今でも活動していて、平成 13 年(2001)40 年記念の集いをしました。

甲府文庫連絡会と一坪図書館事業「自発的にやりたい気持ちが大事」

甲府文庫連絡会は昭和 50 年(1975)に発足しました。私が運営しているやまばと文庫、こういうものが甲府市内に一時は 24 か所もあったのです。今は 6 か所しかありませんけどね。やまばと、やまねこ、くまの子、共有、高源寺、中町文庫です。会の発足当時から月に一回市立図書館に集まって、運営の方法とか情報交換をしたいっていうことで始めました。細々とですがまだ繋がって活動しております。

平成 8 年(1996)に甲府市立図書館が今の場所に移転し新しく開館しました。会としてボランティアをしようということで、折り紙が上手な人がいるので、子どもたちに教えようとそこで折り紙教室を開いています。人気がありますよ。「なんで文庫連絡会が折り紙なの」っていう人もいましたが、なでしこの会やききみみずきんお話の会のグループが読み聞かせをやっているのです。違うことをしてもいいよねって始めたのです。

昭和 28 年(1953)から県立図書館の事業として、みどり号という移動図書館が県内を回りはじめました。停まっている車の所に、大人や子どもが本を借りに来るのです。同じ場所に 30 分、月に一回だったため、だんだん利用者が少なくなってきました。それで今度は、昭和 51 年(1976)から一坪図書館活動が始まりました。名前がユニークだったので全国的に有名になりました。本は県立図書館の方で用意し、運営する人を市町



甲府北部文庫まつりで
(パネルの前が浅川さん)

村教育委員会で推薦するかたちをとることにしました。「校長さん、退職したからどうですか」とか「お宅お寺だからどうですか」ってね。家の廊下や玄関、お寺なら本堂とか、地域の人がやるのなら公民館でもいいといろんなところで始まりました。結局、県内に624館つくられました。

これをやっていくうちに、県の方でも予算的なこともあり、新しい本を継続して買うことができなくなりました。そこで昭和60年(1985)には各市町村に移管して指導も任せました。そうするうち運営していた人たちの中で歳を取ったり、責任者がいなくなったりで、もう私の所ではできないと言う人がだんだん出てきました。それに図書館が各町村にできるようになったでしょう。やっぱり自発的に自分がやろう、したいっていう気持ちがあれば、本だけ用意してあげますよって言われても、それは長続きしないわけですよ。今は一坪図書館っていう名で残っている所はほとんどないと思います。文庫イコール一坪図書館ですが、甲府はたまたまこの言葉を使わなかったですね。甲府では前にお話ししたように、やまぼと、くまのこ……と6か所が残り、自分の文庫で週1回の貸し出しをしながら甲府文庫連絡会の活動をしているのです。

平成21年(2009)のことです。毎日新聞社の人から県立図書館へ「一坪図書館ってどういうのですか」って問い合わせがあったそうです。当時のことを知っている浅川さんに聞けば分かるということで、私のところへ取材に来ました。沢田さんっていう方で、北杜市に行った時「一坪図書館」っていう看板があったのですって。ユニークな言葉だなあって思ったようです。この方お父さんかお母さんがアメリカ人で、「英語はしゃべれないけれど日本語できます」なんて言ってね。この「一坪図書館」という言葉にとても魅力を感じたそうで、新聞に記事を書いてくれました。

山梨県立図書館を定年退職「出会いの中に、学ぶことがあった」

平成2年(1990)に退職しました。県職員だから当然昇任っていうことがありますよね。でも、私はそんなこと全然考えてこなかったです。たしか女性は昇任の年数が男の人より遅れていましたね。他の人から「浅川さん、偉くなるのが少し遅いね」って言われたことがありましたが、自分の待遇とかそういうことには無頓着でしたね。女だから駄目なんだっていう認識はありましたよ。司書の仲間と集まってそのことを話し合ったことはなかったですね。時代ですね。最終の役職は副主幹で退職しました。

山梨県では県立図書館は教育委員会の管轄で、館長さんや副館長さんは事務屋さんが来ちゃって、司書になったということは、私が勤めている間なかったですね。館長さんは高等学校の校長先生と同じレベルということです。私は図書館にはやはり司書の資格のある人が欲しいと思いますね。例えば高校の教頭先生が館長に赴任して、何年かしてから校長先生として教育現場へ戻るということがあるのです。もうひとつのポストとして、県の係長級もきています。司書の資格がある人が、下から上がって館長になって欲しいですね。現在も司書の専門職として継続して働いてきた人でも司書幹止まりです。

県立図書館ですからいろいろな方が利用して、またさまざまな質問がありました。学生さんや新聞記者さん達。卒論とか研究するのに今と違ってコンピューターがない時代ですから、本に頼るわけですよ。その時にお手伝いとして、とことん調べて資料を提供するのです。山梨県になればよその県の図書館や国立国会図書館から借りたりしましたね。裏方の仕事だなあって思いましたが、利用者の方が喜んでくださることが、仕事をしていく上での励みであり生きがいでしたね。時には、こういう卒論ができましたって見せにきてくれた学生さんもいましたね。人との出会いの中で、自分も学ぶことができるのです。

私は基本的に来館者を「利用者」ではなく「お客さま」って呼びたいのよって言いながら、仕事をしてきました。大切なお客様をお迎えする気持ちでずっと接してきましたよ。

子どもの読書、子どもの本を県内全般に広げることが少しずつできてきたことは、やはり県立図書館に30年近く勤めていたということがとても役立っていたと思います。

退職の時に、新聞記者さんとボランティアの人達が、私のために「感謝の会」という集まりをしてくれました。公民館で手作りの会でした。ホテルでするのではなく、皆さんでいろいろ持ち寄って工夫して会をしてくれましたよ。それが私に合っているっていうことを、この人たちはよく分かっているのだと思いました。とても心のこもった温かな会でした。



退職時の「感謝の会」／左は夫の勲さん

町立図書館への勤め「本と人、人と人との交流」

平成2年(1990)県立図書館退職の翌日4月1日に昭和町立図書館へ再就職しました。町の人が図書館へ毎日行きたいなあって思うような図書館づくりをしていかなければならないと思いましたね。地域の図書館っていうのは、お互いに顔が見えるという温かさがありますね。職員も楽しく仕事をして、力も発揮できるのだって思いました。新聞のひとこと欄に、「自分の住んでいる町の図書館ではないが、本を貸してくれた。こんなよいサービスをしてくれて嬉しい」と投稿してくれた人がいました。私も嬉しくなり励みになりました。その方とは今でも繋がっていますよ。

平成6年(1994)竜王町立図書館新設準備室に勤務し、同8年に館長となりました。平成11年(1999)楡形町立図書館長就任、2年間勤めました。地域の図書館は人が集まってくる、本と人、そして人と人が交流するような図書館にしていきたいと思ってきました。館長の私も顔を分かってもらうようにカウンターに入り仕事をしました。夜7時まで居残りの仕事もしましたね。

平成13年(2001)に玉穂生涯学習館長に就任しました。これまで山梨県では、赤ちゃんに絵本をプレゼントするブックスタート⁵⁾をやっていなかったもので、町長さんに県内でいちばん最初にやりましょうってお願いしました。議員さん達も積極的に取り組んでくださり、予算を計上してもらって始めました。本を買う予算も貸出冊数も、玉穂町は

1万人の人口の町としては全国でも一番でした。2年間勤めました。

NPO法人山梨子ども図書館設立「すぐれた本を手渡したい」

以前退職したら横森サチ子さんと二人で、子どもの読書を進める研究所みたいなものを作ろうと話していました。でも横森さんは退職後12年間縁あって秋田県象潟町に住むことになり、平成6年(1994)に亡くなってしまったのです。そこでも子どもの本の活動をしていましたよ。

横森さんとの約束がいつも心の中にありました。最近はまだ、子どもの読書に関心を持つお母さん達が増えてきました。地域で「子どもの読書についてお話をしてください、絵本講座を開きたいので講師を紹介してください」って頼まれても、出向いて行って話せるだけの職員が十分育っていない気がしたのです。県立図書館司書の人たちは、継続して子どもの読書の勉強をしていないので、紹介することができない状況でした。そんなこともあって、子どもの本の拠点を作らなければって、強く思いましたね。

そこで、子どもの読書の関係団体に協力をお願いしました。特にNPO法人を設立するまでの事務手続きには、子どもの本の専門店「ゆめや」代表の長谷川敏夫さんには大変ご尽力いただきました。そしてようやく平成17年(2005)3月に、山梨県から認可されました。設立当初から70名の会員が集まりました。

私にとってすぐれた本というのは、子どもの心に最終的にしっかり残る本なんですけど、今でなくても、いつか子どもたちに勇気や元気を与えてくれる本だと思います。長い間読み継がれてきた本は安心して読んでいただけたと思います。可愛い絵本もたくさん出ていますが、それだけ読んでいると何か軽い感じで受け止めることになってしまうのではと思います。すぐれた本を大人が読んであげたり、手渡してあげたりして欲しいですね。そのためにも大人が勉強してほしいです。「場所はどこにあるのですか、本を借りられますか」って聞かれることがありますけど、小さな事務所はありますが、子どもの本や研究書の所蔵する所や集会するような場所もないのです。大人に子どもの本をもっと理解してもらうために、子どもに本を手渡す大人を養成しようという考えの団体です。

「子どもの本の専門家養成講座」という名称で事業としてやっています。会場は主に青少年センターを借りています。10か月20回連続講座を開きました。10年継続してきましたので、約300人の受講生が育ちました。会員は保護者や保育士さん、教員や図書館員が多いですね。主な活動内容として児童文学講座や読書についての講演会を開催したり、絵本の読み聞かせへ講師を派遣したりもしています。

また、新県立図書館ができる時、「子ども読書支援センター設置の要望書」を他団体と提出しました。そして開館時から県立図書館の子ども室には、その看板が大きく掲げられています。この「子ども読書支援センター」の仕事である読書啓発事業はNPO法人山梨子ども図書館と共同事業として行なっています。

これからの図書館司書の方たちへ期待すること

図書館司書として公共図書館や学校図書館で働いている人たちは、公共の場で働いていることをしっかり意識して、そして誇りをもって仕事をしてほしいですね。そのためには、自ら積極的に学ぶことが大切だと思います。例えば休みを使って、講演会や講座で、その道の専門家のお話を聞くことです。また子どもの本のグループに参加して学ぶこともできますよね。常に自分を司書として高める心がけが大切だと思います。

図書館の運営で大事なことは、利用されるお客様に対して笑顔でお迎えして、カウンターで声掛けをすることです。「おはようございます」「こんにちは」の挨拶は勿論です

が、読まれた本の感想を聞いてもいいですね。言葉を交わすことで、図書館の雰囲気が和やかになると思います。図書館が地域の人の交流の場としての役割があることも忘れてはならないですね。

そして、図書館の蔵書構成が目的に合っているか考えて本を選ぶことが大事です。自治体の大事な予算で購入している責任があるのです。特に子どもの本の選書は慎重にしてほしいです。図書館で出会った本が、本を読む楽しさや喜びを知るきっかけになるからですね。そしてそれがその子どもにとって、計り知れない大きな影響を与えることがあるので、選書はとても責任重大の仕事なのです。図書館で多くの人との出会いを大切に、がんばる司書を目指してください。

<受賞歴>

- | | |
|--------|---|
| 平成 9年 | 第 83 回全国図書館大会図書館功労者表彰 |
| 平成 14年 | 第 1 回子どもの読書活動実践者として文部科学大臣賞受賞 |
| 平成 17年 | 2004 年度子ども文庫功労賞受賞(伊藤忠記念財団主催) |
| 平成 27年 | ソロプチミスト平成 27 年次社会ボランティア賞
(国際ソロプチミスト日本財団) |

<文責 藤本ひろみ>

〈インタビュー記録〉

- 第一回 平成 26 年 11 月 15 日 山梨県立大学にて
聞き手 池田政子・古明地喜代美・佐々木文子・清水武子・鈴木因子
立川聖子・中澤勝子・三科恵美子・藤本ひろみ
- 第二回 平成 27 年 1 月 29 日 やまばと文庫にて
聞き手 三科恵美子・藤本ひろみ
- 第三回 平成 27 年 11 月 16 日 やまばと文庫にて
聞き手 藤本ひろみ

【注】

- 1) 山梨県山梨市生まれ(1860 年～1940 年)。家業は油商や雑穀の仲買もしており、裕福な商家であった。実業家、衆議院、貴族院議員であり東武鉄道をはじめ数々の鉄道を手掛け「鉄道王」の異名をとる。
- 2) 昭和 25 年 4 月 30 日(1950)国民の教育、文化の発展に寄与することを目的として制定された法律である。従来の図書館令及び公立図書館職員令に代って制定された。これにより司書が初めて法律上位置づけられることとなった。
- 3) 昭和 28 年 8 月 8 日(1953)制定された。最終改正は平成 26 年 6 月 27 日(2014)学校図書館が学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であることにかんがみ、その健全なる発達を図り、もって学校教育を充実することを目的とする。
- 4) 山梨英和短期大学のこと。昭和 41 年(1966)に開学し司書資格が取得できた。平成 14 年(2002)に山梨英和大学となる。明治 22 年(1889)甲府市太田町に開校された山梨英和女学校が前身。
- 5) 乳児健診の機会を利用して、赤ちゃんと保護者を対象に絵本を開く楽しい体験と共に絵本を手渡す活動である。温かいメッセージを添えたりもする。

第 4 章

個人史年表

1. 花輪相子さん（バス・電車の車掌、化粧品販売：1927 年生れ）
 2. 名取喜美枝さん（美容師、美容室経営：1929 年生れ）
-
-

聞き取り・年表制作

佐々木文子・藤本ひろみ・池田政子
古明地喜代美・山中淑子・三科恵美子・清水武子



花輪相子さんの個人史 バス・電車の車掌・化粧品販売

昭和 2 年 (1927) 8 月 16 日生まれ (88 歳)
 南巨摩郡鰐沢町出身(現・富士川町) 富士川町在住
 家族(結婚前) 父、母、姉、本人、妹 2 人、弟 (養子)
 (結婚後) 夫、本人、子ども 3 人

年	出来事	内容
昭和 2 年 (1927)	■ 8 月 16 日誕生	<p>■ 父望月房次郎、母あやこの次女。</p> <p>■ 父は塩や米などを鰐沢から甲府へトラックで運ぶ運送業を営んでいた。そのころとても景気がよく盆正月などとても派手だった。当時は富士川舟運があり、周りには船頭が多かった。</p> <p>■ 近所の普通の家 (以前は砂糖問屋経営中村屋) だが日曜学校があり、そこへ行くと歌をうたったり、おやつを頂いたりと楽しい思い出がある。クリスマス会や復活祭なども参加した。</p>
昭和 8 年 (1933)	<p>■ 4 月、鰐沢尋常小学校入学</p> <p>■ 高等科 1 年の頃</p>	<p>■ 4 年生の頃から裁縫が好きでよくいろいろの物を縫ったり、編み物などもした。</p> <p>■ 自分では洋裁学校へ行きたかったが、洋裁学校に行くことができなくなった。</p> <p>■ 親が亡くなった男の子を我が家で養子として迎え育てることになった。私とその子どもを子守しなければならないので、洋裁学校に行くことをあきらめ尋常高等科に行ったのだが、それも休みがちになりとうとうやめざるを得なかった。</p> <p>■ 初めての男の子 (昭和 12 年生まれ) なので家族中でとてもかわいがっていた。</p>
昭和 16 年 (1941)	■ 身延自動車に就職	<p>■ 既に姉がバスの車掌をしていたので、それにあこがれて就職し、バスの車掌となる。</p> <p>■ バスはボンネットのある 20 人乗りぐらいで薪を焚いていた。鰐沢だけで車掌は 4 人。</p> <p>■ 制服は開襟の上着に紺のスカート。戦争の末期になると下はモンペに、靴はわら草履に変わった。</p> <p>■ 早番の時、朝は黒沢駅 (現身延線鰐沢口駅) の一番電車に間に合うように出社する。黒沢駅と峡西電鉄 (通称ポロ電、昭和 37 年に廃止線) の青柳駅 (現・富士川町) を往復。片道約 15 分。</p> <p>■ 乗客は主に小笠原 (現・南アルプス市) のカーボンの</p>

<p>昭和 19 年 (1944)</p>	<p>■「身延自動車」は「身延開発」と社名変更その後「山梨交通」</p>	<p>会社に勤める人、荊沢（現・南アルプス市）のマンガンを掘っていた人、農校（現峡南高校）の学生が多かった。同じ歳ぐらいの人が乗ってくるととても恥ずかしかった。</p> <p>■楽しみといえば月2回ぐらいの休みに躰沢で華道を習いに行くこと。これは電車の車掌になってからは甲府でも習っていた。</p> <p>■勤めて3年になるころ、バス会社、タクシー会社、峡西電気鉄道は一つの会社となり社名が変わった。それから電車¹⁾の車掌になった。</p> <p>■甲府市上石田駅から青柳駅の往復の毎日となった。バスのときと同じように早番、遅番があり、8時間労働で給料もほとんど変わりなく14、5円ぐらい。当時車掌は男性が10人、女性は20人ぐらい。</p> <p>■戦時中なので男性の職員は少なくなり、なんでも女性がしなければならなかった。私は車掌、出札係、切符の販売の仕事をした。運転手となった女性もいた。</p> <p>■常に乗客は満員で定員は60人ぐらいであり、窓にぶら下がっている人もいた。主に学生が多いが闇屋も多く、警察に捕まり米など没収されていた。</p> <p>■電車と人、電車と車の事故などがあると長い時間動かないこともあった。</p>
<p>昭和 20 年 (1945)</p>	<p>■7月6日甲府空襲</p> <p>■8月終戦</p>	<p>■空襲の日は家に居たが七面山に逃げた。</p> <p>次の日出勤しても電車は動かないが、上石田から青柳までは被害がなかったので、2日後電車は動き仕事となった。</p> <p>■仕事中青柳の駅に着いたとき終戦を知った。戦争に負けたことはとても悔しく皆泣いた。</p> <p>■電車の乗客は大きな荷物を背負った闇屋が多く何でも売っていたし、また物々交換もあった。青柳、小笠原あたりから大きな荷物を背負って甲府、甲府から東京方面に行き、また、東京から大きな荷物を背負ってくる。</p> <p>■終戦になり男性職員が帰ってくるが私は結婚するまで4年間勤めた。</p> <p>■戦後、玉幡（現・甲斐市）に山梨航空機関学校航空整備士養成の専門校があった²⁾。そこにアメリカ軍人が住んでいて、その軍人たちは乗車券なしで自由に乗り降りする。そしてなかには酒を飲んで暴れる人もいた。</p>
<p>昭和 23 年 (1948)</p>	<p>■5月結婚</p>	<p>■夫は同じ会社の電車の運転手をしていた。夫の実家である竜王町（現・甲斐市）に夫の母と同居。仕事を続けたいと思っていたが、目の不自由な義母の面倒を見なけ</p>

昭和 24 年 (1949)	■10 月長男誕生	ればならないので結婚と同時に退職。 ■桃園(現・南アルプス市)のお産婆さんに来てもらう。
昭和 26 年 (1951)	■11 月長女誕生	■長男をみてもらうので実家(鰍沢)に帰りお産婆(寺井)さんに来てもらう。
昭和 29 年 (1954)	■2 月次女誕生	■上の 2 人をみてもらうので実家に帰り同じお産婆さんに来てもらう。
昭和 31 年 (1956)	■転居 ■ポーラ化粧品使い始める	■夫の母も亡くなり、子どもが小学校に入学するのを機会に、私の実家が空き家となっていたので鰍沢に転居したが、1 年半後には夫の意向で鰍沢の公営住宅に入居。 ■自分の顔がしもやけになったり、そばかすやしみも増えてきたりと気になっていた。料理屋をしていた友達に勧められるままにポーラ化粧品を使っていた。セールスの仕事をしてみないかと勧められて、「私が使ってよかったらね」と言いながら 3 年使ってみた。効果が表れたのでこれならやってもいいかなと考えた。
昭和 34 年 (1959)	■化粧品セールス 女性もセールスマンという時代	■本格的に自転車で化粧品のセールスを始めた。当時はクリームなど量り売り。まもなく入れ物は瓶詰め代わりに、その後チューブにも代わる。小笠原(現・南アルプス市)にポーラ化粧品小笠原営業所を持ち、セールスの方が 15、6 人いたが、夫の反対もあって営業所は 6 年で閉じることにした。
昭和 40 年 (1965)	■他の営業所に所属	■自分は化粧品のセールスマンとして他の営業所に所属した。所属した営業所がその後 3 か所変わる。営業所はノルマがあるので、達成できない営業所は閉鎖となったので。 ■3 人の子どもたちにより良い教育をつけるため、一生懸命働きお客さんも増えていった。
昭和 50 年 (1975)	■夫病気	■夫が病に倒れてからは、夫を看ながらも、一生懸命セールスの仕事をして売り上げを伸ばしていった。
昭和 58 年 (1983)	■1 月、本社で表彰	■自分の売り上げの累積額が 5 千万円に達し、本社に招待され、帝国ホテルに泊まり、表彰された。
平成元年 (1987)	■家を新築	■子どもたちも巣立ち、東南湖(現・南アルプス市)に私が土地を買い、長男が家を新築したので入居しようと思ったが、夫はどうしても反対、現在長男が住んでいる。
平成 5 年 (1991)	■1 月、本社で表彰	■売上げ累積額 1 億円を達成し、東京の本社で表彰される。ご褒美はテレビと、九州 2 泊 3 日の旅行をプレゼントされ楽しんだ。
平成 11 年 (1999)	■夫死去	■25 年間の闘病生活だった。いろいろ苦労はあったがボランティア活動も続けられた。
平成 23 年	■1 月、本社で表彰	■永年勤続 50 年の表彰を東京の本社で受ける。ご褒美

(2011) 平成 25 年 (2013) 平成 27 年 (2015)	■2 月表彰 ■現在ポーラ化粧品の甲府営業所に所属	はホテル宿泊と切子の置時計だった。 ■36 年間ボランティア活動「奉仕の会」（病院や施設等に出向きつくろいものをしたり、料理等をする）が認められ町から表彰を受ける。 ■お客様に支えられポーラ化粧品のセールスをしている。お客さんの家に行くと「あなたが来ると明るくなって楽しい」と言われるとうれしい。始めてから 56 年、最近ではお客様から電話が来たらお届けするというようなことが多い。現在でもこのようにお仕事ができることへ感謝。
--	----------------------------------	---

第 1 回聞き取り 平成 27 年 5 月 16 日 南アルプス市若草生涯学習センターにて
 聞き手 池田政子、佐々木文子

第 2 回聞き取り 平成 28 年 1 月 16 日 ファミリーレストラン（南アルプス市）にて
 聞き手 佐々木文子

<文責 佐々木文子>

[注]

1) 通称ボロ電。同線のルーツは大正 14 年に峡西地方の事業家・金丸宗之助らによって設立された甲府電車軌道。大正 15 年に甲府～鰍沢までの軌道敷設免許を取得し、昭和 5 年に貢川～大井間、昭和 7 年には甲府駅前～追分間が開業。しかし、昭和 11 年に甲斐青柳（追分から改称）～鰍沢間の免許は失効。この間、社名は山梨電気鉄道（昭和 4 年）、峡西電気鉄道（昭和 15 年）へと変更。昭和 20 年には戦時統合で山梨交通電車線。昭和 30 年代に入ると利用者減少のため、37 年 6 月運転開始から 32 年で全線廃止。

電車線は、甲府駅前から舞鶴通りを南下し、検察庁南交差点を右折して荒川橋へ、この先は専用軌道となり、貢川、玉幡を経て釜無川を渡り、現在の南アルプス市（今諏訪、西野、在家塚、桃園、小笠原）を南下して終点の甲斐青柳へと到着するルート。この間の営業距離は 20・2 キロ（廃線時）であり、所要時間約 55 分で運行され、28（廃線時）の駅が設けられていた。廃線後、専用軌道跡は県道に転用され、地元では今なお「廃棄道」と呼ばれることも多い。

2) 通称玉幡飛行場。山梨航空技術学校は昭和 14 年設立。翌 15 年には熊谷陸軍飛行学校甲府分校が設立され、終戦まで訓練が続いた。国家の要請により昭和 17 年、山梨航空機関学校に改名、航空整備士養成の専門校となる。旧玉幡村にあった 40 平方メートルの航空機を整備する所。

[参考資料]

亦井哲也（取材・編集）『写真アルバム 巨摩の昭和』（2013 年初版発行、樹林舎）



名取喜美枝さんの個人史 美容師、美容室経営者

昭和4年（1929）1月10日生まれ（87歳）
 南アルプス市飯野（旧飯野村）出身 甲府市在住
 家族構成 父、母、姉、本人

年	出来事	内容
昭和4年 (1929)	■1月、誕生	■姉とは一つ違い。家は農業をしていたが、父親は東京の王子製糸（製綿業、現・北区）に単身赴任で働きに行くようになった。そのため東京まで4時間かかって逢いに行くこともあった。
昭和10年 (1935)	■4月、飯野尋常高等小学校入学	■近所のお姉さんが燃料の炭を持ってパーマをかけに行くのをよく見ていた。戦前には非国民と言われていた。
昭和18年 (1943)	■同校卒業（14歳） ■吉田時計に就職	■卒業後、母親は甲府高等女学校へ進学するよう勧めたが、設計士になりたい夢と女子ばかりの学校に抵抗があり、父親が居る東京へ行った。その頃、父親は日野ディーゼルの軍事工場に勤務するようになっており、社宅で生活をしていた。先に就職していた姉と同じ吉田時計に就職した。当時はすでに軍事工場となっていて、高射砲などの軍需品を作っている工場であり、油の匂いで具合が悪くなり、事務の仕事にまわしてもらった。 ■B29から爆撃予告のビラがよくまかれた。庭の防空壕に荷物を隠し、少し離れた防空壕へ避難したりした。日野の軍事工場の事務所は爆撃を逃れた。
昭和20年 (1945)	■終戦 ■故郷へ引き揚げてくる	■終戦を迎える。工場の運動場に集まり、天皇陛下のお言葉を聞いた。負けた、だめだということで、皆泣きだし静かにしていられなかった。4、5日たってから八王子の町で焼けて黒くなった死体を見たり、戦争の悲惨な情景を目のあたりにした。 ■山梨に帰ってくる。甲府までの切符がなかなか買えなかった。すし詰め状態の中、背負えるだけ荷物を背負い乗り込んだが、脱線事故にあい初狩から笹子まで歩くことになった。兵隊さんに励まされたりもした。また、道途中の農家では姉の同級生が持ってきた配給の米をおにぎりにしてもらった。甲府駅から歩いて上石田まで行き、そこから電車（ボロ電） ¹⁾ に乗った。
昭和21年 (1946)	■青年学校へ	■飯野の小学校の一部を借りて開かれた青年学校 ²⁾ へ姉と通い勉強をした。中島先生という校長だった。
昭和22年 (1947)	■美容院「春の屋」へ就職 (～25年10月)	■飯野の春の屋に住み込みで入る。3年間居たが田舎が嫌になり、東京にいた時隣に住んでいた女性を頼りに、逃げるように東京へ行く。しかし、父親に連れ戻される。
昭和23年 (1948)	■美容師国家試験第1回を受け合格する（免許取得）	■第1回美容師試験であった。学科は教科書が1冊しかなかったの、床屋さんが先生になって黒板に書いたことを勉強した。

昭和 25 年 (1950)	■「武井美容院」へ就職(12月)	医学・公衆衛生的な内容がほとんどだった。甲府市立朝日小学校が会場だった。火鉢にコテを入れ熱くして、髪の毛のウェーブをつけた。 ■甲府市の銀座通りにあり、御主人は理容師で奥さんは美容師であった。美容関係の材料も販売していた。住み込みで働いて技術を身につけていった。全国で初めての280円という安い価格のパーマということで、店は繁盛した。父親は採れた野菜を届けてくれた。
昭和 28 年 (1953)	■12月25日、「ウイト美容室」を開店する	■甲府駅前(元・橘町、現・丸の内2丁目)に開店する。資金はいとこに工面してもらった。しかし土地の貸借のトラブルで立ち退きを迫られ、半年でたたんでしまう。
昭和 29 年 (1954)	■「武井美容室」へ戻る	■東京から講習会の講師にきた杉山初江先生の助手をするようになった。それがきっかけで月一回休みの日には先生の所へ勉強に、列車で片道4時間かけて通った。東京での流行が山梨に伝わるのは2年後だったので、新しいスタイル、流行を早く身に付けるため、10年間修業のつもりで通った。
昭和 29 年 (1954)	■「ウイト美容室」を再開店	■甲府市オリオン通り(現・丸の内1丁目旧パセオ角の2階)。オリオン通りは毎日お祭りのように賑わっていた。
昭和 32 年 (1957)	■「研精会コンクール」出場	■研精会は当時東京でトップの山野愛子 ³⁾ 、山崎伊久江 ⁴⁾ 、杉山初江などの先生がやっていた勉強会で、もっと若い人を増やしたいということで会員を選ぶためのコンクールだった。第3位に入賞し、正会員となる。
昭和 33 年 (1958)	■「ウイト美容室」拡張移転	■元・紅梅町(現・丸の内1丁目旧パセオ西)。
昭和 34 年 (1959)	■「ウイト美容室」土地付き店舗購入、改築	■甲府市丸の内1-20-20の現在の場所に移転する。女性の服装と共に、ヘアスタイルも流行がある。着物の時代は、髪の毛をアップすることが流行した。住み込みの従業員は多い時は20人もおり、二段ベッドを利用していた。父母も従業員として、店の洗濯や食事の支度など働いた。正月を迎える暮れは、気が付くと元旦の朝を迎えていた。その様子をYBS、UTY、NHKなどマスコミが取材によく来ていた。
昭和 35 年 (1960)	■山野愛子主宰「花嫁着付けコンクール」銅賞を受賞	■この頃、東京での数々のヘアーコンクールやショーに参加、美容師仲間から、“コンクール荒し”と呼ばれるほどの実績を上げたが、賞状を飾っておくのは嫌いだった。
昭和 38 年 (1963)	■山崎伊久江、弱酸性パーマ「ベル・ジュバンス」を発表	■お客様の髪の毛がパーマ(PH9.7)や毛染によってロットと一緒に切れる事態を経験していたので、弱酸性パーマ液(PH4.5)に関心を持ち、山崎先生の元に通い科学的に研究し、「ベル・ジュバンス」の講師となる。ヨーロッパ美容技術交流研修旅行にも参加。日本での山崎先生のヘアーショーにも何回か参加。
昭和 44 年 (1969)	■第5回「花粧会」コンクール、菊花賞(第1位)受賞	■「百日草」という業界誌が主催した花嫁着付けのコンクールで全国から参加者があり、入賞して初めて会員になれた。

昭和 47 年 (1972)	■店名を改名	■ベル・ジュバンスの店「クリニックサロン・ウィット」に
昭和 48 年 (1973)	■創業 20 周年事業開催	■談露館（甲府市丸の内 1 丁目）で「ヘア・ショー」を開催
昭和 55 年 (1980)	■山崎伊久江美容研究会「ロンドン世界大会」に出場	■アルバートホールにて、イギリス人モデルの和装から洋装への早変わりを実演
昭和 58 年 (1983)	■メンズ・クリニック「ウィット」を開店	■男性にもおしゃれに関心を持ってもらいたいと思い、脚のエステと頭髪の店を開店した。しかし時代が早く十分な理解がされず赤字経営になり 6 年で閉店した。
昭和 59 年 (1984)	■全国婚礼美容家協会講師となる	■全国の美容室経営店が集まって、婚礼着付けについて勉強する会
平成元年 (1989)	■JHFA（日本ヘアファッション協会）山梨支部の立ち上げ	■県内 20 店舗が加入し、従業員のための研修会等を行った。その後、JHFA 会長の指導により、店舗の大改造を行う（平成 3 年）。
平成 3 年 (1991)	■「章和会」会長に就任	■アピオ（昭和町）の創業者、秋山章氏 ⁵⁾ が立ち上げた花嫁の装い（和・洋）を研究する会で勉強してきたが、この年 4 代目会長となる（～平成 17 年、章和会は平成 19 年に解散）。
平成 5 年 (1993)	■創業 40 周年記念事業開催	■アピオにて、ウィットのスタッフが和装の着付け・ヘアスタイルの作品をつくり、東京から招いた講師による洋装の着付け・ヘアスタイルと対照させる発表会を行った。
平成 11 年 (1999)	■章和会 30 周年記念事業	■会長としてアピオで「ザ・はなよめエキジビション」を開催。
平成 12 年 (2000)	■山梨県商工会議所女性会連合会入会	■他職種の女性たちと交流し自分を高め、社会をよく知りたかった。
平成 13 年 (2001)	■全国植樹祭、山梨で開催	■コンパニオンのヘア指導を委託される。
平成 15 年 (2003)	■創業 50 周年記念事業開催	■アピオにて「ウィット美容室創業 50 周年『祭り』」を開催。女性和楽器奏者の演奏、秋山章氏が名取喜美枝の人生を作詞した歌曲による創作声楽・舞踏の上演など。
平成 16 年 (2004)	■芸術家集団「銀の会」発足、会長となる	■秋山氏の呼びかけによる能面師、彫金師等県内芸術家の懇親会で、展覧会開催の協力、芸術についての語り合いをした。
平成 20 年 (2008)	■蕩墨書道会入会	■父親が書をやっている、自分もやりたいとずっと思っていた。少しゆとりが出てきた時、中込先生 ⁶⁾ の個展を見てひかれ入会。
平成 24 年 (2012)	■山梨宝石専門学校ファッションショー指導	■ヘアメイクとワーキングの指導
平成 25 年 (2013 年)	■BPW（有職婦人クラブ）世界大会（北京）に出席 ■山梨県美容専門学校、ロスアンゼルス研修の下見に同行	■BPW ⁷⁾ には 40 年くらい前、秋山二葉さん（時事新聞記者）や清水友代さん（産婦人科医）などがいた当時、誘われて、多様な職業の女性たちとの交流を求めて参加した。 ■姪の息子（店の跡継ぎの予定）が学んでいる美容師養成学校へ、美容学校長、美容組合長たちの視察に同行した。山梨美容専門学校には校長や講師を紹介してきたが、昨年の新築の際、自分の蔵書（美人画、美術書）50 冊以上を寄付した。

	<p>■開店 60 年目を迎える</p>	<p>■昭和 48 年頃から、勤務時間、給料、社会保険や失業保険への加入など、従業員の待遇改善を進めてきた。県内のほとんどの美容室では、現在も社会保険などには未加入の状態。</p> <p>■良い美容師の条件として、自分自身がきれいな服装と髪をして接客することが大事である。常に美しさを追及する心が必要である。そのために美術館めぐりをしたり書道を習得したり文化に積極的に触れる生活をしている。</p> <p>■美容師の社会的地位向上のために努力したい。</p>
--	----------------------	---

聞き取り

第 1 回：平成 28 年 1 月 31 日 ウィット美容室にて

聞き手 池田政子 古明地喜代美 清水武子 三科恵美子 山中淑子 藤本ひろみ

第 2 回：平成 28 年 2 月 11 日 ウィット美容室にて 聞き手 池田政子

第 3 回：平成 28 年 3 月 7 日 ウィット美容室近くの喫茶店にて 聞き手 池田政子

＜ 文責 藤本ひろみ・池田政子 ＞

[注]

- 1) 甲府市の甲府駅前駅から増穂町（現・富士川町）の甲斐青柳駅までの鉄道路線（山梨交通電車線）。親しみを込めて「ボロ電」と呼ばれていた。本報告書「花輪相子さんの個人史」を参照。
- 2) 1935 年公布の「青年学校令」に基づき設置。当時の義務教育である尋常小学校 6 年を卒業後、高等小学校や中等教育学校（中学校・高等女学校・実業学校）に進学せず勤労する青少年に社会教育を行った。太平洋戦争終結後、1947 年に学校教育法が施行されるまで存続。山梨県では、昭和 18 年、村単位の青年学校が運営困難となり統合をすすめる中で、源・飯野・在家塚・西野・今諏訪・豊（全て現・南アルプス市）の六青年学校も統合して西部青年学校が発足させたが、軍事教練、食糧増産、軍事飛行場建設（ロタ工事）のための労働がほとんどであった。戦後昭和 21 年 4 月に再び単村の青年学校が設けられ、昭和 23 年 3 月に廃校となった。飯野地区では飯野青年学校が校長を中島源重として開校された。
- 3) 美容家（東京都出身、1909 年～1995 年）。日本初のパーマ技術指導者として、日本にパーマ技術を普及させ、日本美容界のパイオニアとして活躍し、女性として初めて勲三等瑞宝章を受章。日本美容師総連合会会長、山野美容芸術短期大学学長など歴任。
- 4) 美容家（福島県郡山市出身、1918 年～2004 年）。昭和 37 年、世界に先駆けて弱酸性パーマを研究開発。弱酸性美容法「ベル・ジュバンス」を普及させる。天皇（当時皇太子）婚約発表時の美智子妃の衣紋才滑らかしを担当。東京都美容国家試験実施試験委員、全日本婚礼美容家協会理事、職業訓練校「ビューティーアカデミーヤマザキ」校長など歴任。東京都優秀技能賞（1991 年）、卓越した技能賞（現代の名工）受賞（1994 年）、勲六等瑞宝章（1997 年）。
- 5) 友禅作家、アピオ甲府（昭和町）の創業者（1931 年～）。京都にて染織工芸を学び、昭和 29 年高級婚礼衣装創作卸の株式会社丸章を設立。花嫁着付けコンクール「千葉益子賞」において友禅うちかけでトップの座を独占し続け、魅力を広めた。長嶋茂雄、高橋英樹夫妻などスポーツ・芸能界のスターの婚礼衣装を多数制作。日本伝統儀式衣装友禅保存協会常任理事、日本染織工芸研究会常任理事、日本伝統儀式日本の結婚式を守る会専務理事など歴任。
- 6) 代表は中込蘇氏（山梨県旧八代町出身、1953 年～）。山梨篆刻協会副理事長。
- 7) 1951 年、東京在住の働く女性たちが女性の地位向上を目指して『東京有職婦人クラブ』を立ち上げたのが始まり。1958 年には日本有職婦人クラブ全国連合会が発足、1959 年に IFBPW（現 BPW International）に加盟、2009 年“特定非営利活動法人日本 BPW 連合”となる。次世代の女性育成事業、男女の賃金格差の可視化活動、東日本大震災復興支援活動などを展開。BPW International 世界大会（コンGRESS）に日本代表が出席。

[参考文献]

白根町誌編纂委員会（編）『白根町誌』（1969 年）白根町発行

山梨県立大学地域研究交流センター 支援事業
やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト
2015年度研究報告書

編集責任 池田政子（地域研究交流センター・プロジェクト代表）
伏見正江（看護学部）
編集協力 山中淑子・吉原五鈴子・藤本ひろみ・佐々木文子
発行 山梨県立大学・やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト
山梨県甲府市飯田 5-11-1
電話 055（224）5260（学務課 地域研究交流センター担当）
発行日 2016年（平成28年）4月20日

